

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 12

第 64・65 次調査（南陽寺跡）

2016

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

## 序 文

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業は、昭和43年に朝倉館跡の調査に着手して以来、約45年間にわたって行われてきました。現在に至るまで、戦国期の城下町の構造や当時の生活・文化の様子が徐々に明らかになってきております。

本報告書は、朝倉館跡北東の高台にある南陽寺跡の発掘成果をまとめたものです。南陽寺は、14世紀中頃に創建されたと伝えられる、越前朝倉氏の歴史のなかで比較的初期の寺院のひとつです。代々朝倉家当主の女子が入る尼寺として栄え、永禄11年(1568)3月には、後の室町幕府15代將軍足利義昭を迎えて観桜の宴が催されたことでも知られています。なお、この時に造営されたと推定されている南陽寺跡庭園は、昭和5年(1930)に国の名勝に、さらに平成3年(1991)には特別名勝に指定されています。

発掘調査の結果、全体に削平されていたものの、建物の配置や規模をおおよそ明らかにすることができました。また、宗教的な遺物が少ない一方、大量に土師質皿が出土したことは、迎賓館的な性格を物語っているといえるでしょう。

最後になりましたが、事業の実施から報告書の刊行に至るまで、文化庁をはじめ関係各位、地元の皆様には多大なご支援とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

平成28年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所長 工藤俊樹

# 目 次

## I 事業概要

1 調査の目的	1
2 調査の経過	1
3 調査の方法および組織	5
4 本報告書について	7

## II 調査の経過と概要

1 はじめに	9
2 第64次発掘調査	10
3 第65次発掘調査	10

## III 遺 構

1 第64次発掘調査	15
2 第65次発掘調査	19

## IV 遺 物

## V ま と め

## VI 論 考

<論考1> 文献資料にみる南陽寺	43
<論考2> 南陽寺跡庭園にみる庭園鑑賞	49
<論考3> 南陽寺の空間構成について	65

# 図 版 目 次

## 口 絵

口絵1 南陽寺跡調査区全景

口絵2 出土遺物

## 図 面

第1図 南陽寺跡発掘調査区全体図  
 第2図 遺構詳細図(1)  
 第3図 遺構詳細図(2)  
 第4図 遺構詳細図(3)  
 第5図 遺構詳細図(4)  
 第6図 遺構詳細図(5)  
 第7図 遺構詳細図(6)  
 第8図 第64次調査区土層図  
 第9図 第65次調査区土層図  
 第10図 出土遺物(1)

第11図 出土遺物(2)  
 第12図 出土遺物(3)  
 第13図 出土遺物(4)  
 第14図 出土遺物(5)  
 第15図 出土遺物(6)  
 第16図 出土遺物(7)  
 第17図 出土遺物(8)  
 第18図 出土遺物(9)  
 第19図 出土遺物(10)

## 写 真

PL. 1 第64・65次調査区全景  
 PL. 2 第64次調査 A・B地区  
 PL. 3 第64次調査 B・D地区  
 PL. 4 第64次調査 C・D・E地区  
 PL. 5 第64・65次調査 E・F・G地区  
 PL. 6 第65次調査 G地区  
 PL. 7 第64次調査 G地区  
 PL. 8 第65次調査 F・I地区  
 PL. 9 出土遺物(1)

PL.10 出土遺物(2)  
 PL.11 出土遺物(3)  
 PL.12 出土遺物(4)  
 PL.13 出土遺物(5)  
 PL.14 出土遺物(6)  
 PL.15 出土遺物(7)  
 PL.16 出土遺物(8)  
 PL.17 出土遺物(9)  
 PL.18 出土遺物(10)

# 挿 図 目 次

挿図1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図	4	挿図6 第64次調査風景3	12
挿図2 南陽寺跡調査区周辺地形	9	挿図7 第64次調査風景4	12
挿図3 グリッド設定図	11	挿図8 第64次調査風景5	13
挿図4 第64次調査風景1	12	挿図9 第64次調査風景6	13
挿図5 第64次調査風景2	12	挿図10 第64次調査風景7	13

挿図11	第65次調査風景1	14	挿図27	第64・65次出上越前焼人糞押印型一覧	24
挿図12	第65次調査風景2	14	挿図28	墨書の赤外線写真	26
挿図13	第65次調査風景3	14	挿図29	南陽寺跡庭園(西より)	49
挿図14	第65次調査風景4	14	挿図30	南陽寺跡庭園(北より)	49
挿図15	地鎮とみられる土師質皿	16	挿図31	南陽寺跡の糸桜(しだれ桜)	50
挿図16	SX3750土層断面図・写真	16	挿図32	南陽寺跡庭園平面図	53
挿図17	庭園SG3700	17	挿図33	写真集(表紙)	53
挿図18	庭園下層玉砂利敷き(SX3722)	17	挿図34	写真集(「南陽寺庭園復元工事」のページ)	53
挿図19	庭園西側のピット群検出状況	17	挿図35	南陽寺跡庭園の滝石組	63
挿図20	仏殿とみられる建物(SB3722)推定図	18	挿図36	諏訪館跡庭園の滝石組	63
挿図21	SB3727・3728周辺笏谷石使用状況	20	挿図37	朝倉館跡庭園の滝石組	63
挿図22	SB3728縁束	20	挿図38	湯殿跡庭園の滝石組	63
挿図23	SF3734	21	挿図39	南陽寺跡の主な遺構と推定される機能・名称	67
挿図24	SF3735底面検出状況	21			
挿図25	SF3735立面図	21			
挿図26	SX3789梵鐘の鋳型検出状況	21			

## 表 目 次

表1	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧	2	表5	昭和42年度写真集一覧	54
表2	主要遺構一覧	22	表6	構成要素の比較(庭の配置と鑑賞方向)	61
表3	出土遺物一覧	23	表7	構成要素の比較(池)	62
表4	遺物観察表	35			

付図 第64・65次調査遺構全測図

# I 事業概要

## 1 調査の目的

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名越前朝倉氏が領国支配の拠点とした所で、当主の館を中心として山城、城戸、一族・家臣の屋敷、町屋、寺院等の遺構が一体となって残されており、我が国の歴史を知るうえで欠くことのできない国民共有の文化遺産として、永久に保存するため特別史跡に指定し、公有化を進めている。

遺跡保護の目的は、単に遺構を保存するだけにとどまらず、遺跡を調査してその成果を広く公表し、一般の歴史認識に役立てて活用することにある。その方策として、遺跡の中に身を置いて「自ら歴史と生きた対話」のできる史跡公園の完成を目指している。こうした理念のもとに、一乗谷朝倉氏遺跡の調査と整備が進められているが、発掘調査は当時の一乗谷の規模や構造、人々の暮らしぶりの実態等を直接的に明らかにする最も有力な方法と位置付けられる。計画的かつ連続的になされた発掘調査の成果に基づいて着実な環境整備が施され、かつ適切な維持管理のもとに遺跡を公開する、その前提条件のひとつとしてこれまで調査が続けられてきた。

本報告書は、一乗谷朝倉氏遺跡に対する計画的な発掘調査の結果を報告したものであり、その第12冊にあたる。その他、遺跡・河川の整備事業や中山間事業などの現状変更に伴う発掘調査の報告は別途なされている。なお、各年次の発掘・整備事業の概要は当該年次の概報として公開されているが、本書で正式に調査所見を報告し、内容については本報告書が優先する。

## 2 調査の経過

一乗谷朝倉氏遺跡の計画的な調査は、昭和42年度から旧足羽町教育委員会を事業主体として始められた。昭和46年度からは、福井県教育委員会がこれを引き継いで発掘調査と環境整備事業を実施し、福井市が用地取得と遺跡の管理を担当するという機能分担で事業を進めている。同年7月、278haという広大な地域が国の特別史跡に格上げ指定され、福井県は昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」のもと、同年4月に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所を設置し、以後5か年計画により継続して発掘調査と環境整備を実施した。これ以前の旧足羽町と福井県教育委員会による調査を第1次5か年計画とし、以後昭和61年度まで4次にわたって5か年計画が進められた。第1次5か年計画では、朝倉氏の最後の当主である朝倉義景の館跡を中心として調査を行った。この間、昭和45年には土地改良事業に伴い、御所・安養寺や小林谷において緊急確認調査を行い、水田下の遺構の保存状態が良好であることを確認し、特別史跡指定の機運を高めた。第2次5か年計画では、それに引き続き平井地係の武家屋敷や朝倉義景館跡に隣接する中の御殿跡、赤瀬地係に所在するサイゴ寺跡、指定地の北部に位置する颯町地係や出雲谷地係など、武家屋敷、寺院、町屋などとみられるいくつかの地点を選択して一乗谷の概況を把握する試みがなされた。第3次5か年計画では、一乗谷川の西側に敷設されることになった県道鯖江・美山線の改良工事に関連して、その両側の平地部分を計画的に調査した。引き続き第4次5か年計画では、その最初の4年で指定地の中央に位置する一乗谷川より西側の赤瀬・奥間野・吉野本地係

表1 特別史跡—兼谷朝倉氏遺跡発掘調査一覧

年度	西暦	調査年度	調査内容	調査次数	調査場所・住所	発掘	報告書	面積
昭和42年	1967	第1次5ヵ年	一乗谷の発掘調査が福島の戦跡に伴う事前調査から始まる。戦後復興期との関係は、戦中や戦後の復旧に資する役割を果たした。	第1次	遺跡	I	I	1,800
昭和43年	1968			第2次	堀内	I	I	2,065
昭和44年	1969			第3次	堀内	I	I	1,953
昭和45年	1970			第4次	堀内	I	I	769
昭和46年	1971			第5次	堀内	I	I	676
昭和47年	1972	第2次5ヵ年	前年発掘の調査が終了し、武家屋敷や町並りの調査を開始する。町並りでは職人の工務場が確認される。	第6次	堀内	V	II	54
昭和48年	1973			第7次	堀内	V	II	1,892
昭和49年	1974			第8次	堀内	V	II	1,340
昭和50年	1975			第9次	堀内	V	II	1,305
昭和51年	1976			第10次	堀内	V	II	172
昭和52年	1977			第11次	堀内	V	II	246
昭和53年	1978			第12次	堀内	V	II	50
昭和54年	1979			第13次	堀内	V	II	170
昭和55年	1980	第3次5ヵ年	平井、月倉、赤澤、奥野地区を中心に、田的の調査を実施。武家屋敷や町並りの様子が明らかとなってくる。遺跡の発掘状況が明確になり、約200～1000点を調査した町並り状況が判明する。	第14次	堀内	V	II	2,426
昭和56年	1981			第15次	堀内	V	II	1,243
昭和57年	1982			第16次	堀内	V	II	538
昭和58年	1983			第17次	堀内	V	II	2,250
昭和59年	1984			第18次	堀内	V	II	42
昭和60年	1985			第19次	堀内	V	II	2,400
昭和61年	1986			第20次	堀内	V	II	353
昭和62年	1987			第21次	堀内	V	II	2,050
昭和63年	1988			第22次	堀内	V	II	2,500
昭和64年	1989			第23次	堀内	V	II	386
昭和65年	1990			第24次	堀内	V	II	2,200
昭和66年	1991			第4次5ヵ年	赤澤、奥野間、宮野水地区を中心に調査。4箇所が特別史跡に指定される。川合農機株式会社武家屋敷、甲斐地蔵では物産品や土器等の出土。発掘された武家屋敷や町並りを調査。発掘された武家屋敷や町並りを調査。発掘された武家屋敷や町並りを調査。	第25次	堀内	V
昭和67年	1992	第26次	堀内			V	II	100
昭和68年	1993	第27次	堀内			V	II	1,630
昭和69年	1994	第28次	堀内			V	II	2,831
昭和70年	1995	第29次	堀内			V	II	100
昭和71年	1996	第30次	堀内			V	II	100
昭和72年	1997	第31次	堀内			V	II	850
昭和73年	1998	第32次	堀内			V	II	3,000
昭和74年	1999	第33次	堀内			V	II	18
昭和75年	2000	第34次	堀内			V	II	4,800
昭和76年	2001	第35次	堀内			V	II	4,750
平成2年	1990	中継 第1次10ヵ年 調査	赤澤地区、発掘跡近隣の調査を実施。4箇所が特別史跡に指定される。川合農機株式会社武家屋敷、甲斐地蔵では物産品や土器等の出土。発掘された武家屋敷や町並りを調査。発掘された武家屋敷や町並りを調査。			第36次	堀内	V
平成3年	1991			第37次	堀内	V	II	63
平成4年	1992			第38次	堀内	V	II	3,000
平成5年	1993			第39次	堀内	V	II	100
平成6年	1994			第40次	堀内	V	II	100
平成7年	1995			第41次	堀内	V	II	100
平成8年	1996			第42次	堀内	V	II	100
平成9年	1997			第43次	堀内	V	II	100
平成10年	1998			第44次	堀内	V	II	100
平成11年	1999			第45次	堀内	V	II	100
平成12年	2000			第46次	堀内	V	II	100
平成13年	2001			第47次	堀内	V	II	100
平成14年	2002	第48次	堀内	V	II	100		
平成15年	2003	第49次	堀内	V	II	100		
平成16年	2004	第50次	堀内	V	II	100		
平成17年	2005	第51次	堀内	V	II	100		
平成18年	2006	第52次	堀内	V	II	100		
平成19年	2007	第53次	堀内	V	II	100		
平成20年	2008	第54次	堀内	V	II	100		
平成21年	2009	第55次	堀内	V	II	100		
平成22年	2010	第56次	堀内	V	II	100		
平成23年	2011	第57次	堀内	V	II	100		
平成24年	2012	第58次	堀内	V	II	100		
平成25年	2013	第59次	堀内	V	II	100		
平成26年	2014	第60次	堀内	V	II	100		
平成27年	2015	第61次	堀内	V	II	100		
平成28年	2016	第62次	堀内	V	II	100		
平成29年	2017	第63次	堀内	V	II	100		
平成30年	2018	第64次	堀内	V	II	100		
平成31年	2019	第65次	堀内	V	II	100		
平成32年	2020	第66次	堀内	V	II	100		
平成33年	2021	第67次	堀内	V	II	100		
平成34年	2022	第68次	堀内	V	II	100		
平成35年	2023	第69次	堀内	V	II	100		
平成36年	2024	第70次	堀内	V	II	100		
平成37年	2025	第71次	堀内	V	II	100		
平成38年	2026	第72次	堀内	V	II	100		
平成39年	2027	第73次	堀内	V	II	100		
平成40年	2028	第74次	堀内	V	II	100		
平成41年	2029	第75次	堀内	V	II	100		
平成42年	2030	第76次	堀内	V	II	100		







を集中的に発掘調査し、この地区の道路、武家屋敷、寺院、町屋等の極めて良好な遺構を検出し、大量の遺物が出土するなど大きな成果をあげた。最後の5年日は再び平井地系の武家屋敷を調査し、さらに一乗谷の内外を区切る下城戸本体の調査に入った。

翌昭和62年度から中期第1次10か年計画として、巨大な土塁をもつ上城戸跡や今回報告する南陽寺跡、西山光照寺跡、御所・安養寺跡などの大規模な寺院、そして中惣・権殿・河合殿などの武家屋敷・町屋跡を計画的に調査し、遺跡内の各地に所在する大規模で特徴的な遺構を究明した。

平成9年度から中期第2次10か年計画に入り、町並立体復原地区に隣接する一乗谷川より西側部分の八地谷川南岸の地が連続的に発掘調査され、この地区の街路や武家屋敷の構造を明らかにした。途中、平成16年度は、雲正寺地系の発掘中に福井豪雨により被災したため、発掘調査は中断し、災害復旧に全力を注ぐこととなった。

翌平成17年度から改めて中期第3次10か年計画を施行し、中断した調査を再開した。平成19年度からは朝倉館跡から上城戸跡に至る遊歩道沿いの整備を進める目的で米津・門ノ内を連続的に発掘し、屋敷区画内において刀装具製作工房、ガラス玉製作工房の存在が明らかとなった。平成22年度からは、新たに公有地となった西山光照寺跡の平地部北半の調査を行い、大規模な石垣や建物の存在を確認した。

平成24年度からは、前年度に改定した「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘・整備基本計画」に基づき、城下町の防衛の要である上城戸跡について、城戸内外をつなぐ道路と城戸入口の構造および城戸周辺の様相を面的に解明する目的でトレンチ調査を実施し、道路の一部や屋敷地の存在を確認して現在に至っている。

### 3 調査の方法および組織

発掘調査・環境整備は、国庫補助事業として福井県が直接実施している。その実施機関として、福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所(昭和47年4月1日～昭和56年8月19日)、およびこれを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館(昭和56年8月20日開館。平成4年4月1日から、名称が一乗谷朝倉氏遺跡資料館となった)が設置され、その任にあたってきたが、平成24年度からは、県の機構改革により同資料館が教育庁から知事部局に移管となったことに伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが朝倉氏遺跡グループを設けて引き継いでいる。また、当初から「朝倉氏史跡公園基本構想」に基づき福井県朝倉氏遺跡調査研究協議会(平成8年度から、名称が福井県朝倉氏遺跡研究協議会となった)が設置され、その指導と助言を受けている。

本報告書に関係する年度における組織、および経費を以下に記す。

○平成元年度(第64・65次調査)

#### 朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員	青園謙二郎	(福井テレビ副会長・郷土史)
委員	石井 進	(東京大学教授・歴史)
委員	木原 啓吉	(千葉大学教授・都市環境)
委員	小林健太郎	(滋賀大学教授・歴史地理)
委員	近藤 公夫	(奈良女子大学教授・造園)

委員	重松 明久	(中津女子短期大学学長・歴史 平成元年4月4日死去)
委員	田畑 貞寿	(千葉大学教授・造園)
委員	玉置 伸吾	(福井大学教授・環境計画)
委員	坪井 清足	(大阪文化財センター理事長・考古)
委員	平井 聖	(昭和女子大学教授・建築)
委員	石田 昇	(朝倉氏遺跡保存協会長)
委員	藤田 武信	(城戸ノ内区長)

#### 一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長	藤原 武二	(造園)
次長	高橋 悟	(事務)
主任文化財調査員	水野 和雄	(考古) 主査 岩田 隆 (考古)
主査	吉岡 泰英	(建築) 主査 南洋一郎 (考古)
主査	佐藤 丰	(歴史) 文化財調査員 月輪 泰 (考古)
非常勤嘱託	中谷 賢	(事務) 非常勤嘱託 舟澤 茂樹 (学芸)
経費	平成元年度 発掘調査経費	32,397千円 (3,500㎡ 内64・65次調査3,200㎡)

○平成25～27年度 (本報告書作成)

#### 朝倉氏遺跡研究協議会

委員	池上 裕子	(成蹊大学名誉教授・歴史)	
委員	小野 正敏	(大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事・考古)	
委員	高橋 康夫*	(京大名誉教授・建築)	
委員	高瀬 要一	(和歌山県立紀伊風土記の丘館長・造園)	
委員	神吉 紀世子	(京大大学院教授・建築)	
委員	久保 智康	(元京都国立博物館学芸企画室長・考古)	
委員	高妻 洋成*	(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長・保存科学)	
委員	富島 義幸*	(京大大学院准教授・建築)	
委員	小野 健吉*	(奈良文化財研究所副所長・遺跡整備)	
委員	小浦 久子*	(神戸芸術工科大学教授・都市計画)	
委員	水野 和雄*	(元福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館長・考古)	
委員	網谷 克彦*	(福井県陶芸館長・考古)	
委員	数本 金*	(元福井県立岩峽高等学校長)	
委員	吉田 智*	(福井市明道中学校長)	
委員	岸田 清	(朝倉氏遺跡保存協会長)	
委員	高橋 百合子*	(公募)	委員 山下 忠五郎* (公募)

(\*高橋康夫・高橋百合子・山下委員の任期は平成26年1月24日まで、富島委員の任期は同1月25日から。水野・数本委員の任期は同1月25日から平成28年1月24日まで。小野健吉・小浦・網谷・吉田委員は同1月25日から)

## 埋蔵文化財調査センター

所 長 畠中 清隆\* 所 長 工藤 俊樹\*  
次 長 富山 正明\* 非常勤嘱託 上出 嘉代子\* (事務)  
非常勤嘱託 塚塚 美佐子\* (事務)

(\*畠中は平成25・26年度。工藤は同27年度。富山は同25年度。上出は同25年度、塚塚は同26・27年度で資料館併任)

## 朝倉氏遺跡グループ

主 査 木村 孝一郎\* (考古) 文化財調査員 今出 瑞穂\* (建築)  
(\*木村は平成26・27年度、今出は同25年度で資料館併任。25～27年度は資料館の主任以下が併任)

## 一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 (嘱託) 吉岡 泰英* (建築)	館 長 畠中 清隆* (考古)
副 館 長 月輪 泰 (考古)	次 長 田中 典子* (事務)
次 長 井上 順子* (事務)	主 任 櫛部 正典* (考古)
主 任 川越 光洋* (考古)	主 任 宮永 一美* (歴史)
主 任 田中 祐二* (考古)	主 査 木村 孝一郎* (考古)
主 査 松本 泰典* (考古)	文化財調査員 藤田 若菜* (造園)
文化財調査員 熊谷 透* (建築)	文庫調査専門員 佐藤 圭 (歴史)
非常勤嘱託 松村 良行* (学芸)	非常勤嘱託 辻岡 良彦* (学芸)
非常勤嘱託 眞保 弘恵 (事務)	

(\*吉岡は平成25・26年度、畠中は27年度。田中典・辻岡は同25年度。井上・熊谷・松村は同26・27年度。櫛部は同25・26年度。田中泰は27年度。木村は同25年度。主任・主査・文化財調査員は朝倉氏遺跡グループ併任)

経費 平成25年度 発掘調査費 35,078千円 (890㎡、報告書遺物整理)  
平成26年度 発掘調査費 17,011千円 (報告書遺物整理、報告書刊行)  
平成27年度 発掘調査費 16,134千円 (報告書遺物整理、報告書刊行)

発掘作業には、地元をはじめ地域の方々の参加・ご協力を得た。遺物整理については、埋蔵文化財調査センター整理作業員がこれにあたった。

## 4 本報告書について

### 内容

本報告書は、国庫補助事業として福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が南陽寺跡において平成元年度に実施した、第64・65次調査の発掘調査報告書である。

### 執筆

本報告書は、各次の発掘調査記録をもとに、次の分担により執筆し、全体の編集は田中祐二が担当した。I 月輪泰、II・III 櫛部正典、IV 櫛部正典(越前焼、土師質土器)、松本泰典(瀬戸・美濃焼、瓦質製品)、月輪泰(外国製陶磁器)、川越光洋(金属製品、木製品)、田中祐二(石製品)、田邊朋宏(石製品【古墳時代の石棺】)、V 櫛部正典、VI 佐藤圭(論考1)、藤田若菜(論考2)、熊谷透(論考3)  
(\*福井市文化財保護センター。実測および写真撮影も同氏による)

## 図面

遺構平面図は、アジア航測(株)に委託し、空中写真測量等により作成したものを用いた。実測図・遺構図等については当時の職員と各担当者で作成し、遺物整理員がこれを助けた。挿図として使用した地形図は、昭和44年に旧足羽町がバシフィック航業(株)に委託して作成した基本図(1/1,000)を使用した。

## その他

本報告書の遺構図に用いた座標は、国土地院系「第VI系」である。

遺構番号の頭に付した記号は以下の分類による。

SA：土塁・塀・柵、SB：建物、SD：溝・濠、SE：井戸、SF：石積施設、SG：庭園(池)、SI：門、SK：土壇、SS：道路、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他の遺構

本報告書の作成にあたっては、発掘調査を担当された岩田隆氏の全面的なご協力を得た。また、中原義史・藤澤良祐・水野和雄の各氏よりご教示をいただいた。

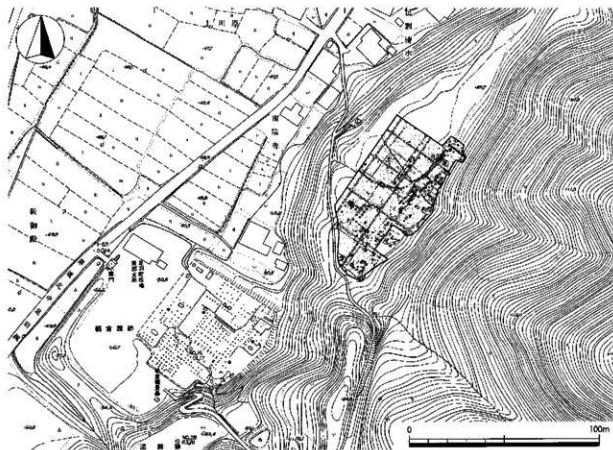
出土遺物、ならびに図面、写真等は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

## II 調査の経過と概要

### 1 はじめに

調査対象地は、福井市城戸ノ内町字難陽寺地係で、一乗谷東山麓の裾部に位置し、5代当主朝倉義景が居住した朝倉館の北東に隣接する。朝倉館と約15mの比高差がある標高約65mの段丘上であり、約4,700㎡の平坦面が広がる。字名が「難陽寺」ということから、「朝倉始末記」に「爰ニ、一乗朝倉館ノ良ニ、有佳景勝絶之霊場、号南陽寺」とみられ、朝倉館北東に位置するとされる「南陽寺」跡であることが確実視されてきた場所である。また、当時の庭園の石組が露出したまま残っていることでも知られ、昭和5年(1930)に「一乗谷朝倉氏館跡附南陽寺跡」として「湯殿跡庭園」、「諏訪館跡庭園」と共に国の史跡および名勝に指定された。その後、昭和46年(1971)に特別史跡、平成3年(1991)に特別名勝にそれぞれ格上げ指定され、現在に至る。

発掘調査は、朝倉氏一族にとって重要な位置を占める「南陽寺跡」の遺構を確認することを目的に、平成元年(1989)に実施した。平坦面の北側約1,500㎡は発掘排土置き場とし、約3,200㎡を調査区に設定した。その南半を第64次調査区、北半を第65次調査区として二分し、調査時期を前半と後半に分けて実施した。調査区内は3mグリッドで小区画に区切り、遺物の取り上げ等を行った。グリッド軸は、隣接する朝倉館跡の調査グリッドに準じ設定した。なお、第64・65次調査区境はグリッドのU Aラインである。以下、調査区内の説明で使う方位は、実際とはやや異なるが、グリッド軸を基準に山側を東、川側を西と記述する。



博図2 南陽寺跡調査区周辺地形(縮尺1/2,000)

## 2 第64次発掘調査

第64次調査は、平成元年(1989)4月1日から6月21日にかけて実施した。なお、調査区山際の中央東寄にある特別名勝の庭園遺構は、今回の調査範囲には含まれない。

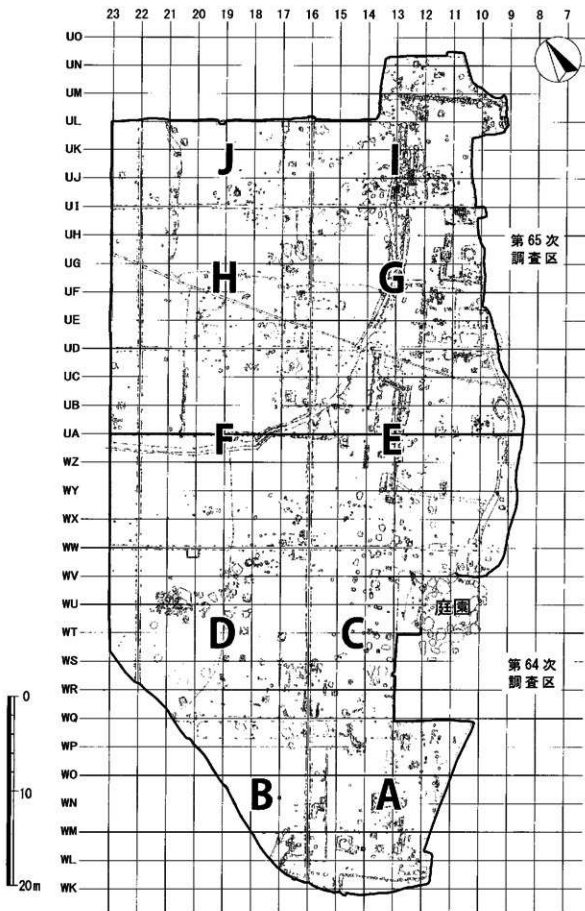
発掘調査は4月5日までに器材運搬・杭打ち等の準備を行い、4月6日から耕土取りを開始した。調査にあたり、調査区全体を通して残す畦を、南北方向は16ライン、東西方向はUI・UD・WW・WQラインに設けた。耕土は地表下約20～30cmまでであるが、上層建物に伴う礎石が地表に露出する所もみられ、最終期の生活面は地表面から耕土の途中までの高さにあることが想定された。よって、遺構の検出は耕土取りの段階でも行われ、深くとも耕土直下の黄色上面を精査することで上層遺構は検出できた。作業は、4月中にWQ畦以南(A・B地区)、5月前半にWQからWW畦間(C・D地区)、5月後半にWW畦以北(E・F地区)と調査を拡げ、6月に庭園付近や南端の門跡付近の調査等を行った。6月後半に、16世紀の造成面より下層の状況を確認するため、WQライン畦の南側(WP14～20区)をトレンチ状に掘り下げた。

調査の結果、後世の攪乱により上層遺構の遺存状況は良くなかった。特に16ライン畦以西は削平が大きく、遺構・遺物がほとんど検出されない状況にあった。しかし、その中でも調査区中央部で仏殿と推定される大きな石を用いた礎石の根石列を、屋敷南端で門・上堀跡を検出したことは大きな成果であった。下層遺構では、A地区で下層遺構面を2面検出し、3時期の礎石建物を同一場所で検出することができた。また、庭園跡付近の調査では、庭園が築かれる以前の礎石建物や、同時期の庭園跡と推定される砂利敷き面等を検出できたことが大きい。大規模な造成面(16世紀以前)より下層の調査では、明確な遺構面を検出できなかったが、深掘りトレンチ内から15世紀代に遡る土師質皿がまとまって出土した点が成果である。

## 3 第65次発掘調査

第65次調査は、平成元年(1989)7月31日から11月7日にかけて実施した。なお、その間の8月30日から10月8日にかけて、第67次発掘調査(朝倉館跡外濠遺構確認)のため、調査を一時中断している。当調査区内には後世の溝が北から西に曲がって通り、現況地形はこの溝から西側は東より約0.5m低い平坦面となっていた。遺構は高い東側の段で地表から約20～30cm下で検出されるので、溝より西側(13～14ライン以西)では遺構面が大きく削平され、遺構がほとんど遺存しない状況にあった。作業は、8月前半に耕土取りを済ませ、8月後半に16ライン畦の西側(UB～UK16区)で下層確認のためのトレンチ深掘り調査を行った後、中断を挟んで10月下旬まで調査区東半(14ライン以東)を中心に遺構検出作業を行った。この時、公有地化されていない土地であるが地権者の承諾を得て、調査区北東端(UL10区)を拡張し、屋敷地東境にめぐらされた巨石積み石垣の構造を確認することができた。11月7日に、第64・65次調査区全体の航空測量を実機ヘリコプターで行い、調査を終了した。

調査の結果、当調査区は第64次調査区と比べ整地面の嵩上げが明確でなく、一部を除いて下層といえる遺構を面ではっきり捉えられなかったが、当調査区の中心建物とみられる南北に長い礎石建物を検出し、建物の東縁部分が途中で改築された痕跡を見出した点が、屋敷の変遷を検討する上で大きな成果といえる。この建物から東側の範囲では、大型の石積施設(溜枿)、竈跡2基、笏谷石を用いた土台、石敷き溝等の遺構が良好に遺存する状況がみられた。



挿図3 グリッド設定図(縮尺 1/400)



## 日誌抄

### 第64次発掘調査 (平成元年4月1日～6月7日)

4. 1 調査開始。器材運搬、草刈。
4. 5 器材搬入。グリッド杭打ち。
4. 6 掘削調査開始。畦沿いにトレンチを設定。
4. 7 トレンチ内の耕土取り。(～10日)
4. 13 本日よりベルトコンベアーを使用し、耕土取り続行。
4. 14 WN13区の耕土直下で建物(SB3720)の礎石を検出。
4. 18 WU13区付近にある杉3本を伐る。  
WL14区で石組みの炉跡(SX3744)を検出。
4. 19 17列以東の耕土取り。WU13・WR16区で礎石を黄色整地土の10cm下より検出した。下層遺構とみられる。  
WP14区で土師質皿が出土し、銅銭も付近から出土。地鎮とみられる。
4. 21 耕土取り終了。WW列南に3箇所テストピットを入れる。
4. 22 河原文化庁調査官来る。午後、遺跡見学会を実施。
4. 25 耕土下の黄色土面の精査。WU20・21区で巨石の埋め込まれた状況を検出するが、整地土に混じり遺構ではなさそう。
4. 26 16列以東の黄色土面で遺構精査。
4. 27 WO16～WQ18区を黄色土面まで掘り下げる。
5. 2 庭園の南側を黄色土面まで下げて遺構精査。  
WL12・13区で下層建物(SB3719)の礎石列を検出。
5. 8 調査区の中央、14～19列までの黄色土面を掘り下げる。  
Q～Zライン。黄色土面といっても若干炭・焼土含む層で、R16区付近で礎石3石(SB3723)を検出。
5. 9 WL・K13区で石垣(SV3702)、石列(SX3745)を検出。  
黄色整地土で埋まり、土師質皿・炭が多い。
5. 10 WX13区で笏谷石の石敷(SX3784)を検出。
5. 16 WY・Z14区の明黄色土面で石列(SV3706)を検出、東側に炭層が広がる。WX12区で土師質皿が多く出土。
5. 19 WQ～V、9～15区の遺構精査をする。(～22日)炭や遺物が混じる暗褐色土のピットを所々で検出する。
5. 23 第65次圃の耕土取りを一部始める。
5. 24 WR・Q16区で石列(SV3704)を検出。遺物は土師質皿のみ。灯明皿ではなく全て酒杯の可能性もある。
5. 25 WL～N、12～16区、WQ～WW、16～20区を精査。炭・焼土面で越前焼壺などが少量出土。WM13区付近で土師質皿が合い口になり2枚出土したが1/3程度しか残存していない。銅銭もこの付近から1枚出土。



挿図4 第64次調査風景1 (器材の搬入)



挿図5 第64次調査風景2  
(16列畦沿いトレンチ、北より)



挿図6 第64次調査風景3  
(耕土取り後の全景、南東より)



挿図7 第64次調査風景4  
(WQ～WZ、16～18区付近、北より)

5. 29 WQ列南、16列東の下層面を検出。遺物は「下層礎石面」として取り上げ。
5. 30 昨日に続き下層礎石面を検出。10~12区で遺物多い。WP12区の上層礎石下で埋塞(SX3750)を検出。南及び東への拡張トレンチを入れる。WK13区で東西石列(SV3701)を検出。屋敷南側の境界であろう。
5. 31 昨日に続き発掘区を南へ拡張。WK14区で東西石列は南に折れ、西に門あり。WK12区の焼土・炭混り層より鬼瓦片が出土。
6. 1 庭園西側のWU12区付近で砂利面(SX3772)を検出。WW10区のピットでガラ石に混じり石造物の笠部が出土。庭石の下で笏谷石などのガラ石が根石状に詰まる。
6. 2 WP16~19区でトレンチを深掘りし、表土下0.8mの所で土師質皿が多く出土。本日は1.3mまで掘り下げた。
6. 3 WP14区付近の下層で石列(3703)を検出。WS~V18区の建物(SB3722)礎石の根石を精査する。
6. 7 15区列(WL~P区間)に深掘りトレンチを入れる。  
第64次調査を終了。



挿図8 第64次調査風景5  
(WS~WW、16~18区付近、北より)



挿図9 第64次調査風景6  
(WQ~WW、13・14区、庭園の西付近、北より)

#### 第65次発掘調査 (平成元年7月31日~11月7日)

7. 31 調査開始。調査区東側の山裾より掘り下げを開始する。礎石列や石列がUE・F、11・12区で出始める。
8. 1 UI~K13区で南北方向の石列(SV3709)検出。溝が一部で重なり時期差があるかもしれない。UI10区で片障(SX3807)を検出。UH10区付近でも笏谷石を並べた如らしき遺構(SX3806)を検出し、底に薄い炭層あり。
8. 2 UD~UL13・14区を掘り下げる。一段低い西側は削平され岩盤層の露出が目立つ。
8. 3 UA~UD、13~18区で遺構精査するが何もない。
8. 4 16列畦西側の掘り下げると角礫混り黄色整地土が広がる。20~30cm下に陶磁器片を含む暗褐色土が一部みられる。
8. 7 雨の為、発掘調査地の草むしり。
8. 8 21列以西を約10~15cm下げる。(~9日)遺構なし。
8. 10 午前中雨のため排水作業をする。午後から発掘再開。
8. 11 18~20列区間の掘り下げ。黄色山土整地土が厚くみられるのみ。整地層を20cm掘り下げると遺物はなく生活痕跡がみられないので、かなり古い段階の整地と思われる。
8. 12 17・18列区間の掘り下げ。遺構遺物ともなし。UG17区の整地層から土師質皿が完形で2枚出土。UD16杭付近で壺ピット(SX3814)を検出。
8. 18 16列畦の西側(UA~UL区間)に深掘りトレンチを入れ



挿図10 第64次調査風景7  
(WP16~20区深掘りトレンチ、西より)

る。UI～UK区間の黄色土層に比べUF～UH区間では岩石や角礫ガラが混じり、整地土の様相が異なる。

8. 19 深掘りトレンチを南に拡張。UB16区で上がとばされたカマド跡らしき遺構(SX3789)を検出。
8. 21 トレンチ深掘りを続ける。
8. 22 14列東側の遺構の検出に入る。午後は草むしり。
8. 23 朝倉氏遺跡調査研究協議会が行われる。排土作業をする。
8. 24 山裾のUA・UB 8区で楕円形の溜枘遺構(SF3734)を検出し、埋土から古墳時代の笏谷石製の石棺片が出土する。
8. 25 D列南西部の遺構精査で礎石抜き取り痕を探すなし。
8. 29 12・13列に集中するガラ石除去作業をする。
10. 9 約1か月ぶりの南陽寺の発掘調査である。この間に第67次朝倉館外濠の実測調査を行う。UF～UH12区で少し下げ、薄い炭層面を検出。UJ12-UL12区付近は溝状になり、土師質皿などの遺物がかなり多い。
10. 11 UD・UE11～13区の掘り下げと、その他の地区で遺構精査。
10. 12 UL10～13区で溝の底石が残る東西溝(SD3717)を検出し、UD10・11区で溜枘状の石積施設(SF3735)を検出する。
10. 13 溜枘(SF3735)の掘り下げ。UC11区で井戸(SE3733)を検出。UB16区で以前より確認していたSX3789の鋳型の残欠部分の精査を行い、鋳型片を新たに2～3点採取。
10. 14 溜枘(SF3735)を掘り下げ、底に石が敷かれた状況を確認。井戸(SE3733)は単一の黄色整地土で埋められ、遺物なし。
10. 17 東側山裾の石垣を少しでも確認する目的で、私有地のUJ・UK9区を、承諾を得て拡張調査し、巨石積みめの石垣(SV3712)を検出。また、溝(SD3717)の東端で壺ビット(SX3813)を検出する。
10. 18 昨日に続き、拡張区の周辺を掘り下げる。
10. 19 ベルトコンベアーを移動し、調査区の清掃に入る。
10. 20 調査区の清掃をしつつ、掘り残し箇所を調査する。
10. 21 UD・E11区で黄色山土整地土層が2枚あり、その下位の面で円形の石組(SX3803)を検出。
10. 24 主に遺構面の清掃をする。
10. 25 ダメ押しの調査を行う。UA～UC12区で、下層石垣(SB3726)より下の石積みを確認した。上層遺構より遺構面の数で3枚下層になる。範囲確認の南と北で延長のトレンチを入れるがUB・C区よりは広くならない。
10. 30 やぐらによる地上投影。(～31日)
11. 7 第64・65次調査区の航空測量を、実機ヘリコプターで実施。器材・出土遺物の搬出を行い、第65次調査を終了。



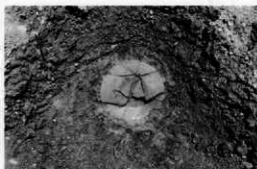
挿図11 第65次調査風景 1  
(UD～UI、12～14区付近の発掘前の段、北より)



挿図12 第65次調査風景 2  
(UK～UI、15～17区付近、北より)



挿図13 第65次調査風景 3  
(山裾の楕円形溜枘SF3734、南より)



挿図14 第65次調査風景 4  
(UG17区出土、地鎮とみられる土師質皿)

### Ⅲ 遺構

調査の結果、遺構の時期は大きく3時期に分けられる。まず、下層にあり、大規模な造成以前の遺構をⅠ期、大規模な造成以後の遺構をⅡ期、上層にあり、朝倉氏が天正元年(1573)に滅亡する直前の遺構をⅢ期とする。

調査区全体は、その南半の第64次調査区と北半の第65次調査区との境目付近で東西方向の石列(SV3705)が検出されたことから、調査区によって敷地が南北にほぼ二分されるといえる。以下、第64次、第65次の順で各遺構について記述し、表2に主要遺構をまとめる。なお、地区はグリッドライン畦によって範囲を10地区(A~J)に分けたものである(挿図3参照)。

#### 1 第64次調査区

SV3701 (A地区) 屋敷南端に位置するL字状の石列で、東西約6.1m、南北約1.7mを検出した。西に約2.6m離れた礎石建物(SB3719)と同・面上にあり、Ⅱ期の当初に築かれた遺構である。石列の上面はほぼ水平で、門(SI3713)の東側から屋敷の南端を区画する土塀の基礎と考えられる。整地土により埋め立てられていないことからⅢ期まで存続している。

SI3713・SB3718 (A地区) 屋敷南端に位置する礎石建物の門である。時期は門という性格からⅡ期当初から存在し、整地土で埋め立てられていないことからⅢ期まで存続したと考えられる。SV3701西辺とは約0.6m離れた建物東辺の礎石が並ぶ。北東角の礎石は残っていないが、その推定位置から西に礎石3石が0.9m、0.6m、0.6m間隔で並ぶ。3石のうち東端の礎石は、径約0.5mと柱を受けるにふさわしい大きさがある。これに対し西の2石は、径約0.25mと小さく、柱の土台となる横木を受ける石の可能性が高い。このような石の配置から、門は、中央の戸口を1間、両脇間を半間とする八脚門が想定される。敷地の南端という位置、朝倉館に面する位置であることからみて南陽寺の正門である可能性が高いといえる。

SD3714 (A地区) 土塀(SV3701)北側の溝である。少なくともSB3719が埋め立てられた後の遺構で、土塀の構築より後に追加されたⅡ~Ⅲ期の遺構と推定される。検出した長さは約3.0m、幅約0.4m、高さ約0.3mを測る。溝の北側の石は径約0.5~0.7mの石材が使われ、上層側の石よりも明らかに大きい。

SV3702 (B地区) 門(SI3713)の西側のⅡ期の石垣である。北西側に面をもち、2~3段積みで高さ約0.5mを測る。石垣上面の北端の石から東に向かって、門と同じ軸で3石並ぶことから、門を意識して造られたと推定される。この石垣の軸は、屋敷地全体の斜面地形に合わせて斜めに向けたと考えられる。門・塀と異なりⅢ期まで存続せず、黄色山土整地土によって埋め立てられ、この層から土師質皿が多く出土している。

SX3745 (B地区) SV3702の北東端に川原石の混ざった石積みがあり、その北側に粗い砂混じりの層の南北帯状の広がりを検出した。溝の石組は残存しないが、ここに溝があったことが想定できる。位置的に門を入ってすぐの通路西側の側溝と考えられる。

SB3719 (A地区) 門を入ってすぐ右側に位置するⅡ期の礎石建物である。南辺の礎石列のみを東西約4.7m検出し、西から1.9m(1間)、0.9m(半間)、0.9m(半間)、0.9m(半間)の間隔で並ぶ。この建物は、

地面の嵩上げが2度行われ、約0.1m上面にSB3721、さらに約0.2m上面にSB3720が建てられている。

SB3720〈A地区〉Ⅲ期の礎石建物である。礎石設置面が標高約65.4mと高いため、発掘前から礎石の一部が地表に露出していた。礎石には0.5~0.7mの大きめの石材が用いられている。検出は、建物南辺の礎石列2石と、東辺の礎石4石である。東辺の礎石は全て南北軸に長辺を合わせて置かれている。南辺2石の間隔は1.9m(1間)を測る。東辺は、北端の礎石から南端の礎石までが12.0mを測り、各礎石間は北から0.9m(半間)、8.3m(4間半)、2.8m(1間半)を測る。南端から2石目の礎石の南側で、地鎮とみられる土師質皿2枚が上下に口を合わせて出土した。このような地鎮と考えられる土師質皿の出土例がSB3720推定範囲の北西WP14区でもみられ、ここでは土師質皿2枚の口を合わせたセットが2組みつき、うち1組は中に銅銭1枚が納められていた。腐食が進んでいたため、銭種は判別できない。また、もう1組には、土師質皿の脇で出土した緑色の自然石が納められていた可能性がある。



挿図15 地鎮とみられる土師質皿 (WP14区)

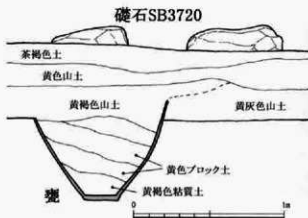
SB3721〈A地区〉SB3719とSB3721の間の面で検出したⅡ期の礎石建物である。南北方向に並ぶ4石の礎石を長さ4.2m分検出した。礎石設置面は標高約65.2mで、SB3719の面より約0.1m上となる。

SX3744〈A地区〉SB3721の西、約2.2mの所で検出したⅡ期の跡である。一辺約1.0m、深さ約0.15mの土坑で、土坑内には炭・焼土が堆積する。土坑の北と西の壁に石組が遺存し、周囲を石で囲う構造とみられる。検出面の高さがSB3721と同じで、土坑の南東角の脇に礎石とみられる石が存在することから、SB3721の建物内部に配置された施設の可能性がある。

SX3746〈A地区〉15列深掘りトレンチの下層で検出した、4石が東西に並ぶ石列である。Ⅱ期以降の南陽寺の遺構とは軸がずれており、Ⅰ期の遺構と考えられる。この遺構の性格は不明である。

SV3703〈A地区〉WP列深掘りトレンチ下層面で検出したⅠ期の石垣である。南北約2.5m、東西約1.2mを検出する。石垣の南西角は角張らず、隅丸状を呈している。

SX3750〈A地区〉SB3720北東隅の礎石下層で検出したⅡ期の堦埋設遺構である。大堦の肩から上は欠失し、もともと地中に埋設された下半部のみが遺存する。



挿図16 SX3750土層断面図(縮尺1/25)・写真



**SX3748**〈A地区〉 SB3721下層で検出したⅡ期の東西方向の石列である。細長い石を列状に配して地面より約5cm突出させており、長さ約2.2mを測る。SB3719と同一面に存在し、SB3719の礎石列から約5.3m北側の位置で同一方向に並ぶ。

**SV3704**〈D地区〉 門(SI3713)から約17m北の地点で検出した南北の石列である。門から北に通路が存在したとすると、その西境の可能性がある。時期はⅡ期に相当する。この石列を境に西側は約0.1m低く、わずかに段がある。

**SX3760・3761**〈C地区〉 南北方向のやや短いⅡ期の石列で、これらと並行する石列(SV3704)の間が通路になると思われる。SX3760とSX3761は、並ぶ軸はほぼ同じだが互いにずれており、SV3704とSX3761の間が約1.3mに対し、SX3761との間は約2.0mと広い。

**SG3700**〈C地区〉 朝倉氏当時の庭石組が地表に露出した状態で遺存する庭園遺構である。時期はⅢ期に属す。当調査では、主要な石組には手をつけず石組の周辺を調査し、外部の遺構との関係を解明することに努めた。

**SX3772**〈C地区〉 SG3700西端の下層で検出した玉砂利敷きである。Ⅱ期に属す。玉砂利敷きは庭園の池底とはほぼ同じ高さで、池の汀線まで広がる。この玉砂利敷きは層位から池よりも前に築かれたことが明白で、前期にも何らかの庭園遺構が存在したのと思われる。

**SD3715**〈C・E地区〉 SG3700の北東側で検出した、Ⅱ期の素掘り溝である。黄色山土層(地山)を掘り込んだ溝で、庭石組の下にもぐり込む。断面はU字形をなし、幅0.7m、深さ0.4mを測る。

**SB3724**〈C地区〉 SG3700の西側で検出したⅡ期の礎石建物である。礎石は径約0.3mで、上層のSB3725のものより明らかに小さく、SB3725より小規模な建物とみられる。

**SB3725**〈E地区〉 SB3724の上層で検出したⅢ期の礎石建物で、礎石は3石しか遺存しない。礎石は径が0.7~0.9mと大きく、大規模な建物が想定される。石6~石7間は約1.9mである。

**SX3766**〈C地区〉 SG3700の西側、WR~WV、13・14区で礎石抜き取り痕と考えられるピット群を検出した。ピットの規模は、径0.3~0.6m、深さ0.1~0.2mを測り、覆土は炭泥じり暗褐色土で遺物も含まれる。建物想定範囲の西辺付近で、8基のピットが南



挿図17 庭園SG3700(西より)



挿図18 庭園下層玉砂利敷き(SX3722)(北西より)



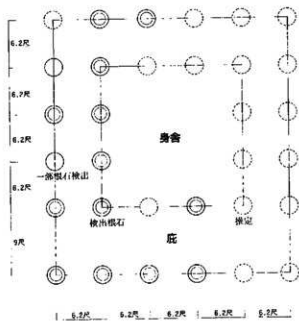
挿図19 庭園西側のピット群検出状況(南より)

北にはほぼ一列に並んでいる。ピットの間隔は規則的で、北半は約1.0m間隔、南半は約1.5m間隔である。また、南端からは東に折れて4基が東西に並ぶ状況がみられる。時期はⅡ～Ⅲ期のどちらかは明確ではない。

SK3737～SK3740（C地区） SX3766と同位置で検出したやや規模の大きな土坑群である。SK3737・3738の2基とSK3739・3740の2基は隣り合わせに並ぶ。SK3737は幅約1.2m、深さ約0.15mの不整形で浅い土坑である。SK3738は幅約1.0mで深さ約0.4m、SK3739は幅0.9mで深さ0.5m、SK3740は幅1.0mで深さ0.75mをそれぞれ測る方形土坑である。覆土はピット群（SX3766）と同じ炭混り暗褐色土で遺物を含む。これらは、その全てかどうか不明だが、位置的にSB3725の規模の大きな礎石を抜き取った痕の可能性も考えられる。

SX3775・3776（C地区） 庭園（SG3700）の北側で検出したⅢ期の隅丸方形ピットである。SX3775は径0.7m、深さ0.3mを測り、ピット内から五輪塔の火輪が出土した。SX3776は径0.7m、深さ0.7mを測る。

SB3722（D地区） 庭園西側の敷地で、Ⅲ期の大規模な礎石建物の根石群を検出した。根石は径約0.6mの範囲に礎を置き、その間に砂利を詰めて固めたもので、この上に礎石を置く構造である。根石群の西側には、礎石であった可能性のある径0.6～1.1mの大きな石が多数存在する。検出した根石は、建物の西側および南側を中心に計13基を数える。建物の規模は東西9.5m、南北10.2mと推定される。柱間は東西方向が約1.88m（1間）間隔で等間隔の5間と推定される。南北方向は、南端から次の柱までが約2.7m（1間半）と長くなるのが特徴で、それより北は約1.88m（1間）間隔で4間が並ぶ。このように、屋敷の中心部に位置し、かなり大きな礎石を用いていること、建物の形が5間×5間半で方形に近いことから仏殿が有力と考えられる。また、仏殿としてみると、中心3間が身舎で四辺に庇が付く構造で、正面にあたる南側の庇が他より半間分広かったと想定される。建物の時期は、下層に古い建物遺構がなく、また上層にも整地された確実な痕跡もみられないことから、屋敷の大規模な造成直後（Ⅱ期）に築かれ、そのまま建て替えられることなくⅢ期まで存続した建物と考えられる。



構図20 仏殿とみられる建物(SB3722)推定図

SB3723（D地区） SB3722の南側に隣接するⅢ期の礎石建物である。SB3722の西辺からはわずか0.5mしか離れていない。礎石は径0.25～0.4mの小振りな石で、東西1.9m、南北2.4mを検出した。

SX3784（E地区） 笏谷石の長方形の板石を2枚かそれ以上敷いた敷石遺構で、時期はⅢ期である。敷石1枚は長さ0.9m、幅0.5mを測り、東西に長く敷かれ、長さ約1.5mが残存する。SB3725の礎石列（石6・石7間）から3.8m北に位置する。敷石上面の高さはSB3725の礎石上面より4～5cm低い、ほぼ同じレベルである。方向も揃っているので、この建物に伴う敷石の可能性が高い。

SX3785（E地区） 暗褐色土を覆土とする楕円形の土坑で、Ⅲ期の遺構であろう。東西0.8m、南北1.6m、深さ0.15mを測る。

SV3705〈E・F区〉 第64・65次調査区の境(UAラインと重複する位置)で検出した東西方向の石列で、屋敷地を南北に二分する区画を表す石列である。この石列より北側の敷地が約0.15m高い。時期はⅡ期だがⅢ期も存続したとみられる。

SV3706〈E区〉 SV3705の東側に位置し、これと直交する南北方向の石列で、長さ2.3mを検出した。屋敷の区画を表す石列とみられる。石列より東側の面には炭層の広がりが見られる。

## 2 第65次調査区

SV3707〈F地区〉 南北方向の石列で約7.2mを検出した。東西の区画溝(SV3705)とは直交する方向に配される。時期はⅢ期以降であり、畑の畦畔石の可能性もある。

SV3708〈E地区〉 北東から南西方向に並び、他の遺構と軸のずれる石列で、長さ2.8mを検出した。時期はⅢ期以降で、後世の所産の疑いもある。

SV3709〈G地区〉 礎石建物(SB3727・3729)の東側の軒先付近に配された石列で、石列の西側が約0.15m高い平坦面となり、石列の東側の一段低い面には薄い炭層の広がりが見られる。石列は南側がSB3727、北側がSB3729に付随し、途中で傾折れになる。石列の長さは、SB3727側が南北約7.7m、東西約2.7mで、SB3729側が南北約12.8mを測る。時期はSV3710よりは新しく、Ⅲ期と考えられる。SB3728の縁と同時に改修が行われた可能性が考えられる。

SV3710〈I地区〉 SV3709の北端で検出した南北方向の石列で、東に面をもつ。約0.3m東に、SV3709から続く石列がSV3710より後に配置される状況から、SV3709より古い構築でⅡ期と考えられる。

SV3711〈G地区〉 SB3728の東側に約4.5m離れて対面するⅢ期の石列で、石列の西と南側に面をもち、上面が約0.2m高い平坦面となる。石列の検出長は、南北約3.0m、東西約4.5mを測る。西面の石の多くは遺存しないが、笏谷石の板石を立てたものが一部残存する。SV3711の南面は自然石を用いた石列であるが、西面は笏谷石を立てて築いており、縁(土縁)をもつ建物(SB3728)からの眺めを重要視したことが推測される。

SV3712〈I地区〉 山裾に配された屋敷の東境の石垣である。ここは未公有地であるが、所有者の承諾を得て拡張調査を行い、幅約3.5mにわたって石垣を検出することができた。石垣は高さ約1.9mを測り、径1.8mの巨石が縦に据えられた立派なものである。

SD3717・SX3813〈I地区〉 Ⅲ期の石敷き溝で、東西約8.5mを検出した。溝幅は約0.4mで、溝底に径0.3～0.4mの平らな石が敷かれる。溝の側石の犬端からの深さは約0.15mを測る。溝の東端には、越前焼の大甕1個が埋設(SX3813)されていた。大甕は体部の1/3程が地中に埋め込まれた形で遺存し、その上部は残らない。大甕の東側はSB3732の壁面に接するので、大甕は屋内の隅に置かれたものと思われる。水源に近い山裾に位置すること、貯水用の大甕と、丁寧なつくりの排水路のセットから、何らかの清水を扱う施設をもつ建物がここに存在したと考えられる。SD3717の南側では、砂利面が約5～6mの範囲にわたって広がり、水はけを考慮したことが考えられる。

SB3726〈E地区〉 Ⅱ～Ⅲ期の礎石建物である。4個の礎石が南北一列に並び、北端の礎石から0.9m、1.0m、1.4mの間隔で並ぶ。これらの礎石の下は西側に面をもつ2段積みの石積みが続き、建物よりも古い時期(Ⅱ期もしくはそれ以前)の石積施設が存在するとみられる。その内部より多量の上層質土が出土している。



SB3727〈G地区〉Ⅱ～Ⅲ期の礎石建物である。礎石は北辺で3石、東辺で3石を検出した。検出長は北辺約3.4m、東辺約6.9mを測る。礎石列と石列(SV3709)の間の距離は、東辺で約0.8m、北辺で約0.5mを測る。この建物は北辺の礎石でSB3728と直接つながる。北辺東端から2つ目の礎石の南脇で笏谷石の敷石を検出した。この敷石の西側は欠損しており、全体の形状と敷石の性格は不明である。

SB3728〈G地区〉Ⅱ～Ⅲ期の礎石建物で、南北に並ぶ礎石列を約10.2m検出した。礎石は径約0.6mで、しっかりしている。この礎石列の約0.95m東に平行して、上面にホゾ穴が穿たれた一辺20cmの笏谷石の切石が南北に3石並ぶ。これらは緑東石または土縁柱を受けたとみられる東石と考えられる。東石の間隔は1.85～1.95m(1間)を測る。

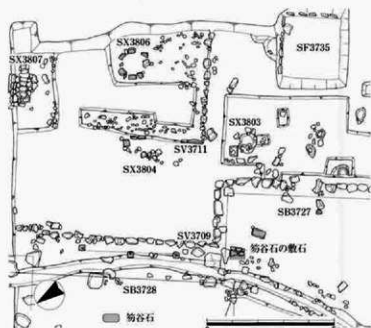
SB3729〈I地区〉SB3728礎石列の北端付近で、約0.5m東側の位置からSB3729の礎石列が北に向かって延びる。礎石は径約0.7mと大きく、南北5間分、約9.6mを検出した。SB3728と同一建物の可能性が高い。ただSB3728のような緑(土縁)が東側に付かない点に違いがある。時期はⅡ～Ⅲ期である。

SB3730〈I地区〉建物の西辺と推定される礎石3個を検出した。SB3729東辺との間隔は約1.5mである。また、石列(SV3709)との約0.4m幅の間に、底に石を敷いた溝状遺構が残存し、この地区(UI・J12区)で土師質皿が多量に出土している。時期はⅢ期と考えられる。

SB3731〈I地区〉SD3717の北側で検出したⅢ期の礎石建物である。比較的大きな礎石3個を検出したが、建物全体の広がり不明である。

SB3732〈I地区〉石垣(SV3712)の西側約1.7mで南北方向の礎石列を約3.4m検出した。大堊埋設遺構(SX3813)を覆うⅢ期の礎石建物と考えられるが、建物全体の形やSB3731とのつながりは不明である。

SE3733〈E地区〉円形の石組井戸で、石組の内法径が約0.9m、深さ約1.6mを測る。時期はⅡ期である。後に黄色土の単一土層で埋め立てられ、最終時期までは存続しない。なお、この井戸から遺物は全く出土していない。



挿図21 SB3727・3728周辺笏谷石使用状況(縮尺1/150)



挿図22 SB3728緑東(南より)

SF3734 〈E地区〉 山際で検出した楕円形の石積施設で、南北1.8m、東西1.2mを測る。楕円形土坑の周囲に、小振りな自然石を1～2石積みするもので、北から西壁の石積みは遺存するが、東側は遺存しない。底面は西側が東よりも深くなり、石組上面からの深さは最大約0.4mを測る。時期はⅡ～Ⅲ期で、溜槽的な性格の遺構と考えられるが、明確な用途は不明である。出土遺物は多くないが、越前焼大甕の古手の口縁部(Ⅲ群a)や、古墳時代の笏谷石製の石棺片が出土している。

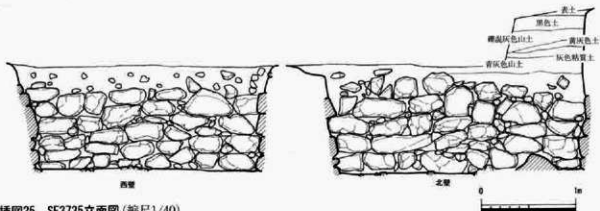


挿図23 SF3734 (南より)

SF3735 〈G地区〉 山際で検出したⅡ期の方形石積み施設である。東西2.6m、南北2.5m、深さ1.2mを測り、石積み施設の規模としては大きい。石積みは、1段の高さが0.2～0.3mで6段積み、最上段のみ失われている。底面は拳大の石と砂利が敷かれている。土層堆積は上から1層目が黄色山土整地土、2層目が青灰色粘質土、3層目が灰色有機質土の順で堆積する。山裾の湧き水を溜める施設と考えられる。



挿図24 SF3735底面検出状況 (東より)



挿図25 SF3735立面図 (縮尺1/40)

SX3789 〈F地区〉 16列で深堀りトレンチの掘削中に、黄色山土整地土層中より検出した梵鐘铸造遺構の残欠である。Ⅰ～Ⅱ期の遺構と思われる。铸造土坑などの遺構の原型は全く留めておらず、梵鐘の撞座、龍頭、底部の鑄型が出土した。この付近で梵鐘の铸造をしたことは間違いないが、詳細は不明である。



挿図26 SX3789梵鐘の鑄型検出状況

SX3799 (E地区) SE3733の東側で検出したⅡ期の石列である。井戸と同時期の溝の隅石の一部が残存したものと考えられる。

SX3803 (F地区) 黄色土土層を約0.1m下げた面で検出したⅡ期の円形の石組み遺構である。内径約0.8mを測り、調査時には井戸の可能性があるとみて掘り下げたが約0.3mで底に達し、性格は不明である。

SX3806 (G地区) SV3711の段上の平坦面で検出したⅢ期の円形の炉跡で、周囲は1段の石積みで囲まれる。内径約0.9m、深さ約0.1mを測る。石組の石には笏谷石の板石と割石が多用され、一部に自然石が補填される。内部には炭が詰まった状況がみられた。

SX3807 (G地区) SX3806から北に約3.3mの位置で検出したⅢ期の長方形の石敷遺構で、規模は東西約1.8m、南北0.6mを測る。底面には角の取れた平らな石を長軸の中央に敷き、その両脇にやや小さめの石を敷くようにして、隙間なく敷かれる。隅石は1段で上面を水平に並べ、高さ約0.2mを測る。内部に炭が詰まることから炉跡と考えられる。

SX3812 (I地区) Ⅱ期の隅丸方形土坑で、規模は南北1.5m、東西約1.2mを測る。土坑内部から多量の土師質瓦が出土している。

表2 主要遺構一覧

次数	地区	遺構名	種別	時期	次数	地区	遺構名	種別	時期	次数	地区	遺構名	種別	時期
64	C	SV370	溝	Ⅱ	65	E	SE3733	井戸	Ⅱ	64	F	SK3777	石列	Ⅱ～Ⅲ
64	A	SV0701	土師瓦葺	Ⅱ～Ⅲ	65	E	SF3734	石積地敷(溝跡)	Ⅱ～Ⅲ	64	F	SK3778	石列	Ⅱ～Ⅲ
64	B	SV3702	石堀	Ⅱ	65	G	SF3735	石積地敷(溝跡)	Ⅱ	64	F	SK3780	溝石	Ⅱ～Ⅲ
64	A	SV3703	石堀	Ⅰ	64	C	SK3737	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	64	E	SK3782	石列	Ⅱ～Ⅲ
64	D	SV3704	石列	Ⅱ	64	C	SK3738	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	64	E	SK3783	土坑	Ⅱ～Ⅲ
64	E-F	SV3705	石列	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3739	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	64	E	SK3784	笏谷石敷	Ⅱ
64	E	SV3706	石列	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3740	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	64	E	SK3785	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ
65	F	SV3707	石列	Ⅲ	64	D	SK3741	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	65	F	SK3786	ピット群	Ⅱ～Ⅲ
65	E	SV3708	石列	Ⅲ	64	D	SK3742	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	65	F	SK3788	石列	Ⅱ～Ⅲ
65	G-I	SV3709	石列	Ⅲ	64	D	SK3743	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	65	F	SK3789	炭層跡	Ⅱ
65	I	SV3710	石列	Ⅱ～Ⅲ	64	A	SK3744	円形炉跡	Ⅱ	65	E	SK3790	土坑	Ⅱ～Ⅲ
65	G	SV3711	石列	Ⅲ	64	A	SK3745	溝	Ⅱ	65	E	SK3791	土坑	Ⅱ～Ⅲ
65	I	SV3712	石堀	Ⅱ～Ⅲ	64	A	SK3746	石列	Ⅰ	65	E	SK3792	石列と礎石?	Ⅱ～Ⅲ
64	A	SI3713	門	Ⅱ～Ⅲ	64	A	SK3748	石列	Ⅱ	65	E	SK3793	石列	Ⅱ～Ⅲ
64	A	SV3714	溝	Ⅲ	64	A	SK3750	豊埴段土坑	Ⅱ	65	E	SK3795	礎石?	Ⅱ
64	E	SV3715	溝(溝部)	Ⅱ	64	A	SK3751	石列	Ⅱ	65	E	SK3796	溝石と礎石?	Ⅱ
65	I	SV3717	溝(石敷)	Ⅲ	64	D	SK3755	溝石	Ⅱ～Ⅲ	65	E	SK3797	溝石	Ⅱ
64	A	SV3718	礎石門	Ⅱ～Ⅲ	64	D	SK3757	石列	Ⅱ	65	E	SK3798	石列	Ⅱ
64	A	SV3719	礎石遺物	Ⅱ	64	D	SK3758	石列	Ⅱ	65	E	SK3799	溝	Ⅱ
64	A	SV3720	礎石遺物	Ⅲ	64	D	SK3759	石列	Ⅱ	65	G	SK3800	土坑	Ⅲ
64	A	SV3721	礎石遺物	Ⅱ	64	C	SK3760	石列	Ⅱ	65	B	SK3803	円形土坑	Ⅱ
64	D	SV3722	礎石遺物(横石)	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3761	石列	Ⅱ	65	G	SK3804	溝	Ⅱ
64	D	SV3723	礎石遺物	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3763	石列	Ⅱ	65	G	SK3805	石列?	Ⅲ
64	C	SV3724	礎石遺物	Ⅱ	64	C	SK3764	土坑	Ⅱ	65	G	SK3806	円形炉跡	Ⅲ
64	E	SV3725	礎石遺物	Ⅲ	64	C	SK3766	ピット群(石積取)	Ⅱ	65	G	SK3807	石敷き伊	Ⅲ
65	E	SV3726	礎石遺物	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3768	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	65	H-J	SK3809	石堀?	Ⅱ～Ⅲ
65	E-G	SV3727	礎石遺物	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3769	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	65	I	SK3811	溝石	Ⅱ
65	G	SV3728	礎石遺物	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3770	土坑(石積取?)	Ⅱ～Ⅲ	65	I	SK3812	土坑	Ⅱ
65	I	SV3729	礎石遺物	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3772	下層地	Ⅱ	65	I	SK3813	豊埴段土坑	Ⅲ
65	I	SV3730	礎石遺物	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3773	石列	Ⅱ	65	F-I	SK3814	豊埴段土坑	Ⅲ
65	I	SV3731	礎石遺物	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3775	土坑	Ⅲ					
65	I	SV3732	礎石遺物	Ⅱ～Ⅲ	64	C	SK3776	土坑	Ⅲ					

## IV 遺物

南陽寺跡から出土した遺物は、遺構全体が後世に削平されていたため少なく、総破片数は36,401点である。1㎡あたりの出土遺物点数は約11.4点となる。内訳では土師質皿が90%以上を占め、越前焼が合わせて4%を占める他は1%以下である。土師質皿は64次調査区ではSX3744付近、65次調査区ではSV3708付近の灰褐色土層とSV3710付近から集中的に出土している。また、茶道具も含めた供膳形態の瀬戸・美濃製品と輸入陶磁器の割合は1:3.5で、他の地区と変わらない。

表3 出土遺物一覽

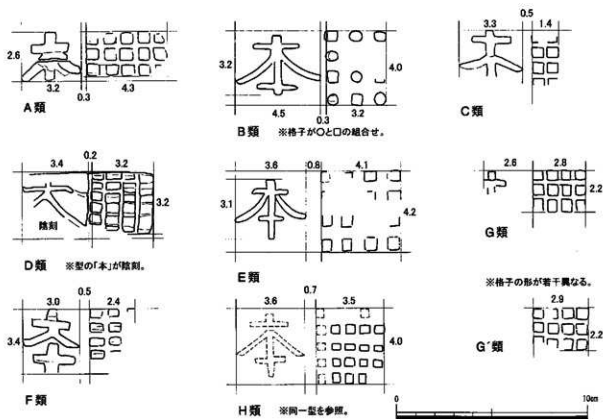
器種	64次				65次				計			
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合				
越前焼	壺	352	715	1,047								
	壺	21	120	141								
	磁鉢	35	21	56								
	磁鉢	104	106	210								
	その他	0	3	3								
計	492	965	1,457	4.00								
土師質	皿	19,916	13,433	33,349								
	土師	6	2	8								
	土師	0	2	2								
	高坏	0	3	3								
	その他	57	1	58								
計	19,979	13,441	33,427	91.81								
日本産陶磁器	瀬戸・美濃	茶	22	31	53							
		壺	0	0	0							
		鉢	7	6	13							
		鉢	3	0	3							
		磁鉢	4	2	6							
	その他	2	1	3								
	灰釉	小皿	38	60	78	0.21						
		壺	23	1	24							
		壺	6	4	10							
		壺	3	3	6							
鉢		26	9	35								
その他	2	1	3									
瓦質	小鉢	60	18	78	0.21							
	皿	98	58	156	0.42							
	火鉢	42	6	48								
	風炉	0	5	5								
	瓦葺	0	3	3								
灰質	バンドコ	1	0	1								
	壺	1	0	1								
	その他	8	1	9								
	計	52	15	67	0.18							
	灰土質	皿	0	2	2	0.01						
合計	20,621	14,481	35,102	96.3								
青磁	瀬戸	純	38	37	75							
		皿	20	25	45							
		鉢	6	3	9							
		壺	2	11	13							
		壺	1	5	6							
	白磁	磁鉢	0	5	5							
		磁鉢	0	5	5							
		その他	7	7	14							
		青磁	0	7	7							
		その他	6	7	13							
	白磁	小鉢	68	99	167	0.46						
		壺	2	2	4							
		壺	68	112	180							
		外	18	10	28							
		その他	1	1	2							
灰土質	小鉢	89	125	214	0.59							
	壺	29	59	88								
	鉢	33	56	89								
	壺	2	0	2								
	その他	2	1	3								
瀬戸製陶磁器	小鉢	66	116	182	0.50							
	その他	1	1	2	0.01							
	計	221	341	566	1.56							
	鉢	1	1	2								
	壺	2	3	5								
外産品	鉢	3	4	7	0.02							
	計	227	345	572	1.57							
	壺	63	21	84								
	壺	0	1	1								
	くまび	1	0	1								
金銀製品	鎧具	0	1	1								
	鎧具	5	6	11								
	その他	11	3	14								
	計	80	32	112	0.31							
	バンドコ	9	64	73								
石製品	風炉	0	4	4								
	壺	9	14	23								
	壺	2	2	4								
	磁石	3	2	5								
	磁石	1	0	1								
木製品	その他	49	56	105								
	合計	79	143	222	0.61							
	下駄	0	1	1								
	その他	1	1	2								
	合計	1	2	3	0.01							
その他	陶磁器類	177	161	338								
	金銀	20	5	25								
	その他	3	3	6								
	計	200	169	369	1.01							
	磁鉢	2	2	4								
瀬戸製陶磁器	磁鉢	0	3	3								
	木炭	7	6	13								
	壺	1	0	1								
	合計	210	180	390	1.07							
	総合計	21,218	15,183	36,401	100							

以下、各次調査区および出土層・遺構ごとに遺物の説明を行う。なお、説明にあたって、越前焼大壺・摺鉢の分類については『泉道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』(1983)、土師質皿の分類については『朝倉氏遺跡発掘調査報告1』(1979)、輸入陶磁器の分類は『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁』(国立歴史民俗博物館1993)に準拠する。また、瀬戸・美濃焼の分類は藤澤良祐氏(藤澤2002・2008)によるものである。

### 第64・65次調査区 表土・精土出土遺物 (第10・11図、PL.9・10)

越前焼 (1~5) は大壺。(1) はII群で、口縁帯が横に傾き、受け口の立ち上がりはかなり低い。(2) はI群で、受け口状の口縁帯が直立する。(3) はIV群aで、口縁幅は2.2cmでわずかに肥厚する。(4・5) は押印のある肩部片。(4) の押印<C類>は、IV群cに典型的なタイプである。(5) の押印<B類>

は、格子の中に円の形のものを含み、方と円が交互に並ぶ珍しいタイプである。(6~9)は揃鉢。(6・7・9)はIV群で、口縁部に内傾する面をもち、撞目が口縁端部まで至る特徴がある。(8)はIII群aで、口縁端部が丸い。使用されて、体部下半の撞目が環状に擦り減っている。(10)は口径24cmの内湾口縁の鉢。内面に製作時のナデ痕をそのまま残し、丁寧に磨いてはいない。



挿図27 第64・65次出土越前焼大壺押印型一覧(縮尺1/2)

土師質土器 (11)は口径28cmの体部が直線状に開く鉢である。

瓦質製品 (12)は焼瓦の鯉瓦片である。外面は日、耳、口の部分に大きく分けられ、向かって鯉の顔面左側にあたる。外面上端に位置する日の部分には、孔を穿っており、3.2cmの深さを測る。目の周囲をヘラ状工具によって縁取りし、目そのものを明瞭に浮きださせている。外面左端に位置する耳は剥離し、全体の形状をうかがえないが、周囲を縁取りした痕跡がみえる。口の部分もほとんど欠損しているが、口の内部に段差をつけて造形し、写実的な表現をする。中央の頬の部分も表面を丁寧に磨き調整している。内面は布日痕が残り、ケズリやナデによって器面調整する。このことから布を当てた内型に粘土を付けて成形したと推定できる。底面は砂粒が多く残る器面をナデ調整するため、粗い器面を呈している。胎土は2~3mmの黒・褐・白色の混和剤が多く混ざり、固く焼きしめられている。顔面を造形的に表現しているため、鬼瓦か鯉瓦とこれまで考えられていたが、鬼瓦は基本的に手づねによって成形し、内面に布日痕を残さないため、鯉瓦と推定した。類例として、滋賀県安土城跡出土の天正期の鯉瓦をあげることができる(滋賀県教委2009)。(13)は瓦質の尊式花瓶である。口頸部が朝顔形に開き、頸部には蓮弁文と雷文がスタンプされている。

瀬戸・美濃焼 (14~16)は鉄釉の天目茶碗である。(14)は釉が灰黒色がかかり、発色はあまりよくない。

胴部上位は内に屈曲し、口縁部は緩く外反する。(15)は軸が褐色を呈している。腰部は錆軸が掛かっている。(16)は高台破片で、底部外向は錆軸、内面は鉄軸が掛けられている。意図的に打ち欠いた痕跡が認められる。大窯第1段階に属す。(17)は鉄軸の煎類の口縁部である。内外面ともに鉄軸が掛かっており、器壁は薄い。近世以降の瀬戸美濃製品の可能性もある。(18)は灰軸の丸碗である。時期は不明である。(19)は灰軸の丸碗で、内外面に灰軸が掛かる。外面には鉤形の印花を連ねた蓮弁文をもつ。大窯第1段階に属す。(20)は灰軸の端反皿である。薄手の作りで、口縁部は緩く外反する。色調は淡い緑色を呈している。(21)は灰軸の端反皿もしくは丸皿の付高台の破片である。内外面に灰軸が掛かっている。大窯第1もしくは第2段階に属す。(22)は灰軸の端反皿である。大窯第2段階に属す。(23)は卸皿の底部で、内面には卸目をヘラ状工具によって作っている。底部外面には回転糸切り痕とヘラ描き沈線を確認できる。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に属す。(24)は灰軸の薄手の卸皿で、口縁部内外面に軸を掛けている。古瀬戸後期様式Ⅱ期に属す。(25)は灰軸の大皿である。時期は古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に属す。(26)は溜鉢形小鉢で、外面には回転ヘラケズリ、内面には回転ナデをもって器面調整している。時期は古瀬戸後期様式Ⅲ期、もしくはⅣ期古段階に属す。

**外国製陶磁器** (27~31)は青磁である。(27)は外面口縁部にくずれた雷文帯をもつ。体部の立ち上がりは短く、浅い小振りの碗C2類である。軸は淡い灰緑色を呈する。(28・29)は外面に細い線描き蓮弁文をもつ碗B4類である。(29)の見込みには、中央に「上」字を配する印花がみられる。軸は青味を帯びた緑色を呈し、高台内面まで施される。(30)は盤で、体部が広い見込から内湾気味に立ち上がり、口縁部を薄く丸く収める。体部内面に細いヘラ描文をもつ。(31)は皿である。外面腰部に稜をもち、2~3条単位の立位のヘラ描文を内面は帯に、外面は間隔を空けて配する。軸は青味を帯びた緑色を呈する。(32~34)は白磁である。(32)はいわゆる葎筒底の皿で、全面施釉の後、疊付のみ拭き取る。(33)は口縁が溝反りの皿で、見込みは高台内に緩やかに窪む。灰白色を呈する釉を全面に施し、疊付のみ拭き取る。(34)は八角形の角坏で、胎土は白色を呈し、固く焼締る。(35)は朝鮮製陶器雑釉塗の体部である。胎土は緻密で灰色を呈し、固く焼締まる。軸はやや緑味を帯びた灰色を呈する。(36)は黒釉の碗で、底部は輪高台である。胎土は暗灰色を呈し、やや粗い。外面腰部以下は露胎である。朝鮮製陶磁器の可能性はある。

**石製品** (37・38)は硯である。(37)は直線的な側面をもつ破片で、側面が実測円上端近くでやや落ち込むことから、海部をもつ硯頭付近とみられる。側面は垂直に立ち上がり、縁帯の幅は1.4cmとかなり広い。表面は平坦である。石質は凝灰岩とみられ、にぶい黄褐色を呈す。破断面に比べ表面は赤味が強い。(38)は硯尻側の角部破片で、角は外面・内面ともに大きく弧状に成形されている。側面は、裏面から硯面に向かってわずかに狭まり、縁帯には鋸歯状の線刻が施されている。裏面には明瞭な線状痕が残り、刷圓が打ち欠かれているようにみえる。再加工作品の可能性がある。石質は頁岩とみられ、暗灰色~黒褐色を呈す。

**金属製品** (39)は両端が曲がり、「コ」の字の形状を呈した鉄製の角鏝である。「ハ」の字状に尖った先端部は広がっている。断面は一辺約1.15cmの方形である。(40)は鉄製の釘であり、頭部を端部延圧後に巻き込む巻頭タイプである。首部断面は一辺0.50cm、残存長5.85cmである。

#### 第64次調査区 黄色土面出土遺物 (第11・12図、PL.10・12)

上層遺構面の直上に相当する層から出土した遺物である。ただし上層が削平された場所などで、下層

遺物が混在する可能性がある。

**越前焼** (41)は大甕Ⅲ群の口縁部片、(42)は器高15cm前後の小壺の体部である。(43~47)はⅢ群の播鉢で、内面の沈線や段が口縁から少し下がった位置にめぐる。(43・44・46・47)は口縁端部に面をもち四角いタイプのⅢ群b、(45)は面がなく丸いタイプのⅢ群aに分かれる。(43)は指で押して作った簡易な片口が付く。(44)は体部が立ちぎみで播目が少なく、古い特徴を残す。(45)は体部内面にヘラ記号がある。(48)は体部が丸く内湾口縁の大型の鉢で、体部外面にヘラ記号がある。

**土師質土器** (55~66)はⅢ。このうち(55・60~62)の4点は、石垣(SV3703)の背後で出土した、石垣構築時の地鎮具の可能性のある一群である。(55)はD3類で、口径15.1cmを測り、薄手で良質の作りをしている。体部下半は丸みがあり、見込みに圏線がみられない。(60~62)はC2類で、口径9.0~9.5cmを測り、器壁は薄い。体部下半に丸みがあり、口縁がやや外反する。(55・60~62)は、器壁の薄さや器形が古手Ⅱ類に類似する。(56)はD3類で、口径13.9cmを測る。見込みに幅広い圏線がめぐる。文字は判読できないが、口縁内面に墨書がある。(57~59)はD2類で、口径11.2~11.6cmを測る。(57)は器壁がやや厚く、形に歪みがある。(58)は器壁が薄く、体部下半に丸みがあり、見込みの圏線はない。(59)は薄手で整った円形を呈し、作りが丁寧である。見込みに幅広い圏線がめぐる。(63~66)はC2類で、口径8.6~9.1cmを測る。(63)は底部が小さく、体部下半に丸みがある。(64・66)は薄手で整った円形を呈し、作りが丁寧である。(64)の底部の中心には、外側から指で突いたことによる内面の盛り上がりが見られる。(65)は回しナデによる口縁の反りが強い。(67・68)は羽釜である。(69)は小型の器台で、胎土は赤い。

**瀬戸・美濃焼** (49)は鋳軸の播鉢である。瀬戸・美濃産の播鉢は、本遺跡ではほとんどみられない。口縁端部内面は玉縁形に肥厚させ、播目は3本を確認できる。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に属す。(50)は灰軸の広口壺胴部破片で、胴部上位には印花文として菊文・押印文、画花文として草花文、胴部下位に擬位の菊描き文を描いている。時期は古瀬戸中期様式Ⅱ期(14世紀前葉)であり、伝世品の可能性もあるが、南陽寺創建、もしくは創建時を遡る資料として重要な遺物である。(51)は灰軸の直縁大皿である。口縁部内外面に灰軸を掛け、胴部は露胎のままである。口縁端部の摩耗が著しい。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階の時期である。(52~54)は灰軸の大皿である。(52)の口縁部は受け口形で、内外面は灰軸が掛かっている。(53)は口縁部の内外面に灰軸を掛け、胴部は露胎のままである。口縁端部は摩耗が著しい。胴・底部を回転ヘラケズリとしている。粘土玉貼り付けの脚部を一つ確認できる。底面には墨書で書かれた漢字を2~3文字確認できる(挿図28)。内容は判然としないが、この大皿は日常調理・容器として使用されたであろうから、所有者や個人名を記した可能性がある。(54)も底部側縁に脚部を貼り付けるもので、底面は粗く削り調整されている。これらの時期は古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階である。



挿図28 墨書の赤外線写真

**中国製陶磁器** (70~72)は青磁の碗である。いずれも器表に二次的被熱痕がある。(70)は無文のE類である。外面

口縁下に一条の沈線がめぐる。軸は貫入が目立ち、明るい灰緑色を呈する。(71)は細い線描き蓮弁文をもつB4類である。軸は貫入が目立ち、淡い灰緑色を呈する。(72)は丸彫りの蓮弁文をもつB4類である。軸は貫入が目立ち、淡い灰緑色を呈する。(73)は白磁の皿である。口縁が緩く内湾して立ち上がる小振りの皿D群である。白濁した軸は、細かい貫入が目立つ。(74)は染付の皿である。端反り口縁の皿B群で、高台皿付のみ軸を拭き取る。外面に宝相華唐草文、内面見込みに十字花文をもつ。(75・76)は天目茶碗である。(75)は胴が直線的に開き、口縁部下位がS字状に緩く屈曲する。口縁部は内側がゆるく外反、外側が内湾し、端部に稜をもつ。胴部には口クロ目が残る、腰部境に稜を作る。高台皿は水平に削り込む。胎土は緻密で人肌色を呈し、微細な黒色砂粒と気泡がみられる。釉は黒褐色で、軸掛りの薄い部分は茶褐色を呈す。腰部以下は露胎である。破断面に漆による補修痕が残る。(76)は口縁部下位がS字状に屈曲し、口縁内側は直線的に、同外側は内湾気味に丸く作る。胎土は明灰色を呈し、固く焼締まる。釉は黒褐色で禾目風の流下が認められ、表面は茶褐色を呈する。口縁部には覆輪の痕がみられる。

**金属製品** (77~80)は鉄製の釘である。頭部はいずれも端部延圧後に巻き込む巻頭タイプである。(77)の良好に残存する中央部での断面は約0.55cm、残存長5.80cmであり、(78)の首部断面は一辺0.50cm、残存長4.55cm、(79)の首部断面は0.60cm×0.40cm、残存長4.10cm、(80)の首部断面は0.35cm×0.35cm、残存長3.10cmである。

**石製品** (81)は基石の黒石である。全体が丁寧に研磨されており、平面形はほぼ正円、断面はレンズ状を呈す。石質は頁岩とみられる。

#### 第65次調査区 SF3734およびその周辺出土遺物 (第12図、PL.11)

楕円形の浅い石積施設(SF3734)の覆土と、石積施設西側の遺構面直上より出土した遺物である。

**越前焼** (82・83)は甕である。(82)は大甕IV群aの口縁部で、上面幅がわずかに広く作られる。(83)は大甕の肩部で、皿群に典型的な陰刻の「本」をもつ押印<D類>が、格子目の方を強く押さえながら印刻される。

**土師質土器** (84~89)は皿。(84)はD3類で、口径13.6cmを測り、器壁が薄く良質のタイプである。見込みに浅く幅広い圈線がめぐる。(85・86・88)はC2類で、口径8.4~9.5cmを測る。(85)は整った円形で、丁寧な作りをしている。(86・88)の底部中央は、外側から指で突かれ、内側がやや盛り上がる。口縁全体にタール痕が付着する。(87・89)はC1類である。

**石製品** 覆土中から古墳時代の笏谷石製の石楯片が出土した(第19図、PL.18)。石楯片は蓋の小口側縄掛突起の破片である。表面の大部分は削られており、当時の加工面が確認できるのは縄掛突起と合わせ目付近のみである。表面の調整は細かく丁寧なものである。縄掛突起は横長の隅丸方形を呈し福井市足羽山に集められた山頂古墳のものに類似する。大きさから頭側の破片と推測する。外面調整から比較すると、山頂古墳のものよりやや粗いため、同古墳石楯に後続する形式と思われる。おそらく中世の人が石材として笏谷石を搬入した際に、偶然、古墳時代の石楯片が持ち込まれたものと考えられる。

#### 第65次調査区 UH列以北13列以東出土遺物 (第12・13図、PL.11・12)

SX3807やSD3717などの遺構面を覆っていた土層から出土した遺物である。

**越前焼** (90)は大甕IV群aである。肩はあまり張らないタイプで、口縁部外面の稜が尖る。押印の「本」部分が薄くみられるが、その類型は不明である。(91)は甕で、推定復元高34.5cmを測る。口縁が



断面三角形状を呈し、上面が肥厚する。(92-93)は播鉢のIV群である。(92)の口縁は内傾して面取りされ、口縁端部の直下に太い沈線がめぐり、播目は全面に施される。(93)の口縁上面は内傾状になるが、上面の両端が角張らず、やや丸みを持つ。播目は11本単位で、少し間隔をあけて施される。

**土師質土器** (94-96)は皿である。(94)はD1類で、口径10.4cmを測る。口縁端部のつまみ上げが明瞭である。見込みに幅広い圏線がめぐり、その半周分が深くなる。(95)は古手のもので、器壁が厚く「ボテタイプ」と呼ばれる。口径9.6cmを測り、底から体部にかけて丸く、短い立ち上りの口縁が付く。(96)はB類で、口径7.1cmを測る。成形時の布目痕が内面にみられる。

**中国製陶磁器** (97)は白磁の皿である。口縁が緩く内湾して立ち上がる小振りの皿D群で、高台は挟りのない輪高台である。胎土は白色を呈し緻密で、固く焼締まる。透明感のある釉で、高台周辺は露胎である。(98-99)は染付である。(98)は口縁が端反りの碗B群で、外面に人物を描く。(99)は口縁が端反りの皿B群で、外面に牡丹唐草文をもつ。高台畳付以内は露胎である。

#### 第65次調査区 SV3712付近拡張調査区出土遺物 (第13図、PL. 12)

UL9・10区で、石垣(SV3712)を検出するために調査区を拡張した地区より出土した遺物である。

**越前焼** (100-102)は甕である。(100)は大甕IV群bで、口縁上端が細く外側に広がる。(101)は大甕の肩部で、押印右半の格子目が薄くみられる。(102)はSX3813の埋甕で、推定器高78cmの中甕である。

**瀬戸・美濃焼** (103)は灰釉の丸甕である。内外面ともに灰釉が掛かり、鉤形の印花文を連続させた連弁文が描かれる。大窯第1段階に属す。

**中国製陶磁器** (104-105)は白磁の皿である。(104)は口縁が端反りの小振りの皿で、外面にロクロ目をわずかに残す。釉は灰色を帯びた白色を呈する。(105)は口縁が端反りの大振りの皿である。釉は白色を呈し、高台畳付のみ拭き取る。(106-110)は染付である。(106)は見込が内面に盛り上がる万頭心の碗E群である。外面は口縁下と高台脛に界線がめぐり、胴部に唐草の陰花文、高台内に「長命富貴」をもつ。内面胴部は、花と昆虫文を単独で6か所配し、見込みに草花文をもつ。(107)は内湾する胴から口縁がそのまま立ち上がる碗である。外面口縁下に唐草文帯、胴部に逆芭蕉文を、内面口縁下に逆芭蕉文帯をもつ。(108)は碗の胴部で、外面に退化した密な唐草文をもつ。(109)は大振りの皿である。内外面の胴部には、区画内に瓊果・宝物を描く。(110)は端反り口縁の皿B群で、高台畳付のみ釉を拭き取る。外面に牡丹華唐草文、内面見込に十字花文をもつ。

#### 第65次調査区 14列以西上層出土遺物 (第13・14図、PL. 12・13)

第65次調査区の14列以西の広範囲で出土した遺物を一括する。この一帯は後世の削平により遺構がほとんど残っていないところである。

**越前焼** (111-114)は甕。(111)はSX3814の埋甕である。南陽寺跡の調査で唯一完形に復元できた大甕で、器高90.3cmを測る。口縁部が縦横に大きく肥厚したIV群cタイプである。肩部にIV群cの典型的な押印<A類>が薄くみえる。(112-114)も大甕IV群cの口縁部である。(115)は甕で、球形に膨らんだ体部に、短い口縁部の付くタイプである。

**土師質土器** (116-118)は皿C2類で、口径9.0-9.5cmを測る。器壁は、口縁よりも底部が薄い特徴がある。整った円形で、底部が小さく、底から体部にかけて丸みがある。口縁全体にタール痕が付着する。(119)は土鈴である。

瀬戸・美濃焼 (120・121)は鉄釉の天目茶碗である。(120)の胴部上位は丸く張り、口縁端部は摘み出されている。大窯第1段階に属す。(121)は黒色の釉が掛かり、腰部には錆軸を確認できる。胴部上位は屈曲し、口縁端部はやや緩く外反する。大窯第2段階に属す。(122)は灰釉の大皿である。口縁部の内外面に灰釉が掛かり、腰部は露胎のままである。同一個体とみられる底部破片には脚部が一つ残っている。底部外面は回転ヘラケズリされている。古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階に属す。

中国製陶磁器 (123~128)は青磁の大形品である。(123)は盤で、体部が丸みを帯びて大きく開き、口縁部は折縁となる。体部内面にはノミ状工具による丸彫りの篋文を配する。(124)は内湾する脚部片で、器形は不明である。外面には凸帯と蓮弁文をもつ。粗い貫入の目立つ軸は内面まで施し、畳付は削って面取りする。器壁は最も厚い部分で2.9cmを測る。(125)は透かしをもつ器台とみられる。外面胴部に唐草文を配し、内面は無文である。器壁は厚く、最も厚みのある(125b)で2.8cmを測る。二次被熱により、釉に沸痕がみられる。(126)は壺である。頂部中央はわずかに窪み、摘みを貼り付ける。内面の釉掛りに斑がみられる。(127)は合子の蓋である。平坦な頂部の上面には格子文、内湾する体部には唐草文を配し、内面は無文である。二次被熱により、釉に沸痕がみられる。(128)は外面に蓮弁文を配する酒会壺の腰部片である。釉には貫入がみられない。(129・130)は口縁が端反りの染付皿B群である。ほぼ同様の法量・器形・文様である。外面は体部に唐草文、高台基に界線、内面は見込みに唐草文と界線を配し、口縁部の一部が残る(130)には四方禪文がみられる。貫入の目立つ軸は高台内にも施し、畳付は削って面取りする。

鑄型 (131~138)は鑄造遺構の残欠と考えられるSX3789およびその周辺から出土した梵鐘の鑄型である。鑄造後に鑄型は破壊されるため、原形をとどめていない。そのため出土した鑄型は細片が多く、復元することは困難であるが、形状をうかがい知ることのできる外型の一部が残存する。131・132は径約8.5cmを測る撞座の鑄型である。撞座の文様は外区が単弁の蓮弁文が8弁、内区は8花卉の内に8個の珠子と中央に1個の珠子を呈す。133~135は龍頭の鑄型であり、136は乳の鑄型である。径は1.9cm以上と考えられる。137・138は鑄型の底部であり、その大きさから口径約60cmであったことが推定され、半鐘といわれる鑄造の鐘であったと考えられる。

#### 第64次調査区 下層礎石面 (第14図、PL.13)

16列以東とWQ列以南(A地区)でSB3719・3721等の礎石を検出した下層遺構面より出土した遺物である。ほぼ完形の上節瓦質がWP10・13区でまとまって出土し、その中には建物構築の際の地鎮として埋納されたと考えられるものがある。

越前焼 (139・140)はⅣ群Bの大甕である。(139)は口縁外面直下にU字状の湾曲があり、その下に尖った稜がみられる。肩部は張りの少ない湾曲で、肩上に押印がみられる。(140)は口縁外面直下のところが直線状に下がり、口縁部縦方向の肥厚がやや大きい。また、稜は尖らずに緩やかな丘状を呈す。肩上に押印がある。(141)は鉢である。口径27.8cmを測り、口端は丸みをもって仕上げられる。体部内面にヘラ記号とみられる2本の直線が刻まれる。

土師質土器 (142~156)は皿である。(142・143)はD3類で、ともに器形の帯みがほとんどなく円形に整い、薄手で良質感がある。(142)は口径14.9cmを測る。底部から体部にかけて丸くカーブし、口縁は端反りで、見込みに圈線がないといった、古手のものに近い特徴がある。(143)は口径13.6cmと一回り小さく、見込みに浅い圈線をもち、その内側がわずかに盛り上がる。(144~147)はD2類であるが、

全体的に薄手で良質感があり、古手のものに近い特徴がある。(144・145)は口径約12cmで、底部から体部にかけての丸みが弱く逆台形状で、口縁は端反りである。見込みには浅く幅広い圏線がめぐり、その内側がわずかに盛り上がる。(146・147)は口径11.5cm前後とやや小さく、底部から体部にかけて丸みがある。(148～154)はC2類で、比較的薄手で底部から体部にかけて丸くカーブし、口縁は端反りが多く、古手のものに近い。(148・149)は口径9.4～10cm、体部上半が回しナデにより外反する。(150～154)は口径9cm前後で、(151)は体部の指押さえにより口縁が強くくびれる。(154)は口径8.3cmでやや小さい。(155)はC1類で、口径7.5cm、薄手である。(156)はA類のいわゆる「へそ皿」である。口径7.5cmを測り、底部中央が外から強く押され、内面が3mm突出する。

**瀬戸・美濃焼** (157)は灰釉の丸碗である。高台内も含め、全面に施釉されている。胴部は緩やかに内湾し、上方に立ち上がる。高台は付高台で断面長方形を呈する。大窯1か2段階に属す。

**中国製陶磁器** (158・159)は青磁である。(158)は碗の底部で、見込みに「乾」の印刻をもつ。細かい貫入の日立つ軸は全面に施した後、高台内を丸く掻き取る。(159)は腰折れの棧花皿である。貫入の日立つ軸は見込中央と高台内を掻き取り、見込みに重ね焼きの痕跡を残す。破断面には漆による補修痕が残る。

#### 第65次調査区 UA～UD列間、14列以東出土遺物 (第15図、PL.14)

SX3793の東側付近より出土した遺物で、土師質皿を中心とする遺物が集中してみられる。

**越前焼** (160)はⅢ群bの大甕で、口径48cmを測る。(161)は甕の底部である。

**土師質土器** (162～166)は皿である。(162)はC2類で、口径9.2cmを測る。形はやや楕円状で、底から体部にかけて丸く、口縁は外反せず、口縁上端が水平に面取りされる。(163)はC1類で、口径7.7cmを図る。口縁の半周分が歪み、D字形を呈す。底から体部にかけて丸みがあり、口縁はやや端反りである。内面の体部下半には強い指押さえ痕が点在する。(164～166)はD3類である。全て良質感があり、見込みの圏線が明瞭で幅広い特徴をもつ。(164)は口径13.8cmで、薄手良質のいわゆる「白かわらけ」と呼ばれるタイプである。底は水平で、体部は逆台形状を呈し、口縁はわずかに端反である。(165・166)は赤みが強く「白かわらけ」とはいえないが、器形は整った円形で、(164)ほどではないが薄手である。

**瀬戸・美濃焼** (167)は錆釉の掻鉢である。底部には回転糸切り痕が残る。大窯の時期に属す。(168)は山茶碗の小皿である。胴部は内湾しつつ、口縁端部が丁寧に面取りされている。外面の口縁部は粗いナデ調整、底部には回転糸切り痕が残る。内面は回転ナデである。時期は東濃型山茶碗の生田段階(15世紀後半)に属す。

**中国製陶磁器** (169・170)は細い線描き蓮弁文の碗B4類である。いずれも線の間隔が広い。(169)は貫入の日立つ灰緑色の鞋が、(170)は貫入のない青味を帯びた軸が施される。

#### 第65次調査区 SF3735出土遺物 (第15図、PL.14)

溜料と考えられる方形石積施設SF3735の覆土中の出土遺物である。

**土師質土器** (171～173)は皿。(171～173)はD3類で、器壁はかなり薄く、良質薄手の「白かわらけ」である。見込みの圏線は浅く幅広い。(171)は口径14.1cmで、逆台形状の体部に、口縁はやや強く外反する。(172)は底から体部にかけて丸みがあり、口縁先端がわずかに外反する。(173)は口径12.9cmで、逆台形状の体部に、口縁は外反せず真っ直ぐに立ち上がる。(174)はD1類で、口径10.2cmを測る。器

形はやや深めで、底部がやや小さく、底部は幅広く窪む。見込みと体部の境に強い指押さえ痕がある。(175・176)はC2類。やや重んじた器形であるが、口縁端部のつまみ上げが明瞭で、その外側が縦に面取りされる。(177・178)はC1類で、タール痕が付着する。(177)は口径7.9cmで、内面にナデ抜き痕が明瞭に残る。(178)は口径7.7cmを測る。

**中国製陶磁器** (179)は口縁が端反りの染付皿B群である。外面に界線と牡丹唐草文、内面に界線と見込の玉取獅子をもつ。釉は内面まで施し、壺付のみ削って面取りし、露胎とする。壺付付近に砂粒の付着がみられる。また、高台内側には赤色漆が輪状に残る。

**木製品** (180)は下駄状木製品と称されるもので、用途は不明である。長さ20.95cm、幅5.35cm、厚さ1.95cmを測る。両端に約0.7cm×約0.5cmの方形の孔が在り、中央より少しズレた部分に「抉り」が施されている。抉りの部分の幅は3.50cmを測る。これまでの同形状の木製品の出土例(朝倉館前連絡道路敷設に伴う発掘調査、第40次発掘調査等)では厚さ約0.15cmの薄い上板が張り付いている場合がある。この木製品には上板がなかったが、これまでに出土した上板だけの形態からみると、草戸千軒町遺跡(広島県福山市)でも同様の上板が出土しており、草履状木製品と記載している。

#### 第65次調査区 SV3709東側炭層出土遺物(第15図、PL.14)

SV3709の東側では、SV3711にかけて炭混じり土層が広がり、そこから出土した遺物を一括する。

**越前焼** (181)はお尚黒壺タイプの小壺で、肩部から下の破片である。(182・183)は摺鉢で、ともにIV群である。口縁は内傾して面取りされ、上面はU字に窪み、両端が鋭く角張る。

**土師質土器** (184)はD2類の皿である。1/2個体分の破片で、底部外面に墨書らしき痕跡がみられるが、墨書の判読はできない。

**瀬戸・美濃焼** (185~187)は鉄釉の天目茶碗である。(185)は小天目茶碗で、胴部に褐色の鉄釉、腰部には錆釉が掛かっている。口縁部は緩く外反している。大窯第1段階に属す。(186)は胴部に鉄釉、腰部に錆釉が掛かる。胴部上位でやや屈曲し、上方にまっすぐ立ち上がる。底部は削出輪高台で全面に錆釉が掛かっている。大窯第1段階に属す。(187)は胴部に光沢のある鉄釉が掛かり、腰部は露胎のままである。胴部上位は内湾気味で、口縁端部が外側に摘み出されている。近世中期の所産で、混入品とみられる。

**中国製陶磁器** (188)は口縁が端反りの白磁皿である。釉掛りに厚薄の斑があり、高台内には一部露胎箇所がある。高台は壺付のみ削って面取りし、露胎とする。(189)は口縁が端反りの染付皿B群である。外面に界線と牡丹唐草文、内面に界線と見込の玉取獅子をもつ。釉は内面まで施し、壺付のみ削って面取りし、露胎とする。壺付付近に砂粒の付着がみられる。

#### 第65次調査区 SD3710出土遺物(第16図、PL.15)

**越前焼** (190)は壺で、器高30cm以上ある中型の壺の口縁部片であろう。(191)は壺の体部上半で、ヘラ記号が付く。

**土師質土器** (192~198)は皿である。(192)は口径14.1cmのD3類で、薄手良質のタイプである。平らな底部から体部にかけては丸みがあり、体部は外に開きみで浅い器形を呈す。見込みに浅く幅広い圈線がめぐる。(193)は口径12.5cmでD3類とするには小さいが、色調が白く、かなり薄手で良質な特徴から「白カワラケ」のD3類に含められる。平らな底から体部が逆台形状に立ち上がり、口縁端部が

小さく積み上げられる。見込みに浅く幅広い圈線がめぐる。(194)は口径11.4cmのD 2類である。ほぼ円形に整った器形で、やや厚手である。底は平らだが、外面中央に粘土溜まりの瘤がある。見込みに、明瞭でU字状の幅広い圈線がめぐり、圈線の内側に沿って盛り上がりが見られる。(195)は口径9.9cmのD 1類である。口縁の一方が尖る平面形を呈し、白色薄手である。底は平らで、体部が逆台形状に立ち上がるが、体部上半のナデ回しとの境から急に外反し、鋭い道具で削ったような段が見られる。(196・197)はC 2類である。(196)は口径8.7cmで平らな底部から体部が逆台形状に立ち上がる。(197)は口径8.4cmで、器形は(196)と類似する。(198)は口径7.2cmのB類である。

**中国製陶磁器** (199)は口縁が端反りの白磁皿である。高台内側面から内面にかけて、一部露胎箇所がある。高台は畳付のみ削って面取りし、露胎とする。

#### 第65次調査区 SD3717周辺出土遺物 (第16図、PL. 15)

溝SD3717を覆っていた暗灰褐色土から出土した遺物群である。

**越前焼** (200)は口径41.6cmを測る中壺。口縁上面は幅2.5cmで水平である。(201~203)は壺である。(201)は小壺の肩部でヘラ記号が見られる。(202)は小壺の底部で、底径9.2cmを測る。(203)は壺の底部で、底径13.8cmを測る。

**土師質土器** (204)は小壺である。口縁が内側にすぼまる形で、口径4.8cmを測る。

**中国製陶磁器** (205~207)は青磁である。(205)は龍泉窯系統I類である。外面はロクロ目を残し、口縁下を強くなで、わずかに外反させる。内面口縁下に細い沈線がめぐる。(206)は無文の丸皿である。外面はわずかにロクロ目を残す。釉は淡い青白色を呈する。(207)は胴が内湾して立ち上がり、口縁部を丸く肥厚して納める鉢である。内面には丸彫りの細い鏡文を配する。(208~211)は白磁である。(208)はいわゆる菊皿である。高台は畳付のみ削って面取りし、露胎とする。高台内には圈線と文字の一部が見られる。(209・210)は口縁が端反りの皿である。(210)は胴が内湾気味に立ち上がり、口縁下を強くなで外反させる。見込脇に低い段がめぐる。白色の磁胎に透明の釉を施す。(211)は腰折れで、口縁端部を薄く作る。高台は畳付のみ削って面取りし、露胎とする。(212~216)は染付である。(212)は外面に波濤文帯とアラベスクを配する碗D群、(213)は外面に芭蕉葉文を配する碗C群である。(214)はいわゆる茶筒底の皿C群である。見込に「壽」字を配する。畳付は露胎とする。(215・216)は口縁が端反りの皿B群である。外面に牡丹唐草文、(216)は内面に玉取獅子を配する。

#### 第65次調査区 SX3812出土遺物 (第16・17図、PL. 15・16)

**土師質土器** (217~230)は皿である。(217)は口径11.5cmのD 1類である。器壁はやや厚手で、体部は逆台形状を呈す。体部の半ばで括れ、上半はナデ回しされて口縁が外反し、口縁端部は積み上げされる。(218・219)は、それぞれ口径8.4cm、9.1cmのC 2類である。体部の上半に指押さえ痕がめぐり、口縁端部を狭くナデ回し、口縁端部は積み上げされる。(220)は口径8.1cmのC 1類である。やや薄手で、体部は逆台形状に立ち上がる。体部の上半まで指押さえ痕がめぐり、口縁端部を狭くナデ回す。(221~230)は手づくねタイプのB類である。(221~224)は口径7.9~8.1cmとやや大きめで、(225~230)は口径5.6~7.2cmのB類として普通のサイズである。

**石製品** (231)は笏谷石製の行火(バンドコ)の蓋である。平面形は楕円とみられ、天井部には長方形を組み合わせた窓を設けている。類例は少ないが、朝倉館跡や第44次調査などで出土している。

#### 第65次調査区 SB3726北側出土遺物 (第17図、PL. 16)

越前焼 (232)は壺の体部でヘラ記号がある。(233)はⅢ群の擂鉢で、口縁部には丸みがある。罫目は11条で、下から上に施され、口縁内面沈線で止まる。罫目を切って、三本斜線のヘラ記号が施される。

土師質土器 (234~284)は皿である。(234~239)は口径13.6~15.7cmのD3類である。底から体部にかけて丸みのある器形で、体部下半は指押さえ痕が明瞭に付き、上半はナデ回しによって口縁がやや外反する。また、薄手で歪みの少ない整った円形を呈し、かなり良質な作りである。見込みに浅く幅広い圏線がめぐり、(235~237)では圏線内側に粘土の盛り上がりが見られる。(240・241)は口径11.3~12.0cmのD2類である。底部から体部にかけて丸みがあり、摘みナデされた口縁部がやや外反する。見込みに浅く幅広い圏線があり、(240)は圏線内側に粘土の盛り上がりが見られ、(241)は圏線内の指押さえが強く凹凸が見られる。(242~271)はC2類である。口径は8.8~9.6cmだが、 $9.2 \pm 0.2$ cmにほとんどが収まる。全体的に底部が小さ目で、底から体部にかけて丸みがある器形が多い。(242)は口径9.6cmとこの類では大きい。口縁にタール痕が厚く付着する。(243~246)は体部が指押さえによって括れるもので、(246)は内面の「J」字状ナデが明瞭である。(247~250)は比較的薄手で歪みがなく、良質な作りをしている。(250)は楕円状にやや歪む。(251~253)は全体が薄手であるが、器形に歪みがある。(253・254)は底部外面の中央に指で突いた窪みがある。(255)は口縁を摘んでナデ回した際に、端部の内面を水平に仕上げている。(256~258)は整った円形を呈し、底から体部にかけて丸い。(259)は薄手である。(260)はこの類では厚手で、口縁端部外側が摘みナデによって膨らんでいる。(261)は底部外面が窪み、口縁にタール痕が厚く付着する。(262)は薄手で、底から体部にかけて丸みがある。体部中央に、成形時の指押さえによって付いたとみられる爪痕が連続する。(263・264)はやや歪みのある器形で、口縁にタール痕が付着する。(264)は口縁端部の摘み上げが明瞭である。(265・266)は薄手で、体部の指押さえが強く、内外面に指押さえの凹凸が明瞭に付く。(267)は体部が逆台形状に立ち上がる。体部の指押さえは強めで、口縁端部摘み上げは明瞭である。口縁の半周にタール痕が付着する。(268)は口径8.8cmと、この類では小さい。(269)は底から体部にかけて丸く、体部に括れない。(270)は体部が逆台形状を呈し、口縁にタール痕が付着する。(271)は見込みの中央に、内面ナデ調整によってできた粘土溜まりの瘤が見られる。(272~276)は口径7.1~7.5cmのC1類である。(272)は体部の指押さえが強く、底部中央が指で突かれて窪む。(273)は底から体部にかけて丸みがある。(274・275)は、体部の指押さえが強い。(276)は底から体部にかけて丸く、口縁端部のつまみ上げが明瞭である。(277・278)は口径6.0~6.3cmと一回り小さいが、手づくね成形でなく、ナデ回し成形によって作られたもので、D類である。(279)は口径9.0cmで厚手であり、底から体部にかけて丸く、体部はナデ回しされる。古手の、いわゆる「ボテタイプ」の典型的な形である。(280~284)は手づくねタイプのB類で、口径にばらつきがある。(280~282)は口径8.5~8.8cmとやや大きなもの、(283・284)は口径7.2~7.3cmとB類の一般的な大きさのものである。

#### 第64次調査区、深掘りトレンチ下層出土遺物 (第17図、PL. 16)

Qライン脇の下層遺構を検出するための深掘りトレンチから出土した遺物である。

越前焼 (285~287)は大甕である。(285・286)はⅣ群cの口縁部で、肩部に同じ押印<C類>が見られる。(287)は底部である。

土師質土器 (288~305)は皿である。(288)は皿C2類で、口径9.5cmを測る。底と体部の境は屈折し、

体部は斜めに立ち上がる。見込みの外側に、強い指押さえの痕が連続してみられる。(289～298・300)はD3類、(299・301～305)はD2類である。個体によって強弱はあるが、いずれも見込みに浅く幅広い圏線がめぐる点で共通する。(289)は口径16.4cmを測る。全体に薄手で、体部は白色、底部は黒色を呈す。(290)は口径15.1cmで、黄橙色を呈す。(291～297)は口径14.0～15.2cmのかなり似通った個体である。やや薄手で黄白色を呈し、底から体部にかけて丸みがあり、口縁がやや外反する。タール痕は付着しない。(296)は見込み圏線が深く明瞭である。(298)は口径13.4cmで橙色を呈し、体部が斜め直線状に立ち上がり厚手になる。体部内面下位に逆方向にナデ抜いた痕が明瞭に残る。(300)は口径13.0cmで黄橙色を呈し、やや厚手である。(299・301～305)は口径10.8～12.0cmを測り、淡褐色を呈す。底から体部にかけて丸みがあり、口縁はやや外反する。体部の中ほどにみられる口縁ナデ回しの下端がはっきりした稜になる点が特徴的で、特に(299)の稜は工具で引いたかのように鋭く、直線的である。(299・303・304)は口縁にタール痕が付着する。(305)の底部外面の縁に近い位置に、成形時に付いた爪痕が連続してみられる。

瓦質製品 (306)は瓦質の火舎である。器形はバケツ形と推定され、口縁部下には円形の透かしを入れてある。

中国製陶磁器 (307)は青磁碗である。内外面が無紋の龍泉窯系E類である。高台内は軸刺ぎが認められる。(308)は青磁の腰折れ稜花皿である。軸は粗い貫入が目立ち、青白色を呈する。(309)は小振りの白磁皿D群である。胎土は白色を呈し、磁質である。軸は白色を呈し、外面腰部以下を露胎とする。

#### 引用・参考文献

- 国立歴史民俗博物館 1993『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁』  
滋賀県教育委員会 2009『特別史跡安土城跡発掘調査報告書』Ⅱ  
広島県立歴史博物館 2005『草戸千軒町遺跡調査研究報告7 重要文化財 広島県草戸千軒町遺跡出土品 指定目録』  
福井県教育委員会 1979『特別史跡・乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告1 朝倉館跡の調査』  
福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 1983『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』  
福井県立朝倉氏遺跡資料館 1989『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 平成元年度発掘調査環境整備事業概要(21)』  
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2000『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅵ』  
藤澤良祐 1994『山茶碗研究の現状と課題』『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター  
藤澤良祐 2002『瀬戸・美濃大窯陶年の再検討』『研究紀要』第10号 瀬戸市埋蔵文化財センター  
藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

# 遺物観察表

表4 遺物観察表

番号	図版	PL	種別		次数	グリッド	土層	法量(cm)			備考
								口径	器高	底径	
1	10	9	越前焼	大甕	64			—	—	—	Ⅱ群
2	10	9	越前焼	大甕	65	UK15	トレンチ内	—	—	—	Ⅰ群
3	10	9	越前焼	大甕	65	UC15	耕土	—	—	—	Ⅳ群 a
4	10	—	越前焼	大甕	65	UK20	耕土	—	—	—	押印
5	10	—	越前焼	大甕	64	WN13	耕土	—	—	—	押印
6	10	9	越前焼	播鉢	64	WP11	耕土	—	—	—	Ⅳ群 播目10本
7	10	9	越前焼	播鉢	64	WL13	耕土	—	—	—	Ⅳ群 播目9本
8	10	9	越前焼	播鉢	64	WO14	耕土	29.2	10.5	11.4	Ⅲ群 a 播目8本
9	10	—	越前焼	播鉢	65	UL11	耕土	22.7	9.5	12.0	Ⅳ群
10	10	9	越前焼	鉢	65	UK19	耕土	26.2	14.6	14.8	
11	10	9	瓦質	鉢	64			22.5	10.0	12.7	
12	10	9	瓦質	甃瓦	64	WK12	拡張区	—	—	—	
13	10	9	瓦質	仏花甃	64	WK12	拡張区	12.0	—	—	
14	10	9	鉄軸	天目茶碗	65	UK19	耕土	10.4	(5.4)	—	
15	10	9	鉄軸	天目茶碗	64	WK12	拡張区	8.0	—	—	
16	—	9	鉄軸	天目茶碗	65	UK16	耕土	—	—	—	大甕第1段階
17	10	9	鉄軸	甃	64	WN13	耕土ト	4.8	—	—	
18	—	9	灰粒	甃				—	—	—	
19	—	9	灰軸	甃				—	—	—	大甕第1段階
20	—	9	灰軸	甃	65	UL11	表土	10.6	—	—	
21	—	9	灰軸	甃	65	WM13	表土	—	—	—	
22	10	9	灰軸	甃				—	—	—	
23	—	9	灰軸	銅皿				—	—	—	古瀬戸後期Ⅳ新
24	—	9	灰軸	銅皿				—	—	—	古瀬戸後期Ⅱ
25	—	9	灰軸	大皿				—	—	—	古瀬戸後期Ⅳ新
26	—	9	灰粒	小鉢				—	—	—	
27	11	10	青磁	甃	64	WN11	耕土中	14.2	—	—	C2類
28	—	10	青磁	甃			耕土	—	—	—	B4類
29	11	10	青磁	甃	65	UK13	耕土	—	—	4.1	B4類
30	11	10	青磁	甃	65	UK20	耕土中	34.6	8.5	26.0	
31	11	10	青磁	皿	65	UL11	表土	10.8	—	—	
32	—	10	白磁	皿				—	—	—	善徳底
33	11	10	白磁	皿	65	UL11	表土	13.3	3.1	8.0	端反
34	—	10	白磁	坏				—	—	—	八角坏
35	—	10	朝鮮製	雑物			表土	—	—	—	
36	—	10	朝鮮製	甃			表土	—	—	—	
37	11	10	石製品	甃	65	WK13	耕土	—	—	—	
38	11	10	石製品	甃	64	UF15	耕土	—	—	—	
39	11	—	金属	錠	64	WS22	耕土	—	—	—	
40	11	—	金属	釘	65	WP11	耕土	長(5.9)	—	—	
41	11	—	越前焼	大甕	64	WX12	黄色土面	—	—	—	Ⅲ群
42	11	—	越前焼	小甕	64	WP10	黄色土面	—	—	—	
43	11	10	越前焼	播鉢	64	WR13	黄色土面	35.4	13.5	14.2	Ⅲ群 b 片口
44	11	10	越前焼	播鉢	64	WM13	黄色土	34.6	12.8	12.0	Ⅲ群 b
45	11	10	越前焼	播鉢	64	WZ13	黄色土	—	—	—	
46	11	10	越前焼	播鉢	64	WM13	黄色土	45.6	—	—	Ⅲ群 b 内面ヘラ記号
47	11	10	越前焼	播鉢	64	WN14	黄色土	—	—	—	Ⅲ群 b
48	11	10	越前焼	鉢	64	WY13	黄色土面	49.0	—	—	内湾L様 外面ヘラ記号
49	11	10	鉄軸	播鉢	64	WS13	黄色土	—	—	—	古瀬戸後期Ⅳ新
50	—	10	鉄軸	甃	64	WT20	黄色土	—	—	—	古瀬戸中期Ⅱ
51	11	10	灰軸	皿	64	WU13	黄色土	—	—	—	古瀬戸後期Ⅳ新



番号	区画	PL	種 別	次数	グリッド	上層	法量 (cm)			備 考	
							口径	器高	底径		
52	11	10	灰釉	大皿	64	WR18	黄色土	—	—	—	古瀬戸後期IV新
53	11	10	灰釉	大皿	64	WS13	黄色土	35.2	10.0	13.2	古瀬戸後期IV新
54	11	—	灰釉	大皿	64	WY13	黄色土	—	—	13.0	古瀬戸後期IV新
55	12	11	土師質	皿	64	WO14	黄色土面	15.1	2.6	—	D3類
56	12	11	土師質	皿	64	WU13	黄色土面 pit	13.9	2.4	—	D3類 墨書
57	12	—	土師質	皿	64	WS13	黄色土面 pit	11.6	2.3	—	D2類
58	12	—	土師質	皿	64	WR17	黄色土面	11.4	1.8	—	D2類
59	12	11	土師質	皿	64	WS13	黄色土面 pit	11.2	2.2	—	D2類
60	12	11	土師質	皿	64	WO14	黄色土面	9.5	2.0	—	C2類
61	12	—	土師質	皿	64	WO14	黄色土面	9.0	1.9	—	C2類
62	12	—	土師質	皿	64	WO14	黄色土面	9.2	1.7	—	C2類
63	12	—	土師質	皿	64	WS13	黄色土面 pit	9.1	1.8	—	C2類
64	12	—	土師質	皿	64	WS13	黄色土面	8.8	1.8	—	C2類
65	12	11	土師質	皿	64	WS13	黄色土面 pit	9.1	2.0	—	C2類 タール痕
66	12	—	土師質	皿	64	WS17	黄色土面	8.6	2.0	—	C2類
67	12	11	土師質	羽釜	64	WL16	褐色土	10.2	—	—	
68	—	11	土師質	羽釜	64	紋張区	—	—	—	—	
69	12	11	土師質	器台	64	WU13	黄色土面 pit	7.3	3.5	6.0	
70	12	11	青磁	碗	64	WS14	黄色土	14.2	—	—	E類
71	12	11	青磁	碗	64	WN14	黄色土面	13.7	—	—	B4類
72	12	11	青磁	碗	64	WL14	黄色土	10.7	—	—	B4類
73	12	11	白磁	皿	64	WU18	黄色土	11.6	—	—	D3類
74	12	11	染付	皿	64	WP18	黄色土	—	—	4.6	B群 滲反
75	12	10	鉄釉	天目茶碗	64	WU18	黄色土	11.9	(5.5)	—	
76	—	11	鉄釉	天目茶碗	64	WU17	黄色土	—	—	—	
77	12	—	金属	釘	64	Wk13	黄色土	—	—	—	鍛造
78	12	—	金属	釘	64	WZ14	黄色土	—	—	—	
79	12	—	金属	釘	64	WX11	黄色土	—	—	—	
80	12	—	金属	釘	64	WZ14	黄色土	—	—	—	
81	12	—	石製品	碁石	64		黄色土	—	—	—	
82	12	11	越前焼	大甕	65	UA13	褐色土	—	—	—	IV群 a
83	12	11	越前焼	大甕	65	UA9	SF3734	—	—	—	押印
84	12	—	土師質	皿	65	UA9	SF3734	13.6	2.3	—	D3類 タール痕
85	12	—	土師質	皿	65	UA9	SF3734	9.1	2.1	—	C2類
86	12	—	土師質	皿	65	UA10	黄褐色土	9.6	1.9	—	C2類
87	12	—	土師質	皿	65	UB9	茶褐色土	9.4	1.9	—	C1類
88	12	—	土師質	皿	65	UB9	茶褐色土	9.2	2.1	—	C2類 タール痕
89	12	—	土師質	皿	65	UB9	茶褐色土	7.6	1.7	—	C1類
90	12	11	越前焼	大甕	65	UH12	茶色土	—	—	—	IV群 a 押印
91	12	11	越前焼	中甕	65	UI10	茶色土	28.0	(34.5)	15.5	踏定形
92	12	11	越前焼	播鉢	65	UF12	茶色土	—	—	—	IV群
93	13	12	越前焼	播鉢	65	UF12	茶色土	38.0	—	—	IV群
94	—	12	土師質	皿	65	UK12	石列茶色土	10.4	2.3	—	D1類 タール痕
95	—	12	土師質	皿	65	UK11	茶褐色土	9.6	2.3	—	
96	—	12	土師質	皿	65	UJ12	石列茶色土	7.1	1.8	—	B類 タール痕
97	13	12	白磁	皿	65	UK12	石列茶色土	—	—	3.7	D群
98	13	12	染付	碗	65	UJ12	石列茶色土	12.0	—	—	B群 滲反
99	13	12	染付	皿	65	UK12	石列茶色土	8.6	2.1	3.9	B群 滲反
100	13	12	越前焼	大甕	65	UL10	堯ビット	—	—	—	IV群 b
101	13	—	越前焼	大甕	65	UL10	堯ビット	—	—	—	押印
102	13	12	越前焼	中甕	65	UL10	SX3813	49.4	78.0	28.0	
103	13	12	灰釉	碗	65	UL9	石垣下	13.4	—	—	大甕第1段階
104	13	12	白磁	罐反皿	65	UL9	石垣下	12.3	—	—	滲反
105	13	12	白磁	罐反皿	65	UL10	堯ビット	17.8	3.4	8.4	滲反
106	13	12	染付	碗	65	UL9	石垣下	11.2	(5.5)	3.8	E群

番号	図版	PL	種別	次数	グリッド	土層	法量(cm)			備考
							口径	器高	底径	
107	13	12	染付 碗	65	UL9	石垣下	12.7	—	—	
108	—	12	染付 碗	65	UI10	溝中	—	—	—	
109	13	12	染付 皿	65	UL10	藁ピット	—	—	9.8	
110	13	12	染付 皿	65	UL9	石垣下	9.0	1.9	4.7	B群 湯反
111	13	12	越前焼 大甕	65	UD16		90.0	90.3	28.4	IV群 c
112	13	12	越前焼 大甕	65	UD16	茶褐色土	—	—	—	IV群 c
113	13	12	越前焼 大甕	65	UD16	茶褐色土	—	—	—	IV群 c
114	13	12	越前焼 大甕	65	UH18	茶色土	—	—	—	IV群 c
115	13	12	越前焼 壺	65	UK20	石組の上	10.0	—	—	
116	14	—	土師質 皿	65	UK15	褐色土	9.2	1.9	—	C2類 タール板
117	14	—	土師質 皿	65	UK14	褐色土	9.0	2.0	—	C2類 タール板
118	14	—	土師質 皿	65	UK15	褐色土	9.5	2.0	—	C2類 タール板
119	14	13	土師質 二鈴	65	UD16	アゼ	2.8	3.2	—	
120	14	13	鉄軸 天目茶碗	65	UK17	茶色土	12.5	(5.0)	—	大甕第1段階
121	14	13	鉄軸 天目茶碗	65	UK20	石組の上	11.6	(6.0)	—	大甕第2段階
122	14	13	灰釉 大皿	65	UE17	茶色土	34.2	—	—	古瀬戸後期IV新
123	14	13	青磁 壺	65	UK19	茶色土	26.8	—	—	
124	14	13	青磁 脚部	65			—	—	—	
125	—	13	青磁 香台	65	UK20	石組の上	—	—	—	
126	—	13	青磁 蓋	65	UK20	石組の上	—	—	—	
127	—	13	青磁 蓋	65	UK20	石組の上	—	—	—	
128	—	13	青磁 酒会帯	65	UK20	石組の上	—	—	—	
129	14	13	染付 皿	65	UK19	茶色土	—	—	6.5	B群
130	14	13	染付 皿	65	UK20	茶色土	—	—	6.4	B群
131	14	13	梵鐘鑄型 撞棒	65	UB17	表土	—	—	—	
132	14	13	梵鐘鑄型 撞棒	65	UB17	褐色土	—	—	—	
133	—	13	梵鐘鑄型 龍頭	65	UB17	褐色土	—	—	—	
134	—	13	梵鐘鑄型 龍頭	65	UB17	褐色土	—	—	—	
135	—	13	梵鐘鑄型 龍頭	65	UB17	褐色土	—	—	—	
136	—	13	梵鐘鑄型 孔	65	UB17	褐色土	—	—	—	
137	—	13	梵鐘鑄型	65	UB17	褐色土	—	—	—	
138	—	13	梵鐘鑄型	65	UB17	褐色土	—	—	—	
139	14	13	越前焼 大甕	64	WP13	下層礎石面	65.2	—	—	IV群 b
140	14	13	越前焼 大甕	64	WO12	下層礎石面	—	—	—	IV群 b 押印
141	14	13	越前焼 鉢	64	WM12	ト層礎石面	27.8	11.5	13.2	ヘラ記号
142	14	—	土師質 皿	64	WP10	下層礎石面	14.9	2.6	—	D3類
143	14	—	土師質 皿	64	WP10	下層礎石面	13.6	2.1	—	D3類
144	14	—	土師質 皿	64	WP10	ト層礎石面	12.0	2.2	—	D2類 タール痕
145	14	—	土師質 皿	64	WP10	下層礎石面	11.8	2.3	—	D2類
146	14	—	土師質 皿	64	WP10	下層礎石面	11.6	1.9	—	D2類 タール痕
147	14	—	土師質 皿	64	WP10	ト層礎石面	11.3	2.3	—	D2類
148	14	—	土師質 皿	64	WP10	下層礎石面	10.0	2.0	—	C2類 タール痕
149	14	—	土師質 皿	64	WO14	下層礎石面	9.4	2.0	—	C2類
150	14	—	土師質 皿	64	WP13	下層礎石面	9.0	2.1	—	C2類
151	14	—	土師質 皿	64	WP10	ト層礎石面	9.0	2.0	—	C2類
152	14	—	土師質 皿	64	WP13	下層礎石面	8.9	1.8	—	C2類
153	14	—	土師質 皿	64	WP13	下層礎石面	9.0	1.9	—	C2類
154	14	—	土師質 皿	64	WP13	下層礎石面	8.3	1.6	—	C2類
155	14	—	土師質 皿	64	WP10	ト層礎石面	7.5	1.7	—	C1類
156	14	—	土師質 皿	64	WP10	下層礎石面	7.5	1.7	—	A類 ヘソ皿
157	14	13	灰釉 碗	64	WN13	下層礎石面	11.8	6.6	4.8	
158	14	13	青磁 碗	64	WN13	石列面	—	—	4.9	
159	14	13	青磁 皿	64	WN13	焼土面	12.5	—	—	椀花皿
160	15	14	越前焼 大甕	65	UC13	灰褐色土	48.0	—	—	III群 b
161	15	14	越前焼 大甕	65	UB14	灰褐色土	—	—	20.6	

番号	国産	Pl.	種別	次数	グリッド	土層	法量(cm)			備考
							口径	器高	底径	
162	15	—	土師質 皿	65	UC13	灰褐色土	9.2	2.0	—	C 2類
163	15	—	土師質 皿	65	UC13	灰褐色土	7.7	1.5	—	C 1類
164	15	—	土師質 皿	65	UA11	黄褐色土	13.8	2.3	—	D 3類
165	15	—	土師質 皿	65	UA11	黄褐色土	14.3	2.5	—	D 3類
166	15	—	土師質 皿	65	UA11	黄褐色土	14.6	2.5	—	D 3類
167	15	—	鉄釉 福鉢	65	UA10	黄褐色土	—	—	—	
168	15	14	無袖 山茶碗	65	UB13	黄灰色土	8.2	2.2	4.2	
169	15	14	青磁 碗	65	UA12	灰色整地層	13.2	—	—	
170	15	14	青磁 碗	65	UB10	灰褐色土	13.0	—	—	
171	15	—	土師質 皿	65	UD10	SF3735	14.1	1.9	—	D 3類 タール痕
172	15	—	土師質 皿	65	UD10	SF3735	13.3	2.3	—	D 3類 タール痕
173	15	—	土師質 皿	65	UD10	SF3735	12.9	2.1	—	D 3類
174	15	—	土師質 皿	65	UD10	SF3735	10.2	2.2	—	D 1類 タール痕
175	15	—	土師質 皿	65	UD10	SF3735	9.5	1.9	—	C 2類 タール痕
176	15	—	土師質 皿	65	UD10	SF3735	9.0	1.6	—	C 2類
177	15	—	土師質 皿	65	UD10	SF3735	7.9	1.8	—	C 1類 タール痕
178	15	—	土師質 皿	65	UD10	SF3735	7.7	1.8	—	C 1類 タール痕
179	15	14	染付 皿	65	UD10	SF3735	11.9	2.9	8.4	B群 端反
180	15	14	木製品 下駄状木製品	65	UD10	SF3735	長21.0	幅5.4	厚2.0	草履下駄
181	15	—	越前焼 小壺	65	UG12	灰層上面	—	—	11.6	弱・底部
182	15	14	越前焼 福鉢	65	UF12	灰層上面	—	—	—	IV群
183	15	14	越前焼 福鉢	65	UH10	砂利面	30.6	10.8	12.6	IV群
184	—	14	土師質 皿	—	UH12	灰混じり褐色土	—	—	—	D 2類 墨香
185	15	14	鉄釉 大日茶碗	65	UH12	灰混じり褐色土	8.9	(3.8)	—	大森第1段降
186	15	14	鉄釉 大日茶碗	65	UF12	灰層上面	12.2	6.4	4.4	大森第1段降
187	15	14	鉄釉 大日茶碗	65	UH12	灰層上面	10.0	(5.2)	—	近井中期
188	15	14	白磁 皿	65	UG11	暗灰褐色土	11.6	3.0	6.6	端反
189	15	14	染付 皿	65	UG11	暗灰褐色土	13.2	2.9	7.8	B群 端反
190	16	15	越前焼 壺	65	UJ12	暗灰褐色土	—	—	—	
191	16	15	越前焼 壺	65	UJ12	暗灰褐色土	—	—	—	ヘラ記号
192	16	—	土師質 皿	65	UJ12	SD3710	14.1	1.9	—	D3類
193	16	—	土師質 皿	65	UJ12	SD3710	12.5	2.3	—	D 3類 タール痕
194	16	15	土師質 皿	65	UJ12	SD3710	11.4	2.3	—	D 2類 タール痕
195	16	—	土師質 皿	65	UJ12	SD3710	9.9	2.1	—	D 1類 タール痕
196	16	15	土師質 皿	65	UJ12	SD3710	8.7	1.9	—	C類 タール痕
197	16	—	土師質 皿	65	UJ12	SD3710	8.4	1.9	—	C類
198	16	—	土師質 皿	65	UJ12	SD3710	7.2	2.2	—	B類
199	16	—	白磁 皿	65	UJ12	SD3710	9.8	2.4	5.8	端反
200	16	15	越前焼 中壺	65	UM12	暗灰褐色土	41.6	—	—	口縁、肩
201	16	—	越前焼 壺	65	UM12	暗灰褐色土	—	—	—	ヘラ記号
202	16	—	越前焼 壺	65	UM12	暗灰褐色土	—	—	9.2	底部
203	16	—	越前焼 壺	65	UL13	暗灰褐色土	—	—	15.8	底部
204	16	—	土師質 小壺	65	UM12	暗灰褐色土	4.8	—	—	
205	16	15	青磁 碗	65	UM12	暗灰褐色土	18.0	—	—	龍泉窯系統I類
206	16	15	青磁 碗	65	UM12	暗灰褐色土	11.0	—	—	
207	16	15	青磁 鉢	65	UL13	暗灰褐色土	23.4	—	—	
208	16	15	白磁 皿	65	UM12	暗灰褐色土	12.0	3.0	5.7	菊皿
209	16	15	白磁 皿	65	UM12	暗灰褐色土	14.5	—	—	
210	—	15	白磁 皿	65	UM12	暗灰褐色土	10.4	—	—	端反
211	16	15	白磁 皿	65	UM13	暗灰褐色土	9.6	2.2	5.6	端反
212	16	15	染付 碗	65	UL12	暗灰褐色土	—	—	—	D群
213	—	15	染付 碗	65	UL12	暗灰褐色土	—	—	—	C群
214	16	15	染付 皿	65	UL13	暗灰褐色土	—	—	5.8	C群 基筋底
215	16	15	染付 皿	65	UM12	暗灰褐色土	11.7	—	—	B群 端反
216	16	15	染付 皿	65	UM12	暗灰褐色土	9.9	2.5	4.8	B群 端反

番号	図版	PL	種別	次数	グリッド	土牌	法量 (cm)			備考	
							口径	勢高	底径		
217	16	15	土師質	皿	65	UL12	SX3812 暗灰褐色土	11.5	2.4	—	D1類
218	16	15	土師質	皿	65	UL12	SX3812 暗灰褐色土	8.4	2.3	—	C2類
219	16	15	土師質	皿	65	UL13	SX3812 暗灰褐色土	9.1	1.9	—	C2類
220	16	—	土師質	皿	65	UL12	SX3812 暗灰褐色土	8.1	1.7	—	C1類
221	16	—	土師質	皿	65	UL13	SX3812 暗灰褐色土	8.1	2.0	—	B類
222	16	—	土師質	皿	65	UL13	SX3812 暗灰褐色土	8.0	1.7	—	B類
223	16	—	土師質	皿	65	UL13	SX3812 暗灰褐色土	8.1	1.9	—	B類
224	16	15	土師質	皿	65	UL13	SX3812 暗灰褐色土	7.9	2.4	—	B類
225	16	15	土師質	皿	65	UL13	SX3812 暗灰褐色土	6.8	1.7	—	B類
226	16	—	土師質	皿	65	UL12	SX3812 暗灰褐色土	6.7	1.4	—	B類
227	16	—	土師質	皿	65	UL13	SX3812 暗灰褐色土	7.2	1.8	—	B類
228	16	—	土師質	皿	65	UL12	SX3812 暗灰褐色土	6.9	1.6	—	B類
229	16	—	土師質	皿	65	UL12	SX3812 暗灰褐色土	6.5	2.2	—	B類
230	16	15	土師質	皿	65	UL13	SX3812 暗灰褐色土	5.6	1.6	—	B類
231	17	16	石製品	バンドコ壺	65	UL12	SX3812 石組上	—	—	—	—
232	17	—	磁器焼	壺	65	UB13	暗灰褐色土	—	—	—	ヘラ記号
233	17	16	磁器焼	播鉢	65	UA13	炭混灰褐色土	26.8	11.4	12.0	B群 ヘラ記号
234	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	15.7	2.4	—	D3類
235	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	14.4	2.3	—	D3類
236	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	14.2	2.6	—	D類
237	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	14.1	2.5	—	D3類
238	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	13.7	2.2	—	D3類
239	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	13.6	2.5	—	D3類
240	17	16	土師質	皿	65	UB12	炭混茶褐色土	12.0	2.1	—	D2類
241	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	11.3	2.3	—	D2類
242	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭褐色土	9.6	2.1	—	C2類
243	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.5	2.3	—	C2類
244	17	—	土師質	皿	65	UB12	炭混茶褐色土	9.5	2.0	—	C2類
245	17	—	土師質	皿	65	UB12	灰褐色土	9.5	1.9	—	C2類
246	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.4	2.3	—	C2類
247	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.4	2.3	—	C2類
248	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.4	2.2	—	C2類
249	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.3	2.3	—	C2類
250	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.3	2.1	—	C2類
251	17	—	土師質	皿	65	UB12	灰褐色土	9.3	2.0	—	C2類
252	17	—	土師質	皿	65	UB13	灰褐色土	9.3	2.0	—	C2類
253	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.3	2.0	—	C2類
254	17	16	土師質	皿	65	UB12	灰褐色土	9.3	1.9	—	C2類
255	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混茶褐色土	9.2	2.2	—	C2類
256	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.2	2.2	—	C2類
257	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.2	2.1	—	C2類
258	17	—	土師質	皿	65	UB12	灰褐色土	9.2	2.0	—	C2類
259	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.2	2.0	—	C2類
260	17	—	土師質	皿	65	UB12	炭混茶褐色土	9.2	1.9	—	C2類
261	17	—	土師質	皿	65	UB12	炭混茶褐色土	9.1	2.2	—	C2類
262	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.1	1.8	—	C2類
263	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.0	2.3	—	C2類
264	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.0	2.2	—	C2類
265	17	—	土師質	皿	65	UB13	灰褐色土	9.0	2.0	—	C2類
266	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.0	2.0	—	C2類
267	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.2	2.2	—	C2類
268	17	16	土師質	皿	65	UB12	灰褐色土	8.8	2.0	—	C2類
269	17	—	土師質	皿	65	UB12	灰褐色土	9.0	2.0	—	C2類
270	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭混灰褐色土	9.3	1.9	—	C2類
271	17	—	土師質	皿	65	UB12	炭混茶褐色土	9.1	2.2	—	C2類

番号	国版	PL	種別	次数	グリッド	土層	法量(cm)			備考	
							口径	器高	底径		
272	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭泥灰褐色土	7.5	1.8	—	C1類
273	17	16	土師質	皿	65	UB12	炭泥茶褐色土	7.3	1.7	—	C1類
274	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭泥灰褐色土	7.4	1.7	—	C1類
275	17	—	土師質	皿	65	UB13	灰褐色土	7.3	1.3	—	C1類
276	17	—	土師質	皿	65	UB13	炭泥灰褐色土	7.1	1.7	—	C1類
277	17	16	土師質	皿	65	UB12	灰褐色土	6.3	1.5	—	D類
278	17	—	土師質	皿	65	UB12	灰褐色土	6.0	1.6	—	D類
279	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭泥灰褐色土	9.0	1.9	—	
280	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭泥灰褐色土	8.8	2.0	—	B類
281	17	—	土師質	皿	65	UB13	暗灰褐色土	8.6	2.8	—	B類
282	17	16	土師質	皿	65	UB13	炭泥灰褐色土	8.5	2.3	—	B類
283	17	—	土師質	皿	65	UB12/13	下層	7.2	2.1	—	B類
284	17	16	土師質	皿	65	UB12/13	下層	7.3	1.6	—	B類
285	18	17	越前焼	大壺	64	WP15	トレンチ内石垣	—	—	—	IV群 c 押印
286	18	17	越前焼	大壺	64	WP15	トレンチ内石垣	—	—	—	IV群 c 押印
287	18	—	越前焼	大壺	64	WP15	トレンチ内石垣	—	—	27.0	
288	18	—	土師質	皿	64	WP15	深掘トレンチ	9.5	2.0	—	C2類 タール痕
289	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	16.4	2.1	—	D3類
290	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	15.1	2.0	—	D3類
291	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	14.0	2.2	—	D3類
292	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	14.9	2.4	—	D3類
293	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	14.0	2.2	—	D3類
294	18	17	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	13.3	2.4	—	D3類
295	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	15.0	2.1	—	D3類
296	18	17	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	14.8	1.9	—	D3類
297	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	14.0	2.2	—	D3類
298	18	17	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	13.4	2.5	—	D3類
299	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	11.6	2.0	—	D2類 タール痕
300	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	13.0	2.3	—	D3類
301	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	12.0	2.0	—	D2類
302	18	17	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	11.8	2.1	—	D2類
303	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	11.6	2.1	—	D2類 タール痕
304	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	11.2	2.0	—	D2類 タール痕
305	18	—	土師質	皿	64	WP18	深掘トレンチ	10.8	2.1	—	D2類
306	18	17	瓦質	火舎	64	WO15	深掘トレンチ	—	—	—	
307	18	17	青磁	碗	64	WO15	深掘トレンチ	—	—	6.2	龍泉窯系E類
308	18	17	青磁	皿	64	WN15	深掘トレンチ	11.5	—	—	模化皿
309	18	17	白磁	皿	64	WN15	深掘トレンチ	10.2	—	—	D群

## V まとめ

### 1 遺構について

調査区の西半は後世の削平が大きく、遺構はほとんど遺存しなかったが、東半は削平が比較的少なく門、上堀、溝、石列、礎石建物、石積施設、井戸、炉跡等の遺構を検出することができた。

#### ① 遺構面

遺構面は上層と下層に分かれ、上層(Ⅲ期)は朝倉氏の滅んだ天正元年(1573)当時の遺構にあたる。下層は大規模な造成の前・後で2時期に分かれる。このうち、大規模な造成後の下層(Ⅱ期)の範囲は部分的で、最期まで同一面にあり続ける建物・施設も多い。大規模な造成前の最下層(Ⅰ期)の遺構は、第64次深掘りトレンチにおいて区画状の石列を検出したのみで、全容はわからない。Ⅱ～Ⅲ期は遺構に連続性があるのに対し、Ⅰ期の遺構は厚い盛り土に覆われ、Ⅱ～Ⅲ期とは大きな隔絶がある。

#### ② 門と区画

敷地の南端中央に門(SI3713)と上堀(SV3701)がみられる。門は中央の戸口1間、両脇間半間の八脚門が想定される。門の規模は大きくないものの、大棟の飾りと考えられる鯉瓦片が付近で出土した。室町期の鯉瓦は非常に珍しい。門と敷地内部の建物・施設の軸方向は、Ⅱ～Ⅲ期を通して整然と揃い、当初の配置が最期まで保たれる点は注目される。門・土堀は大規模造成直後のⅡ期当初に築かれ、Ⅲ期の最期まで大きな改築はなかったことがうかがえる。

敷地内は東西方向の区画石列(SV3705)をもって南北に二分され、それぞれの検出遺構から、南半はより宗教色の強い「ハレ」の空間、北半はより「日常色」の強い「ケ」の空間であったと考えられる。

#### ③ 南半の遺構

南半の区画では、敷地の中央に建物(SB3722)、その東の山際に庭園(SG3700)、庭園の西側に南北に長い建物(SB3724・3725)、門の東側に建物(SB3719・3720・3721)が配置される。中央の建物(SB3722)は礎石の下に根石をもつ大型建物で、5間×5間半で庇が周囲に付くことから「仏殿」と想定され、Ⅱ～Ⅲ期を通じて建て替えられない。一方、庭園西側の建物(SB3724・3725)や門東側の建物(SB3719・3720・3721)は1～2回建て替えられ、Ⅲ期の建物の方がⅡ期よりも礎石が大きいことから、建物が大型化したとみられる。門東側で検出した建物はSB3719(Ⅱ期)→SB3721(Ⅱ期)→SB3720(Ⅲ期)の順に地面を高く上げて建て替えられ、Ⅱ期の建物(SB3721)には炉跡(SX3744)や壺埋設遺構(SX3750)が偏るなど日常的な要素が強いが、Ⅲ期に建物の規模が大型化するとこれらは失われ、接客目的の建物に変化した可能性がある。なお、庭園(SG3700)は、その下層に土砂利を敷いた古い庭園跡(SX3722)が確認されたことから、建物(SB3725)とともにⅢ期に改築されたと考えられる。

#### ④ 北半の遺構

北半の区画では、建物(SB3727・3728・3729)が区画の中心に存在し、その北東奥に建物(SB3730・3731・3732)が配置される。東側の山際には石積施設2基(SF3734・3735)、井戸(SE3733)、炉跡2基(SX3806・3807)、壺埋設遺構(SX3813)が南北に連なり、建物(SB3727・3728・3729)の東側や、建物(SB3730・3731・3732)に、台所等を備えた庫裏の存在が考えられる。建物(SB3727・3728・3729)は一連の建物で、建物全体の形・規模は不明ながら、南北約24m以上におよぶ大型の建物で、『朝倉始末記』に記された「方丈」と考えられる。この建物の東側にみられる礎石列(SB3728・3729)と石列(SV3709・

3710)の検出状況から、Ⅱ期からⅢ期にかけて建物の縁部分で一部改築され、一般的な自然石の礎石から、笏谷石の上面にホゾ穴を穿った縁(または土縁)の東石に変化している。また、その東側にある炉跡(SX3806)の土台の石列(SV3711)では、建物方向から正面にみえるSV3711の西面のみ、笏谷石の板石が使われており、この縁側の眺めを良くする意識が感じられる。

## 2 遺物について

出土遺物は後世の削平によるためか、質・量ともに豊富とはいえない。陶磁器類は細片が多く、形を復元できる個体は少ないが、土師質皿については完形のものも多く出土している。土師質皿の出土状況には地鎮によると考えられるものがあり、皿2個が合口になった状態で出土する特徴がある。このような状況は南半区画の複数の地点で確認されている。また、土坑や溝等に一括廃棄されたものが、南半区画の庭園北側付近や、北半区画の大型の建物(SB3727・3728・3729)の東縁付近に集中して認められる。これらの中には、宴会での使用後に一括して廃棄されたものがあるとみられる。その他、陶磁器の優品では、座敷飾りに用いられた夜学型器台・盤等の青磁の大型品が、大型建物(SB3727・3728・3729)の西側に集中しており、遺物からも居住と接客の間を兼ねた「方丈」の可能性が高いと思われる。

## 3 南陽寺の年代観について

南陽寺の歴史については、Ⅵ論考の「文献資料にみる南陽寺」で詳しくまとめられている。最後に、この文献上の年代観と発掘成果による遺構の時期区分(Ⅰ～Ⅲ期)とを比較し、まとめたい。

### ① 文献資料の年代観

- 南陽寺は、14世紀代に朝倉貞景(「大心」)の母親(法名を「天心清祐」という)が創建した。
- 15世紀前半には、南陽寺と号する比丘尼が安原庄(一乗谷近郊)の代官職に就き、朝倉氏・族も当時より一乗谷を根拠地としており、南陽寺も一乗谷に存在したとみられる。
- 文明11年(1479)、初代孝景の妹の寺である南陽寺を指定して公家一行を寄宿させる。このことから城下町建設の開始早々より、一乗谷の迎賓館的、最上クラスの屋敷であったとみられる。
- 3代貞景の代(1486～1512)に南陽寺は再建され、仏殿や方丈が建築される。
- 5代義景は永禄11年(1568)3月、足利義昭一行をもてなすため南陽寺に招待し、系巻を観賞する。

### ② 発掘成果の年代観

今回の調査成果から、遺構の変遷過程は3期に区分される。

Ⅰ期の遺構・遺物はほとんどなく、詳細は不明である。ただ、15世紀前半に遡る古手の越前焼や土師質皿等が若干出土しており、15世紀前半からここに南陽寺が存在した可能性はあると思われる。

Ⅱ期は、大規模造成によって敷地全体の形が大きく変わり、文献に記された「仏殿」・「方丈」に比定される建物が構築された一大画期である。この時期を推測する資料として、第64次深掘りトレンチ出土や、地鎮に用いられた土師質皿(第64次黄色土面出土)があり、第50次検出道路(SS2005)最下層出土資料等と類似することから、16世紀初頭頃が可能性として高く、3代貞景の代の再建の記述にも近い。

Ⅲ期は、庭園の改修をはじめ、建物では門東側並びに庭園西側の建物を大型化し、建物の縁部分の改築が行われるなど、接待空間を新調し広げることが目的とみられるので、1568年の足利義昭一行を招待する際の改修の可能性が高いと考えられる。

## VI 論考

### <論考 1> 文献資料にみる南陽寺

はじめに

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡第5次5か年計画によって、平成元年(1989)に発掘調査された第64・65次調査地は、南陽寺の跡地として知られ、その中に所在する庭園は、特別名勝一乗谷朝倉氏庭園のひとつとして注目されている。ここでは南陽寺に関する文献を整理、紹介して調査地の歴史的な環境を明らかにする手立てとしたい。

#### 1 南陽寺に関する先行研究

南陽寺跡の遺跡としての性格を初めて叙述したのは、大正年間に福井県の史跡調査事業を担当した上田三平で、その著書『日本史蹟の研究』(第一公論社、1940年)の一乗谷城址の項に次のようにまとめられている。

南陽寺址は朝倉屋形に近い東北の山麓に在る。湯殿趾等と略々其高さを等しくせる稍広き平坦地である。朝倉始末記に「朝倉屋形の良に美景無及の名境南陽寺と号するあり、地形從來幽奇にして眺望殊に勝れしかば繁榮最盛なり加之庭前に糸桜あり」云々と記してある。糸桜は今も残存して居ないが永禄十一年三月城主義景が將軍足利義昭を之れに請じ観桜の催をした処で、當時に於ける糸桜の題詠は朝倉始末記に見えて居る。即ち

諸トモニ月モ忘ルナイト桜年ノ著長キ契ト思ハバ 源義昭

君ガ代ノ時ニ相逢イトサクラ最モ賢キ今日ノ言ノ葉 朝倉義景

遺跡は山麓に近く立石其他庭園の石組の或部分を存し、地字を難陽寺と称し明かに其地たるを示し、昭和五年七月朝倉氏館址及び諏訪立石附近と共に史蹟及び名勝として指定せられて居る。

以上の文章で南陽寺の所在地、永禄11年(1568)に行われた観桜の宴、糸桜や詠草などを紹介し、庭園遺構や地字などについて指摘している。

次いで第64・65次調査がなされた平成元年度末には、同調査の概要報告書の一節に「南陽寺の歴史について」と題して文献資料の簡単な紹介がなされ、南陽寺の創建、所見、安原庄との関係、五代当主との関係などについて叙述し、「南陽寺は二百年近くの長い歴史を持ち、朝倉氏の当主一族と密着した尼寺として栄え、一乗谷でも最も華やかな場所のひとつだった」と結論している(『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡1989』)。

南陽寺は廃絶した寺院で、所見史料は断片的であるが、必ずしも乏しくはない。ただ、記事の解釈などに検討を要するものが多いので、平成元年度に発表された調査概報の内容と重複する部分も多いが、文献の本文を引用しつつ、以下年代を追って叙述する。



## 2 南陽寺の創建

まず南陽寺の創建については、『朝倉家伝記』の「大心 下野守孫右衛門為景大心宗忠」の項に次のような記事がある。

大心母儀天心清祐大師は即ち大功ノ女中也、建立ニ南陽寺ヲ、

『朝倉家伝記』は永禄12年(1562)に成立した室町幕府將軍の歴代、朝倉系図、朝倉氏歴代当主の家譜などを記した書物で、5代朝倉義景の時期の同時代史料として極めて史料的価値が高い。記事の人名の掲出、表記に法名(道号)が多用され、また年忌や寺庵の記事が多いことから朝倉氏関係の寺院の関係者が作成にかかわったものとみられる。

引用記事の「大心」は、初めて越前に入国した広景の曾孫にあたり、実名は諸系図に為景、正景、貞景などと表記される人物である。良質の史料で実名表記が確認できないので、今『朝倉始末記』所収「日下氏朝倉家系図略」により貞景と呼ぶことにする。同書によれば、広景から初代孝景に至る歴代は、広景—高景—氏景—貞景—教景—家景—敏景(初代孝景)となっており、この貞景の母親の法名が天心清祐であり、天心は大功(氏景)の妻であり、南陽寺を建立したとされる。

天心の生没年は伝わらないが、氏景の長男である貞景を延文5年(1360)に生んでおり、14世紀後半を中心として活躍した人物であることが知られる。したがって南陽寺の創建年代もその頃であろうと考えられる。

## 3 15世紀中頃の南陽寺

初期の南陽寺について同時代史料では、伏見宮貞成親王の日記『看聞御記』に断片的な記事がある。主な記事2か所を次に引用する(以下〈 〉は二行割注・組字を示す)。

『看聞御記』永享3年8月16日条

抑鳴滝殿御庵参来、是御領事為申談令招請、安芸守久綱寺領如我物管領、任雅意之間、寺家之式散々窮困過法之由、方丈歎奉之間、久綱御代官召放、其間事為申談参来、丹波一所、摂津国一所、播磨二ヶ所、越前一所、已上四ヶ所改替了、淨喜為使代官令秘計、

同10月7日条

鳴滝殿御領御代官比丘尼(号南陽寺)参、越前安原庄御代官事申、自元代官之間重被仰付、御礼折紙(点心分)獻之、鳴滝殿御対面、庭田三位申次、引物(鏡子提子・引合十帖)賜之、久綱参、目安捧之、歎申不及是非、返事物忘之由仰之、

ここにみえる鳴滝殿は、同記応永25年(1418)12月26日条に「姫宮(7歳、葆光院第一宮)十地院殿(号鳴滝、萩原殿宮)有御入室」とみえる人物である。応永5年(1398)5月に薨じた萩原殿、すなわち花園天皇の長子直仁親王の宮であり、鳴滝(現京都市右京区)の十地院に住していた。同日、記主貞成親王の弟治仁王の遺子である7歳の長女が鳴滝殿に入室した。この人物は「鳴滝殿御庵」と呼ばれ、一方鳴滝殿は「方丈」とも呼ばれる(同記永享8年2月16日条)。

永享3年(1431)8月16日、伏見宮貞成親王は鳴滝殿御庵を呼んで鳴滝殿の御領荘園の支配について相談した。その荘園は、丹波1か所、摂津1か所、播磨2か所、越前1か所であったという。鳴滝殿の家司とみられる安芸守久綱という人物が代官を務めていたが、荘園を自分の物のように支配し、やりたい放題をやっているために、十地院と鳴滝殿の家計が成り立たなくなってしまうという鳴滝殿の訴えにより、久綱の代官職4か所を改替して伏見宮家に従属し伏見庄沙汰人を務める小川浄喜を代官にすることが決められた。その後、摂津と丹波の鳴滝殿御領荘園については、浄喜が代官として遣わされたが(同記8月18日条、9月11日条)、越前については南陽寺と号する比丘尼が安原庄の代官職を命じられたのである。南陽寺はもと代官を務めていたので再び代官を認められ、10月7日伏見宮家で南陽寺は鳴滝殿に見参し御礼を進上して、引物を賜わった。

比丘尼(びくに)とは、女子で出家して具足戒を受け、それをたもっている者の称である。ここに南陽寺が尼守として成立していることが認められる。当時の荘園の代官職には様々な人物が登用されるが、ここでは在地支配に便宜を持つ者として、越前の関係者であることが想定される。

安原庄は慶長国絵図のひとつである「越前国絵図」の記載と後世の村名の比較から脇・南山・小路・安原・上毘沙門・中毘沙門・下毘沙門一帯の地に比定され、一乗谷の所在する宇坂庄の西隣、東郷庄の東隣に位置する。荘号の初見は鎌倉末期で、持明院統の後伏見院領として成立した。貞治5年(1366)、朝倉高景に勲功の賞として足利義隆から与えられた7つの荘郷の内の宇坂庄と東郷庄の間に位置し、古くから朝倉氏一族の勢力の及んでいた所と思われる。特に朝倉氏景(大功)は一乗に熊野を勧請し、社殿を建てたとされ、その二男と三男がそれぞれ東郷と中島を称し、朝倉氏の庶流の一族として東郷氏、中島氏が続いている。また氏景(大功)の弟の茂景は阿波賀を称し、その弟の麴景は三段崎を称している。阿波賀は城戸ノ内の北に位置し、また三段崎は上城戸南方の東新町の字三反家、字三反家口が名字の地に比定される。こうしてみると、応永11年(1404)に没した氏景(大功)の代に、朝倉氏の主流は一乗谷から東郷中島に至る地域に根拠地を置いていたとみられる。

こうした状況からみて、永享3年(1431)に所見のある安原庄代官南陽寺が、朝倉氏一族の関係者であることが想定され、この南陽寺が後代の南陽寺と同じものであることはほぼ確実である。南陽寺が創建された場所や寺地の移動については詳らかでないが、当時の朝倉氏の根拠地に位置していたことは確実であろう。

この南陽寺と号する比丘尼の出自や宗派は前掲史料からは明らかでないが、同じ「看聞御記」の永享4年(1432)3月28日条に「自建仁寺宗西堂参、南御方对面、越州安原御領事、有申告」と記されており、建仁寺の有力長老で公家の飛鳥井氏の親類という人物宗西堂(同記永享7年6月14日条)が安原庄の代官職について要請しており、南陽寺が建仁寺と関係をもっていたことが推測される。なお、南陽寺という寺号の由来は詳らかでないが、建仁寺嘉應軒に南陽軒という塔頭があったことが知られる(「建内記」嘉吉3年3月22日条)。相互関係は詳らかでないが、たとえば初代朝倉孝景の弟慈視院光玖の院号が建仁寺十境の慈視閣と類似するなど、今後検討するに値するであろう。

#### 4 朝倉氏5代と南陽寺

さて初代朝倉孝景以降の時期も南陽寺に関する良質な史料が断片的にあらわれる。まず文明11年(1479)9月一乗谷に下向した入道前関白・准三宮一条兼良は、初代朝倉孝景の妹の寺に迎えられた。【大乗院寺社雑事記】同年9月11日条に次のように記される。

恵林寺殿・香台寺殿光臨、於門前見參、色々御物語、禪閣ハ朝倉妹之寺ニ入申、朝倉父子參申、御見參云々、

一乗谷に着いた兼良一行が初代朝倉孝景の妹の寺に入れられ、孝景・氏景父子が見参したという情報を記している。一行の構成は、一条兼良・権大納言冷泉為富以下、殿上人2人、諸大夫、侍6人などと記されている(同記閏9月27日条)、その他多数随行の雑人がいたはずである。こうした公家一行を迎えるために、孝景は「妹之寺」を指定して寄宿させた。この妹については『真珠庵過去帳』の二十日の項に「文泉宗才藏主尼 二月」、同裏書に「文泉 越州南陽寺前住 朝倉下野守壯岳公妹 祖心禪師吹嘘」と記されており(『真珠庵文書之八』第1113号)、朝倉経景の妹文泉宗才藏主が南陽寺の前住だったことがわかる。経景は初代孝景のすぐ下の弟であり、前掲『大乘院寺社雑事記』の「妹之寺」が文泉宗才が住持を務めていた南陽寺であることが確定する。

また『宗演夜話』の「英林様御息遠」の項によれば「上様 南陽寺殿」という初代孝景の子女の記載が、四男の教景と五男の時景の間にあり、初代朝倉孝景の四女が南陽寺に住したことがわかる。

3代貞景の代になると、その二女の良玉が南陽寺に入っており、貞景は永正6年(1509)6月建仁寺の月舟寿桂を良玉の得度の師として下向を要請し、ついで良玉は剃染受戒し、寿桂は8月に上洛している(『実隆公記』6月2日条、8月15日条)。その間の事情について月舟は、後に良玉から貞景の肖像画賛を求められた際に次のように記している(『幻雲文集』)。

南陽尼守良玉侍者、樋口下氏天沢居士女也、居士之家、兒女惟夥、其愛特鍾于此女、以故南陽再造、金碧奪日、北州之寺、罕見其比、居士易贊之後、雷予贊肖像、蓋欲鎮南陽以修香火因也、玉侍者曾以居士命、入于室中落髮受戒、於是其請難拒、謾贊一語云、

この記述は、作者がかつて越前に下向して南陽寺を実見し、朝倉貞景の二女南陽寺良玉の得度の師となっていることなどからみて、極めて信憑性が高いと考えられる。文中では、貞景の多くの子女の中でも特にこの良玉を鍾愛し、南陽寺を再建し、北陸に類いを見ないようなすばらしい寺院だったという。永正9年(1512)に貞景が急死した後、良玉は月舟寿桂に肖像画の著賛を求め、月舟は良玉が貞景の命により自分に属して出家したということからこれを了承したと述べている。また『朝倉家伝記』によれば、貞景は南陽寺の仏殿と方丈を建立し、この時良玉はその住持長老だったという。

義景の代になると冒頭に引用した上田三平の紹介のように、永禄11年(1568)3月一乗谷に逗留した足利義昭一行をもてなすために、南陽寺の庭前に糸桜を觀て和歌を詠み交わしたことが知られる。この時の様子が『朝倉始末記』巻第5に叙述されるので、やや長いですが、最後に掲出する。

義景母儀任二位尼、附義昭公見南陽寺糸桜事

(前略)爰ニ又朝倉屋形ノ良ニ美景無及ノ名境南陽寺ト号スルアリ、地形従来幽奇ニシテ眺望殊ニ勝レシカバ繁栄尤盛也、加之庭前ニ糸桜アリ、麗花爛漫トシテ恰カモ大真ガ笑ヲ含、濃香芬芳トシテ、常ニ西施ガ匂ヲ留メシガ、時シモ三月上旬開敷ノ最中也ケレバ、義昭公高駕ヲ枉テ終日御遊覽被成ツ、諸臣

ト共ニ倭歌ヲ催フサレシ、其列ニハ仁木義政・朝倉義景・大館治部大輔晴忠・同中務少輔信実・上野陸奥守信忠・同中務大輔・一色播磨守晴家・同式部人輔藤長・同四郎秋教・同三郎秋成・伊勢下総守貞隆・同宮千代・武田治部少輔信賢・同刑部大輔・三瀬弥四郎秋家・杉原長盛・飯河信賢・安藤藏人泰識以下糸桜ノ廻ヲ賜テ各一首ヲ連ケリ、今其和歌ヲ挙テ曰、

諸共に月も忘るな糸桜年の緒長き契と思は、	源義昭公
永日も覚す暮る夜を懸て飽ぬは花の糸桜かな	仁木義政
夕月夜暫し休へ糸桜花は斜にむすほられつ、	喝食明慶
人伝は物かは懸る糸桜いと咲花に春の夜の月	一色藤長
専女の手引の糸の桜花見る我さへに心乱れ、	一色晴家
花盛さらぬ草木も糸桜いとより懸て匂ふ春風	一色秋教
桜花枝もたわに糸はへて木の間洩来る春のよの月	伊勢貞隆
夕月夜ほのめく庭のいと桜いと、色香も殊更にこそ	大館信実
帰るさを何と夕への月の影いと、色添ふ花の木の下	大館晴忠
打はへて風にかたよる糸桜こや佐保姫の華の衣か	武田信賢
折を得て今日咲花は君のため今一人の色や添けん	上野信忠
今ぞ知る柳の枝も梅か香も願ひ悔しき糸桜かな	杉原長盛
夕風の薫れる袖の月懸て靡く桜の華の木の下	伊勢宮千代
香はかりは結び留めよいと桜乱て花は散尽すとも	上野清信
君か代の時に相逢糸桜最も賢きけふの言の葉	朝倉義景

此外供奉ノ聲躍何有倭歌、事繁ケレバ先其ノ一二ヲ記スノミ、斯テ義景酒肴・菓子・破子様々丁家ヲ尺シテ夥敷進上セラレケレバ、義昭公一入興セサセ給ヒ各円居シテソ御遊アリケル、其中ニ伊勢宮千代ハ生年十六歳容顔美麗人ニ超タル粧ヒナルガ、御盃ノ上ニテー一曲ヲ舞ケレバ満座ノ聲モ不覺恋意ノ袂ヲシホリケル、然ハ即義昭公是ヲ始トシテ一芸アラン者トモハ品々ヲ尺スヘシト宣ヒケレバ、何レモ長テ承リ候トテ皆勢々ヲコソ催シケレ、其時仁木義政義景ヘ向ヒ、御内ノ土真柄ハ無双ノ大力殊ニ大太刀操トテ天下ニ於テ隠レナシ、此節御前ヘ召出サレ然ルヘシト申サレケレバ、即真柄父子并ニ隨伝ヲソ被召ケル、義昭公彼等ヲ御覽シ、各力事ハ都郎其隨レナシ、此座席何レモ一曲ヲ尺シヌ、汝等モ力ヲ顯シ候ヘト被仰ケレバ、畏リ候ト御請ヲ申上ケ先ツ太刀ヲ取寄ケルニ、太郎太刀ヲ下僕八人シテ掻出ル、次郎太刀ヲ六人ニテソ持来リケル、此太刀ハ大和太掾包則・府中ノ千世鶴・藤島ノ朝重・芝原ノ宗吉・敦賀ノ有国ナト云銀冶トモ相談シテ作出シタル九尺五寸ノ大太刀ニテ柄モ二尺ニ拵ケケル、或時彼ヲヲ試ントテ失人ヲ十人並テ真柄向ヒ劇中ヲ車切ニ一度ニ不懸伐ケル太刀也、扱力ノ程ヲ御見物成サルヘシトアリシ時、真柄十郎左エ門直隆広庭ヘ躍リ出テ二腰ノ太刀ヲスリト抜き、左右ノ手ニ以テ振廻ル事數返ニシテ退キケル、形勢誠ニ四天飛行夜叉神ナト云共是ニハ争テ増サルヘキト諸人舌ヲソ巻ニケル、其次ニ直隆カ納子十郎隆基茲年十八歳ニ成ケルガ父ニ劣ラス大力ナレバ、何事ヲカ仕ラント見廻ラス所ニ、寺ノ傍ラニ諸人力持ノ石トテ長サ四尺計リ、廻リモソレ程ニテ烏ノ卵ノナリノ黒キ石ヲ力者三四人シテ持来ルヲ、隆基彼石ヲ虚空ヘ投上ル事四五丈計リ余度ニシテ去ニケリ、其次ニ隨伝マカリ出ル、此僧ノ生国ハ房州也、法師ト成リ武州豊島郡浄土宗ノ伝隨院ノ所化ニテ名ヲ隨伝ト号セシガ、似テ友トスル習ナレバ当国ニ来リ真柄ガ亭ニ居タリケルカ只今モ相伴ヒケル、扱隨伝ヒリヲ見ルニ口寺ノ事ナレバ並木トモ多キ中ニ、白ラ黄楊ノ一丈五六尺ニテ末口ノ廻リ一尺二三寸モアリケルヲ、根本ヨリ挫

切ツテ枝葉ヲカナグリ捨テ、片手ニテ其末ヲ追取テ振廻ル事直隆カ形勢ニ相同シ、義昭公ヲ始メ奉充滿タル面々モ日ヲ覚シ肝ヲ消シ、アナ夥シノ力ヲトモカナト恐レヌ者ハ無リケリ、日已ニ西山ニ入シカバ即御帰館成サレケリ、

以上の記述によれば、花見の宴やその余興として真柄直隆・隆基父子の大太刀・力石の披露、安房出身の随伝の大木振回しなどがあったとされる。こうした記事の信憑性については確かめるべくもないが、その大太刀は9尺5寸、柄2尺といわれ、並木のツゲの大木は長さ1丈5、6尺といわれる。これだけのものを振り回せるのに十分な広さの庭庭が確保されていたのであろう。

最後に南陽寺の滅亡については詳らかでないが、天正元年(1573)8月、織田信長の先兵が一乗谷に達して、谷中を放火した際に破壊されたものと想像される。

そして、南陽寺の再興についても知られるところがないが、城戸の内の寺院浄覚寺の寺伝によれば、南陽寺は天正年中兵火により焼失し、宝永年中に本願寺により寺号を改めて浄覚寺といったという。こうした寺伝を裏付ける確実な史料はみられないが、浄覚寺は南陽寺の近隣でもあり、やや注意される。

## おわりに

以上のように、断片的な史料であっても南陽寺は創建者が朝倉氏当主の妻であること、代々朝倉氏当主の子女(女子)が入寺することが多かったことなどから、朝倉氏当主一族と密着した尼寺として一乗谷の寺院の中でも特異な存在であったことがわかる。

南陽寺の寺地・建物については史料に乏しいが、初代孝景の妹と四女が南陽寺に住していたことが知られる。一方、3代貞景は南陽寺の仏殿と方丈を建立したとされる。少なくとも初代孝景の妹と四女の時に方丈がなかったとは考えられないから、貞景の時にその娘の良玉のために方丈を新建したのであろう。史料に「以故南陽再造」といわれるのがどういうことなのか検討を要するが、寺地は別としても寺院としては連続性があると思われ、完全に廃絶していたものを再興したわけではないだろう。初代孝景から3代貞景に至る3人の当主の居館の場所が特定されない現況ではそれらと南陽寺の位置関係を論じることが出来ないが、4代孝景の晩年の居館が現在の朝倉義景館の前身だったとすれば、現在の南陽寺跡の遺構も4代孝景の時期(1512-1548)まで溯ることが考えられる。3代貞景が建てた仏殿・方丈との連続性は詳らかでないが、4代孝景の代に南陽寺の堂舎を新建した記載が5代義景の時に成立した『朝倉家伝記』にみえないことと、発掘調査の出土遺物の年代観などから3代貞景時代(1486-1512)に溯る可能性も否定できない。

## 参考文献

福井市 1989『福井市史資料編2 古代・中世』

福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館 2008『福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館古文書調査資料2 朝倉氏の家訓』

## 〈論考2〉 南陽寺跡庭園にみる庭園鑑賞

### はじめに

「朝倉始末記」<sup>(1)</sup>によれば、南陽寺は「朝倉屋形の長」(北東・鬼門)の方角にあり、その境内地は「美景無双の名鏡」と表現され、南陽寺の美しい景色が優れた手本に例えられている。また、「地形従来幽奇にして眺望殊に勝れ」とあり、比類のないほど優れたその地形や眺望が特筆されている。「眺望」は、「眺」ならびに「望」が対象を遙か遠くに見ることを示すことから<sup>(2)</sup>、見晴らしの良さを指していると考えられる。麓との比高差15mの高台からの眺望の美しさは現在も確認でき、南北方向に長い境内地の奥に山容を望むことができる。往時には、朝倉館の馬場越しに八地谷の奥まで密集した八地千軒の家並みや、麓の大規模な武家屋敷など、家々が軒を連ねた城下町が一望できたものと想像される。その他、五山僧月舟寿桂(1460~1533)の詩文集である『幻雲文集』では、南陽寺を「金碧奪目」と表現しており、南陽寺跡の平坦地の面積は、城戸の内において当主館に次ぐほどの規模であることも考慮すると、往時の絢爛豪華な伽藍の広がりがかがえる。

現在の南陽寺跡では、往時の繁栄の一端を物語る遺構として、特別名勝一乗谷朝倉氏庭園の一つ、南陽寺跡庭園がある。南陽寺跡庭園は、昭和5年(1930)に国の「史跡及名勝一乗谷朝倉氏館跡 附南陽寺跡」に指定され、足利義秋のために観桜の宴が催された庭園として古くから知られていた。昭和42年(1967)の発掘調査を契機とし、国指定が史跡と名勝にわけられ、「名勝一乗谷朝倉氏館跡庭園附南陽寺跡庭園」に指定され、その後、平成元年の発掘調査により建物遺構が検出され、庭園との一体性が明らかになるとともに5代義景の代の作庭であることが確認され、「特別名勝一乗谷朝倉氏庭園」に格上げ指定ならびに名称変更がなされた。特別名勝の指定にあたっては、各庭園の構造や作庭時期が明確になったこと、室町時代末期の庭園として特に後世の改変を受けていない点で学術上の価値が高いことなどが指定理由に挙げられ、庭園文化史上極めて価値が高いと評価されている。

南陽寺跡庭園に関する先行研究は、藤原武二氏による林泉庭園の研究が知られており、構造的特徴や特別名勝庭園間の類似点などが指摘されている<sup>(3)</sup>。一方で、南陽寺跡庭園を舞台とした観桜の宴の様子は「朝倉始末記」に描写されているが、造園・庭園史の観点では詳細な検討がされてこなかった。また、昭和42年時の発掘調査ならびに環境整備時の写真記録は、複数機関に所蔵されていることもあり、これまで報告されてこなかった。そこで本論では、造園・庭園に関連する記述を文献史料から取り上げるとともに、古写真の情報を整理し、昭和42年時の調査ならびに整備状況を整理することとした。その上で一乗谷の特別名勝庭園を比較し、南陽寺跡庭園の特徴を明らかにするとともに、室町時代末期の庭園鑑賞や庭園文化を探ることを試みた。



挿図29 南陽寺跡庭園(西から)



挿図30 南陽寺跡庭園(北から)

## 1 文献史料にみる庭園鑑賞

### ①桜の歌会

『朝倉始末記』によれば、庭前に糸桜(しだれ桜)があり、花の濃い香りが描写されている。糸桜は、室町時代に將軍家を始めとして、当時好まれていた植栽であったことが知られている<sup>(4)</sup>。足利義満の花の御所には糸桜が植えられており、義満が花の御所造営に取りかかっていた。永和4年(1378)2月28日、近衛道綱の日記である『愚管記』によれば、義満が近衛邸の庭から糸桜の「小木」を所望したことも知られている<sup>(5)</sup>。おそらくは接ぎ木用の「小木」が用意され、糸桜が花の御所に移植されたのではないかと推測される。

当時、近衛邸の糸桜が著名であったことは、洛中洛外園屏風(歴博甲本ならびに上杉本)の近衛邸に、白砂敷と思われる空間に糸桜が象徴的に描かれていることからもうかがえる。

『朝倉始末記』によれば、永禄11年の旧暦3月上旬、開花の盛りであった「麗花爛漫」の南陽寺へ、後の第15代將軍となる足利義秋が諸臣と共に歌会に訪れている。

歌会では、糸桜が題として与えられており、足利義秋と朝倉義景が詠んだ歌は有名であるが、ここでは伊勢貞隆の歌に着目したい。

桜花枝もたわわに糸はへて木の間洩れる春のよの月

満開の糸桜の枝の間から洩れ光る月明かりの様子が歌われており、写實的に糸桜と月夜の風景を詠んでいる。他にも月と糸桜の景色を詠んだ歌は多く、下記のように、全15句中、7句が春の月と糸桜の景色を詠んでいる。

諸共に月も忘るな糸桜年の緒長き契と思は、 源義昭公  
夕月夜暫し休へ糸桜花は斜にむすほられつ、 喝食明慶  
人伝は物かは懸る糸桜いと咲花に春の夜の月 一色藤長  
夕月夜ほのめく庭のいと桜いと、色香も殊更にこそ 大館信実  
帰るさを何と夕への月の影いと、色添ふ花の木の下 大館晴忠  
夕風の薫れる袖の月懸て靡く桜の華の木の下 伊勢宮千代

以上のことから、南陽寺における歌会では、庭前の糸桜と月夜の景色が好まれており、京の文化人を招いた歌会がたびたび開かれていた一乗谷においては、庭と月の位置関係が意識された作庭が行われたと考えられる。庭園遺構の屋敷内における位置に着目しても、月を意識したと推定される作庭は、他の特別名勝庭園や当主の近親屋敷の庭園に共通すると考えられ、その詳細は「3 特別名勝庭園の構成要素の比較 ①庭園配置・鑑賞方向」にて述べる。



挿図31 南陽寺跡の糸桜(しだれ桜)

## ②庭園鑑賞と一芸披露

『朝倉始末記』によれば、歌会が終わり、義秋の要請により、「容顔美麗人に超たる粧ひ」と称された伊勢宮千代のパフォーマンスを始めとして、義秋は「芸ある者の披露を求め、仁木義政は義景に対し、無双の力持ちで特に大太刀を操る技巧で天下に名を馳せている」として、真柄氏の一芸披露を促している。この要請に対し、義景は家臣の真柄父子と随伝を呼び寄せている。

まず、真柄十郎左衛門直隆は、「太郎太刀」なる大太刀を8人に、「次郎太刀」なる大太刀を6人に抱えて持って来させると、「広庭」へ出て、その「二腰の太刀をすりと抜き」、左右の手に持って振り回して見せたい。10人並べた各人の胴を一度に切り払った逸話も記された大太刀は、9尺5寸(約2.8m)を測るとされており、『朝倉始末記』に記された数字を信用すれば、3m近い刀を振り回せる広庭があったことになる。この広庭は、義秋などが歌会后に部屋を移動した記録がないことから、庭を眺めていた部屋の前方に広庭があったと考えられる。なお、通称「太郎太刀」・「次郎太刀」は、熱田神宮の大太刀がこれらであると伝わるほか、白山比咩神社の「真柄の大太刀」など、幾振かの伝世品が存在している。直隆の嫡子である隆基に続き登場したのが随伝であり、随伝は、「旧寺の事なれば並木とも多き中に、白ら黄楊の一丈五六尺にて末口の廻り一尺二三寸もありけるを、根本より捏切つて枝葉をかなぐり捨て、片手にて其末を追取て振廻し」、その怪力を披露している。この記述からは、南陽寺に白い黄楊(つげ)の並木があり、約4.5m~4.8mの黄楊を振り回せるスペースが庭の近辺にあったことがうかがえる。なお、現代では黄楊は低木として扱われ、生垣に用いられることが多く、記録にあるような大木の黄楊は稀である。しかし、川越市指定天然記念物の的場小川家の黄楊のように、樹高5m、幹回り20cmで、約300年の樹齢と推定されている現存例もある。『朝倉始末記』に記された大きさの写実性を確認する術はないが、初代広景の孫である氏景の妻の天心清祐が建立した寺であることを考慮すると、おおよそ14世紀後半の建立、つまり、足利義昭が訪れた時点で約200年の歴史を持っていたことになり、黄楊の高木の並木から「旧寺の事なれば」と表現されたことにも納得がいく。

## 2 古写真記録

これまでに発掘調査時の写真は、国立文化財機構奈良文化財研究所、福井市教育委員会(当時の足羽町教育委員会)、そして福井県立・乗谷朝倉氏遺跡資料館と、複数箇所に収蔵されており、資料を一括して整理することが難しかった。また、昭和42年度の発掘調査・環境整備は、文化庁指導の基で足羽町教育委員会が事業主体となって実施されたが、当時の発掘調査および環境整備の報告書は刊行されていないため、調査成果や整備内容を整理する必要がある。そこで本章では、古写真を用いて発掘調査時の状況を整理し、あわせて整備による補修箇所を明らかにする。

### ①使用資料

福井市教育委員会の協力を得て、「昭和42年度 一乗谷朝倉氏遺跡 史跡環境整備事業 作業写真集 足羽町足羽町教育委員会」(以下、写真集という)を使用した。写真集の写真にはメモ書きが添えられており、表5のとおり断片的ではあるが当時の状況を読み取ることができる。なお、写真集には、特別名勝一乗谷朝倉氏庭園のうち、南陽寺跡庭園・湯殿跡庭園・諏訪跡庭園の写真があるが、ここでは南陽寺跡庭園の写真のみを取り上げる。



## ②写真集の掲載とその内容

53～60頁にて、南陽寺跡庭園に関わる写真集の写真およびメモを掲載した。写真31のように、メモのみが残り、写真が欠損している場合もある(表5・60頁参照)。なお、55～60頁の写真は写真集の写真配置に則して掲載した。

写真アルバムのメモ書きによれば、発掘調査は昭和42年7月18日から開始され、同年7月20日より発掘調査と同時に、「テコを使って」庭石の据え直しが行われるなど、部分的に整備が始められている。そして同年7月24日、園池に水が湛えられ、南陽寺跡庭園の整備が完了している。

文化庁の吉川甕技官(当時)の指導の下で調査が行われ、写真番号7より、「平均45～50cm」下で園池の包含層と思われる「赤土」を検出しており、写真14・15によれば、「更に15cm」下にて遺構面を確認していることがわかる。

また、写真番号10からは、護岸石の構築方法がうかがえ、園池底に人頭大程度の石を敷いた上で、護岸石を据えている。写真番号9の「崩れ込んだと思われる石」は、おそらく写真10と同様に、護岸石を据えるために敷かれた石が崩れたものと推察される。しかし一方で、写真11にみられるように、写真10のような構築技術が全ての護岸石において行われていないこともわかる。

次に写真15・16などからは、庭石の据え直しが挿図32の箇所で行われていることがわかり、整備により補修された石は4石におよんでいる。また、写真番号23～24・32より、西側の「土手」は整備時に新たにつくられていることがわかる。

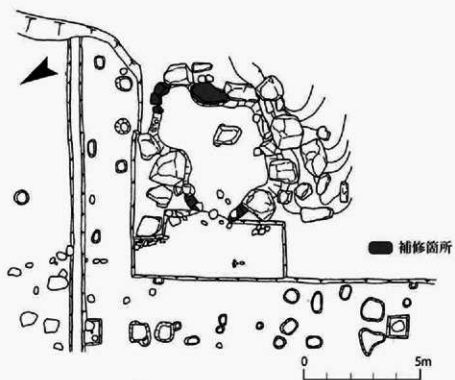
写真番号17によれば、「湧水箇所と思われる穴」を検出している。写真メモによると、写真番号19の石板が縦に立ててあったとあるが、据え方などの詳細は不明である。

写真番号20～22にあるように、池底の突き固めに「割石」を使用しており、写真番号30のとおり、園池の水は北方から塩ビ管のようなパイプで引いている。南陽寺跡庭園は、これまでに枯池である可能性も指摘されているが<sup>(6)</sup>、整備当初には池庭として扱われていたことがわかる。なお、整備直後には庭園の三方を囲う橋を設置している。

遺物としては、写真番号12・34のとおり、園池底から笏谷石製の多層塔の相輪部が出土している。写真番号19の石板も同様に笏谷石製であり、多層塔の基壇の可能性を指摘しておきたい。他には土器の破片が出土したのみである。

## 3 特別名勝庭園の構成要素の比較

特別名勝一乗谷朝倉氏庭園は、当上の居館の庭である朝倉館跡庭園ならびにその高台に位置する湯殿跡庭園、当主の妻の館の庭と伝わる諏訪館跡庭園、そして南陽寺跡庭園であり、庭が配されていたこれらの居館や寺院は、一乗谷中心部の東の山麓に集中して配置されている。湯殿跡庭園を除く3庭園については、作庭時期ならびに石組の構造や配置において類似点が指摘されていることからわかるように<sup>(8)</sup>、特別名勝庭園をはじめとする当主・近親館の庭の比較を行うことは、南陽寺跡庭園の特徴や室町時代末期の庭園文化を述べる上で有効といえる。そこで本章では、前章までの記述を踏まえつつ、特別名勝庭園に当主の母親の屋敷の庭と考えられている「中の御殿跡庭園」を加えて比較し、南陽寺跡庭園の構造的特徴を検討した上で、室町時代末期の庭園文化を探る。



挿図32 南陽寺跡庭園平面図<sup>(7)</sup>



挿図33 写真集(表紙)



挿図34 写真集(「南陽寺跡復元工事」のページ)

表5 昭和42年度写真集一覧

撮影年月日	写真 番号	アルバム 貼付位置	メモ	写真集の番号	備考
昭和42年7月18日	1	左上	先ず池の底部に深さ45cm 巾30cm 長さ5mと5.7mのトレンチをT字型に掘る	715 P-1-1	トレンチ掘削状況
	2	右上		715 P-1-2	写真番号1の続きと思われる
	3	中央左		715 P-1-3	写真番号1の続きと思われる
	4	中央右	岩と岩の間も旧地盤の調査がおこなわれた	715 P-1-4	庭石間の表土除去の状況
	5	左下	吉川技官(文部省)および報道陣の見守る中で当時の地盤を探り当てるのに懸命	715 P-1-5	写真番号4の続きと思われる 浅石組裏側には、発掘時から表土がなかった事が分かる
	6	右下		715 P-1-6	写真番号4の続きと思われる
7月19日	7	左上	平均45~50cmで地盤の表土が露出した	715 P-2-1	透視図を抽出
	8	右上	観石の移動もわかって来た	第3日 715 No24の石のふせ直し	石のふせ直しも実施
	9	中央左	崩れ込んだと思われる石が2ヶ3ヶと発見される	715	
	10	中央右	観石の締め込みのあんばいもわかる 昔の築庭技術の一端がわかる	"	護岸石の据え方が分かる
	11	左下	岩こけの下からが埋まっていた部分	"	埋土状況が分かる (40cmの埋土か)
	12	右下	墓石頭部が池底から発掘された 法経院塔(七輪だけのこる)	715 P-2-6	池底からの出土遺物
7月18日	13	左上	吉川技官の監督	833	埋土状況が分かる (50cmの埋土か)
	14	右上	更に15cm挿土	"	池中の落石が確認できる
	15	左下	池底より露出したNo10 No11の中間 No11~No13の中間に石を敷せ直す	"	据え直した石が分かる
	16	右下	No7の敷せ直し テコを使って	833 P-3-4	"
7月20日	17	左上	当時湧水箇所と思はれる穴 ここに下の写真の崩れ石板が横にたててあった	833	湧水の存在を示す=池窟? 不明の石製品が立っていたらしい
	18	右上	発掘された石板を洗淨しているところ	"	
	19	中央左	発掘した石板 横50cm 縦(長)45cm (短)35cm 厚7cm	"	
	20	中央右	護固めるための削石運搬	"	池の突き詰めにも削石を使用
	21	左下	掘き固めの状況	"	"
	22	右下	このように赤土 石 混合の口合で	"	"
7月21日	23	左上	池堀(西側)の掘き固め	"	
	24	右上	左に同じ	"	
	25	中央左	出土品 土器の破片 残念ながら盗難にあう	833 P-5-3	
	26	中央右	左左	833	
7月24日午後	27	-	湧水を終え水を溜めた南陽寺庭園	003	池窟と判断して掘削 整備時には、北・西・南の三方 を覆って固めている 昔のラインで埋土状況が分かる 地次層等の着生状況が分かる
7月24日	28	左上	完成した外側の堀	"	
	29	右上		"	写真番号28の続きと思われる
	30	中央左	湧水した池	"	水は、滝石組からではなく、 背側から山の崩れ水をパイプで 引いている事が分かる 水位は深く、護岸石の下地が 見えている状態で整備
	31	中央右	完成した石組	"	
	32	左下	新しくつくった西側土手	"	西側の土手は、整備時に つくられた事が分かる



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15



写真16



写真17



写真18

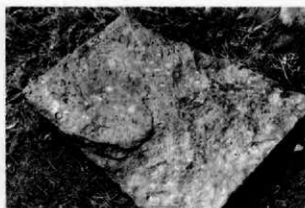


写真19



写真20



写真21

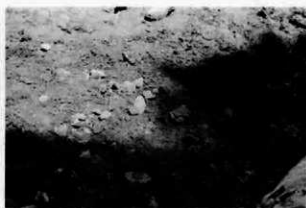


写真22



写真23



写真24



写真25



写真26



写真27





写真28



写真29



写真30

写真31(写真欠損)

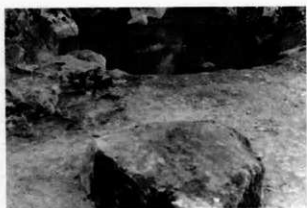


写真32

### ①庭の配置と鑑賞方向

表6に示すように、当主館ならびに当主の近親の館や寺院の庭には、いくつかの共通点がみられる。1つは、いずれも屋敷の東南側に庭を配している点である。この点は、中の御殿跡庭園にも共通し、東側の山裾や上土等を背景とするため、東方に作庭されていることは理解しやすい。庭が配置されている方向が共通する一方で、南陽寺跡庭園のみが敷地の門の近く、寺の入口に近い位置に庭を配していることに着目したい。15頁のとおり、門遺構SI3713・SB3718は、当主館との位置関係から正門であると考えられている。また、論考3にて指摘されているように、禪宗寺院である南陽寺の境内地は、南北方向が伽藍の主要軸であり、南陽寺跡境内地が調査区外の北側に延びることも考慮すると、正門寄りに庭が配置されていると理解できる。禪宗寺院の場合、管見の限りでは正門近くに配置される庭は方形池であり、南陽寺跡庭園は特殊な事例と考える。

「1 文献史料にみる庭園鑑賞」で述べたとおり、足利義秋を招いた歌会では、半数近くの歌が、題材であった庭前の糸桜とともに、月夜を歌に詠んでいる。現代の和歌において「月」は、冬を除く全ての季節で季語として用いられるが、庭と歌会が当時、密接な関係にあったことも考慮すると、一乗谷における作庭でも庭と月の配置関係が重要視されていたと考えられる。今後、南陽寺にて観桜の歌会が催された旧暦の3月上旬に月がどのような軌道を描くのかなど、庭との位置関係を確認することが課題ではあるが、現時点では庭とともに月の鑑賞が可能な位置を意識し、境内地における南陽寺跡庭園の配置が決定されたかと推測しておきたい。

表6 構成要素の比較（庭の配置と鑑賞方向）

庭園名称	帰属施設	屋敷内の庭の配置	
		方角(背景)	位置
南陽寺跡庭園	当主の子女が入寺した尼寺	東南隅(山裾)	正門近く
朝倉館跡庭園	当主館	東南隅(山裾)	敷地奥
湯殿跡庭園	当主館	東南隅(独立峰「観音山」)	敷地奥
譚訪館跡庭園	当主の妻の館	東南隅(土塁か)	敷地奥
中の御殿跡庭園	当主の母親の館	東南隅(上土)	敷地奥

また、庭を鑑賞していたと推定できる建物遺構が明確に確認されている<sup>(9)</sup>のは、朝倉館跡庭園のみだが、南陽寺跡庭園の場合には、南部の山裾と北から西にかけて、建物に囲まれていたことが推察されている<sup>(10)</sup>。南向きの鑑賞地点からは滝石組を主眼とし、一方、東側の山地を背景とした東向きに鑑賞地点からは、庭石が重ならないように巧みに配置された石組が確認できる。【朝倉始末記】から、庭のかたわらに「広庭」があったことや、「糸桜」が植えられていたことは既述したが、それらの庭との位置関係は不明である。また、「2 古写真記録」から西側の護岸が後世の改変を受けていたことを考慮すると、南陽寺跡庭園の西端が明らかではない可能性も考えられる。本論では検討課題を挙げるにとどめるが、今後、総合的な観点で当時の南陽寺跡庭園の本来の構造を検討する必要があるだろう。

### ②池

表7に示すとおり、南陽寺跡庭園の園池は19㎡と小さく、表7の他の庭園と比べて広さに対して池底が深いことがわかる。庭の背景となる斜面との距離が近い朝倉館跡庭園の池の規模と比べても小さく、

その理由の一つには、真柄氏などがパフォーマンスを行った「広庭」も含めた面積が、庭園空間として意識されていた可能性がある。しかし一方で、池の広さに対して池底が深いことの理山にはあらず、また、中島も岩島も配していないのは南陽寺跡庭園のみである。昭和42年度の古写真から、西側の護岸は庭園整備時につくられた新しい護岸であり、改変を受けている可能性が挙げられる。以上のことから、当時の池の広がり方がより広範囲にわたっていたことも考えられるのではないだろうか。

これまでの研究では、南陽寺跡庭園の滝石組に続く導水路ならびに排水路は不明であり、また、滝石組の付近が周辺の地面より80cmほど高いために水を引くことは難しい点、庭石による護岸が全周にわたっておらず、排水口も見当たらない点から、枯池であったと推定されている<sup>(7)</sup>。しかし、昭和42年度の古写真によれば、水が湧いている箇所が確認されている。前述したように南陽寺跡庭園の西側の護岸は整備時の新設であり、排水口の存在は否定しきれない。さらに、護岸が全周に渡っていないのは、湯殿跡庭園も同様である。湯殿跡庭園は発掘調査により導水路ならびにオーバーフローの排水構造が確認されており、池庭であると断定できる。室町時代の導水路には竹樋や木樋を使用している事例もあり、庭園整備でも山地部からの絞り水を利用している。南陽寺跡庭園の北方約100mには、「ビクニン清水」との通称が伝わる湧水地も存在し、山地からの湧水が豊富な南陽寺では、明確な導水路がなくとも水を引くことは可能であり、また宴会時などに限って水を溜めた可能性も考えられる。現に、南陽寺跡庭園に雨水が溜まった場合、数日間は滞水し、自然に池底から排水される状況も確認できる。

表7 構成要素の比較（池）

庭園名称	種別	広さ	深さ	護岸石	底石	中島	岩島
南陽寺跡庭園	枯池?	19㎡	50cm	部分			
朝倉館跡庭園	池庭	31㎡	20～30cm	全周	○		○
湯殿跡庭園	池庭	100㎡	50cm	部分		○	○
課訪館跡庭園	池庭	93㎡	60cm	全周			○
中の御殿跡庭園	池庭	70㎡	20cm	部分			○

また、南陽寺跡庭園の池が、広さに対して池底が深い点も、池庭であることを否定したい理由として挙げられる。表7のとおり、南陽寺跡庭園以外の4庭園は、水を溜めた池をもつ庭であるが、一方で、文献史料にみるように、池のかたわらには「広庭」があり、絵画資料等の事例からすると、枯池と推定できる要素も存在する。以上の点から、ここでは南陽寺跡庭園の池の種別を断定しがたい要素があることの報告に留め、今後の検討課題としたい。

### ③滝石組

滝石組と水分石を配する点が4つの特別名勝庭園には共通しており、また、これまでの研究により、湯殿跡庭園以外の3庭園の右側の滝副石がいずれも高く、3庭園の作庭は同時期と考えられている<sup>(11)</sup>。また、朝倉館跡庭園は庭が配されている奥の空間の建物の軸線のずれなどから、足利義昭の御成にあわせて造成されたと考えられており<sup>(12)</sup>、以上のことから、3庭園の作庭時期が朝倉氏滅亡の直前にあたると推定されている<sup>(13)</sup>。

より詳細に4庭園の滝石組を比較すると、挿図35～38のとおり、滝石組前の水分石は全てに共通している。一方で、複数段に水を落とすのは、湯殿跡庭園以外の3庭園に共通し、天端の平らな石を水落石



挿図35 南陽寺跡庭園の滝石組



挿図36 諏訪館跡庭園の滝石組



挿図37 朝倉館跡庭園の滝石組



挿図38 湯殿跡庭園の滝石組

に使用する点も共通する。また、右側の滝副石を強調するためか、湯殿跡庭園以外の3庭園は左側の滝副石の高さを共通して低くおさえている。

以上の共通点からは、作庭が同時期であるだけではなく、当主館や近親館の庭の作庭に携わった人物の存在がうかがえる。その人物が室町時代初期頃から活躍がみられる「河原者」という職人に分類される者であったのか、もしくは布教中に園池をつくったことが知られている<sup>(11)</sup>蓮如上人のような僧侶・教養人であったのか、はたまた平安時代以来に貴族自身が作庭の指導にあたったように、朝倉氏の当主が指揮を執っていたのか推定する材料が今はないが、あわせて日常的な庭の管理を担っていた管理者集団の存在も推定できるだろう。

#### 4 まとめ

以上、文献史料や古写真資料、発掘調査、庭園構造の比較をとおし、南陽寺跡庭園に関して明らかになった点は、以下のとおりである。

- ①庭前には糸桜が植えられていた
- ②庭のかたわらには、大太刀を振り回すなどのパフォーマンスが可能な広庭があった
- ③南陽寺跡庭園の池の種別については、文献資料や古写真資料、発掘調査等を総合的に検討する必要がある
- ④建築遺構は確認されていないが、庭を鑑賞する南向きと東向きの鑑賞位置が想定できる
- ⑤境内地における庭の配置は、庭と川の鑑賞を意識したことが考えられる
- ⑥滝石組などの石組の特徴から、当主館や近親の館に出入りする作庭者や管理者集団の存在がうかがえる

今後、以上の点を考慮しながら、庭の配置と川の鑑賞の関係性を天文学などの分野とともに調査を進め、また、池の種別については庭園史学を専門とする学識経験者の指導を仰ぎ、南陽寺跡庭園の作庭意図や、戦国期における庭園鑑賞や庭園文化の実態をさらに明らかにしていく必要があると考える。

#### 注

- 1) 朝倉氏の没年から天正元年(1573)8月の朝倉氏滅亡までが全8巻にまとめられている物語。著者および成立年代は未詳だが、詳細な記述も含まれており、朝倉氏の旧臣によって成立したとも考えられている。
- 2) 室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典室町時代編三・上』三省堂
- 3) 藤原武二(1991)『朝倉氏遺跡の林泉庭園について』福井県立朝倉氏遺跡資料館『朝倉氏遺跡資料館紀要190』
- 4) 小島道裕(2000)『花の御所の永桜』国立歴史民俗博物館『天下統一と城』
- 5) 近衛通味(1965)『近衛築山に就いて』『歴史地理』
- 6) 藤原武二(1991)前掲書によれば、庭園は古い時期の礎石や導水路、砂利敷を埋めてつくられた最も新しい時期のものと考えられ、また導水路や砂利敷の存在から、下層には前身となる庭園があったことも推定されている。昭和42年度の写真集では、湧水溜所が想定されているが、滝石組の付近が周辺地面よりも高く、水を引くことが難しいこと、護岸が全周にわたっておらず、排水口も検出されなかったことから、検証と推定されている。
- 7) 古岡幸英『一乗谷朝倉氏遺跡の庭園』『庭園学講座Ⅵ日本庭園と石』、pp.86、京都芸術短期大学/京都造形芸術大学 日本庭園研究センター、1999)掲載図に加筆
- 8) 藤原武二(1991)前掲書
- 9) 詳しくは、福井県教育委員会(1979)『第4章遺跡 5. 建築遺構』【特別史跡・一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告1】を参照いただきたい。池SG20の護岸石の一部を礎石として兼用している、SB11ならびにSB09が鑑賞建物として推定できる。
- 10) 藤原武二(1991)前掲書
- 11) 藤原武二(1991)前掲書
- 12) 牛川喜幸(1972)『一乗谷朝倉氏遺跡』『月刊文化財』
- 13) 藤原武二(1991)前掲書
- 14) 森蓮(1964)『庭園の作者と流派』『日本の庭園』によれば、文明3年(1471)より北陸道にて布教中、越前土山勝興寺加賀二俣木泉寺に開池をつくっている。

### <論考3> 南陽寺の空間構成について

#### はじめに

南陽寺跡の空間構成については、調査区中ほどの東西方向の石列SV3705を境として、南半を接客兼宗教空間、北半を常住空間とする仮説が発掘調査の翌年に提示されている(古岡1990)。その主な根拠は、南半には施園と「仏殿」に比定される建物があり、北半には山際を中心に炉や井戸などの日常生活に属する遺構が分布するためである。空間の構成原理として「ハレ」と「ケ」という文化的機能を重視した見方である。

ところで、文献史料には「南陽寺の仏殿并に方丈も此代に再興し給へり」(『朝倉始末記』)とあり、「仏殿」「方丈」という禅宗寺院の建物名称が用いられている。この事を踏まえると、建築的にも南陽寺の宗旨が禅宗であった蓋然性は高いといえる。したがって、南陽寺の空間構成を考える上では、南北に長い敷地形状が典型的な禅宗様伽藍と共通する事が注目されよう。そこで以下では、Ⅱ～Ⅲ期の各発掘遺構の解釈について先の仮説に従いつつ、南陽寺跡の禅宗様伽藍との共通点・相違点を述べて、南陽寺の空間構成について考察を行う。

#### 1 建物配置の概要

まず、南陽寺跡の建物配置の概要は次の通りである。敷地南端には門SI3713・SB3718が開き、北側に根石で固められた礎石建物SB3722が位置する。SB3722は間取りから南に正面を向けた仏堂建築と推定され、これが文献史料にみる「仏殿」に比定される。これより北にSB3725、SB3728、SB3729などいくつかの礎石建物が存在したようであるが、規模は不明である。北西の山際に集中する炉SX3807や井戸SE3733、石積み施設SF3735などは、水や火を使ういわゆる厨房に付属する遺構と考えられ、北西の山際の辺りが伽藍の中で最も世俗的な建築である「庫裏」と考えられる。これより北側は未発掘であるが、敷地は北側へさらに広がりを見せる。

#### 2 禅宗様伽藍との共通点

南陽寺の宗旨と推定される禅宗の場合、南北方向を基本軸として南から一直線上に仏殿などの主要建物が並び、その他の建物が基本軸に対して東西対称に配された整然とした伽藍となる。もちろん例外もあり、塔頭寺院の様に方丈と庫裏という最少の構成要素からなるものも少なくないが、多くの場合、伽藍のさらに北側に方丈が配され、北に向かって奥行のある縦列配置の構成をとる(以下では、便宜的に、禅宗様伽藍を、主要建物が並ぶ「中列」とそれを軸にしてその他の建物が東西対称に配される「東列」「西列」に分けて呼ぶ)。

禅宗様伽藍を念頭に南陽寺跡の発掘遺構をみると、「門が南に位置する」「仏殿が南を向く」「庫裏が東列に位置する」といった主要な建物の配置に禅宗様伽藍との共通点が見いだせる。南北に長い敷地形状も、禅宗様伽藍と共通するものである。

また、禅宗様伽藍は各建物が回廊で接続される事から、伽藍全体における建物の位置関係や接続関係が考慮された計画的配置をもつといえるが、南陽寺跡で検出された石列や礎石などの線形の遺構も、南北を基本軸として向きが揃っており、例外的に軸方向がずれているものはSV3703(Ⅰ期)・SV3708・

SV3710などに限られる。なお、回廊と断定できる遺構はないものの、建物同士の配置にはおよそ1間(6.2尺)を基準とした間隔が看取される。

そして、敷地の高さ関係は、SV3705を境として北側が高くなっている事に加え、SV3709を境として西側が高くなっているが、これは主要建物が並ぶ「中列」が重視され、北側を奥とする禪宗様伽藍の空間構成と矛盾しない。

### 3 禪宗様伽藍との相違点

しかし、こうした共通点が挙げられる一方、禪宗様伽藍との大きな相違点が2つ挙げられる。そのひとつが「仏殿」に比定される建物SB3722の平面形式である。通常、禪宗様仏殿は間仕切りがない土間床の一室で、その平面形は正方形となる。しかし、SB3722は南側の柱間が広いため正方形とならず、禪宗様仏殿というよりもむしろ外陣と内陣を区別する、いわゆる和様を基調とした中世仏堂形式の仏堂に近い平面形をしている。この事から、永保寺観音堂(国宝、南北朝時代)の様板が張られ、和様の要素が取り入れられた禪宗様仏殿だった可能性があるが、いずれにせよ禪宗寺院における仏殿としては変則的な平面形式といえる。

もうひとつは池SG3700の位置である。通常、禪宗様伽藍における庭園は伽藍北側の方丈に位置するが、池SG3700は「仏殿」の真東に位置しており、禪宗様伽藍における庭園としては特異な位置取りといえる。一乗谷朝倉氏遺跡における南陽寺跡を含む特別名勝4庭園は、いずれも平坦面の南東隅に位置していることから、SG3700の位置取りは、伽藍配置よりも優先される地形上の制約もしくは作庭上の地域性が強く表れているとも考えられるが、確かなことはわからない。

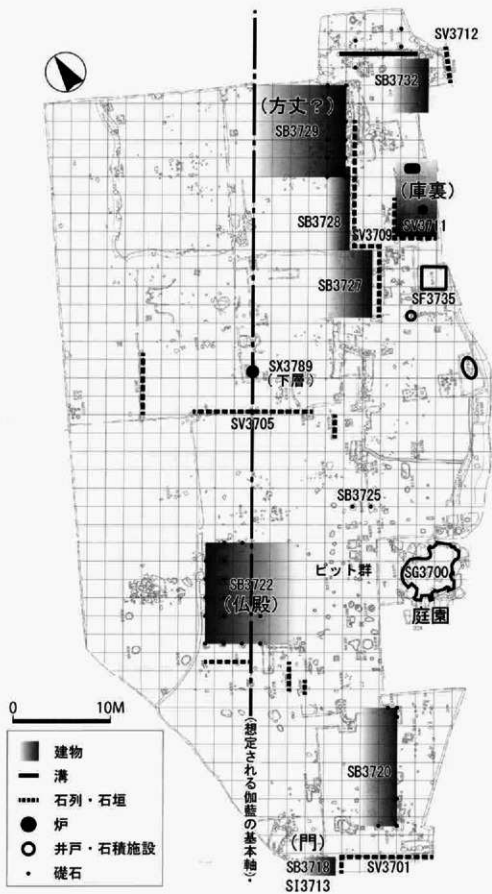
### 4 寺院跡としての傍証

この他、寺院跡の傍証となるものとして、下層の梵鐘鑄造遺構SX3789とその梵鐘鑄型がある。平坦面の中心近くにあるSX3789の位置は、先の仮説ではハレとケで言うケの常住空間に重なるが、禪宗様伽藍としてみた場合には伽藍の「中列」に重なる。梵鐘鑄造遺構が伽藍中心近くでみつかった事例としては、古代寺院(丹波国分寺跡、平安時代)の例があり、越前の中世寺院(豊原寺華藏院跡、室町時代)でも主要建物の傍らから梵鐘鑄造遺構が検出され、鑄型が出上している。つまり、梵鐘鑄造遺構が伽藍中心でみつかる事は珍しい事ではなく、むしろ近辺に梵鐘を使うような宗教施設が位置した事を示唆するものといえ、この近辺が宗教空間であった傍証となりうるものである。

そして、敷地南端の門SI3713・SB3718付近より出土している鯉瓦の出土も注目されよう。鯉は寺院よりも近世城郭の屋根瓦に多くみられるものであるが、一説として、鎌倉時代に禪宗様建築とともに大陸から伝来したと考えられており(佐藤2009)、建築遺構としては大棟に木製の鯉を載せた厨子(大法寺観音堂内厨子、南北朝時代)など寺院建築における事例が先行する。したがって、鯉瓦の出土は寺院跡の傍証となりうるものである。なお、出土した鯉瓦の大きさは、高さのある主要建築を飾るものとしては小さいが、門SI3713・SB3718規模の建物の大棟を飾る大きさとしては適当と思われる。

### おわりに

南陽寺跡の発掘遺構の配置には、禪宗様伽藍との共通点が指摘できる一方で相違点もみいだせる。したがって、今回は禪宗様伽藍との共通点を指摘にしたにすぎない。しかし、多くの点で禪宗様伽藍との



挿図39 南陽寺跡の主な遺構と推定される機能・名称



共通点が指摘できることに加えて、文献史料にみる「方丈」「仏殿」といった建物名称、鯨瓦の出土など、南陽寺跡にみる建築的な断片が、禪宗と結びついていくことは注目されてよい。南陽寺跡と同様に朝倉館跡の背後に位置する源訪館跡には輪蔵の礎石が残されているが、輪蔵もまた禪宗寺院の建物類型のひとつである。文献史料にみる朝倉館の座敷飾りも唐物趣味であった。朝倉館を取り巻く空間には禪宗様への傾注が看取できるのであって、南陽寺の空間構成の一案として、禪宗様伽藍が朝倉館付近に実現されていた可能性も十分に考えられるのではないだろうか。

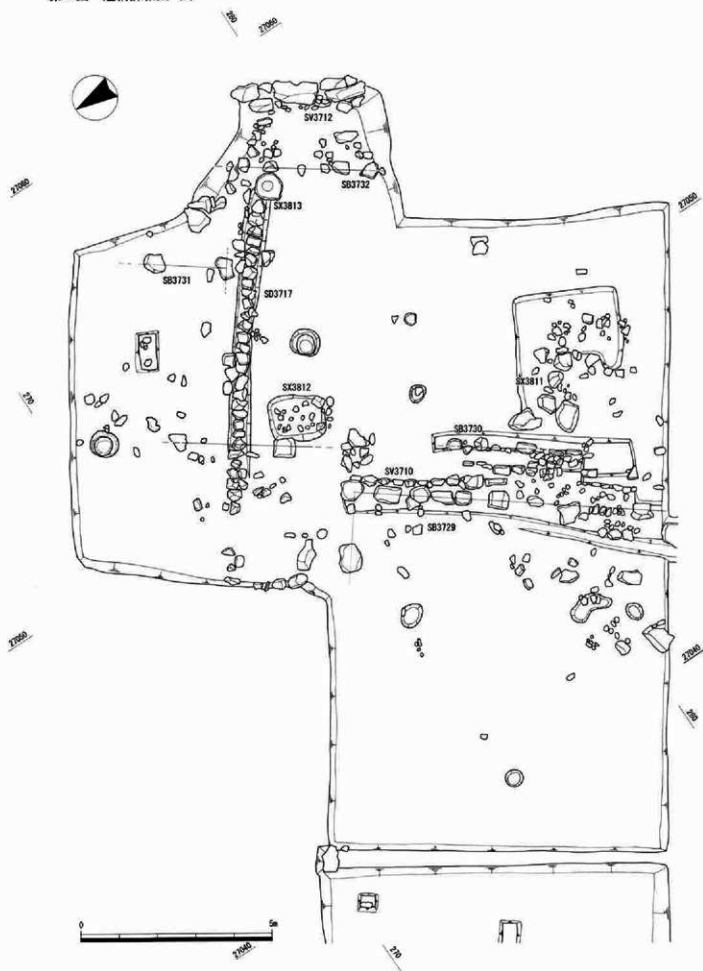
南陽寺跡において、本格的な禪宗様伽藍が実現されていたとすれば、南陽寺の主要建物は「中列」にあり、また「中列」再奥の北側は、方丈や庭園が位置した重要な空間であった可能性がある。したがって、未発掘である北側の発掘調査が今後の課題といえよう。

#### 参考文献

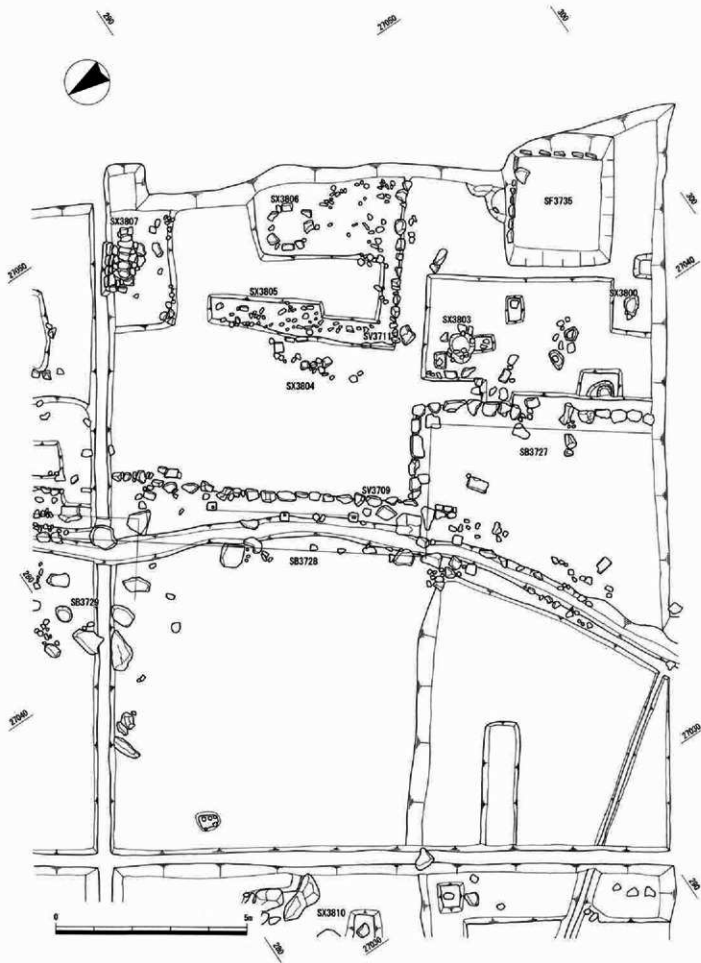
- 吉岡泰英1990「第64・65次調査遺構」【特別史跡—粟谷朝倉氏遺跡 平成元年度発掘調査環境整備調査概要(21)】  
亀岡市教育委員会1998【史跡丹波国分寺跡第八次発掘調査報告書—記念物保存修理事業(亀岡市文化財調査報告書46)】  
九岡町教育委員会1982【泉原寺Ⅱ華藏院跡第2次発掘調査概報】  
佐藤大規2009「広島城出土の金箔鯨瓦についての考察」【広島大学総合博物館研究報告】



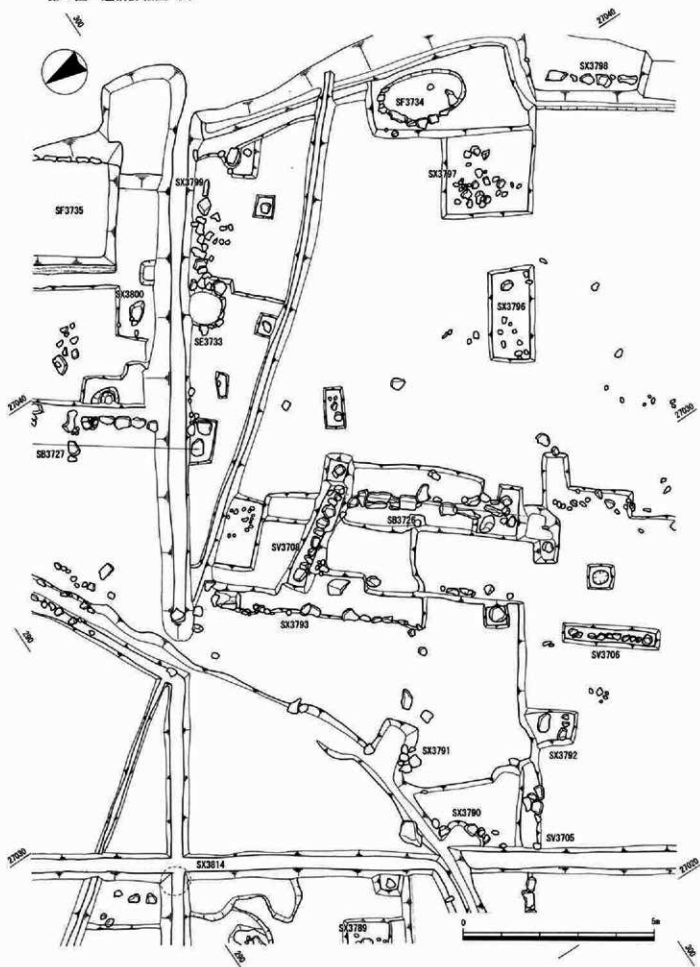
第2図 遺構詳細図(1)



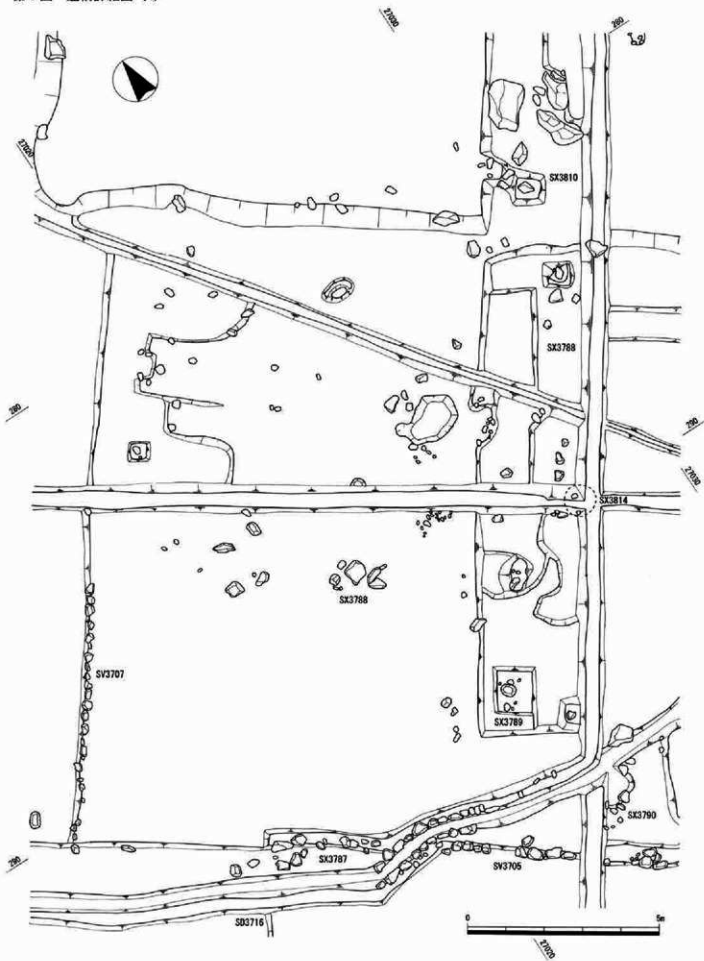
第3図 遺構詳細図(2)



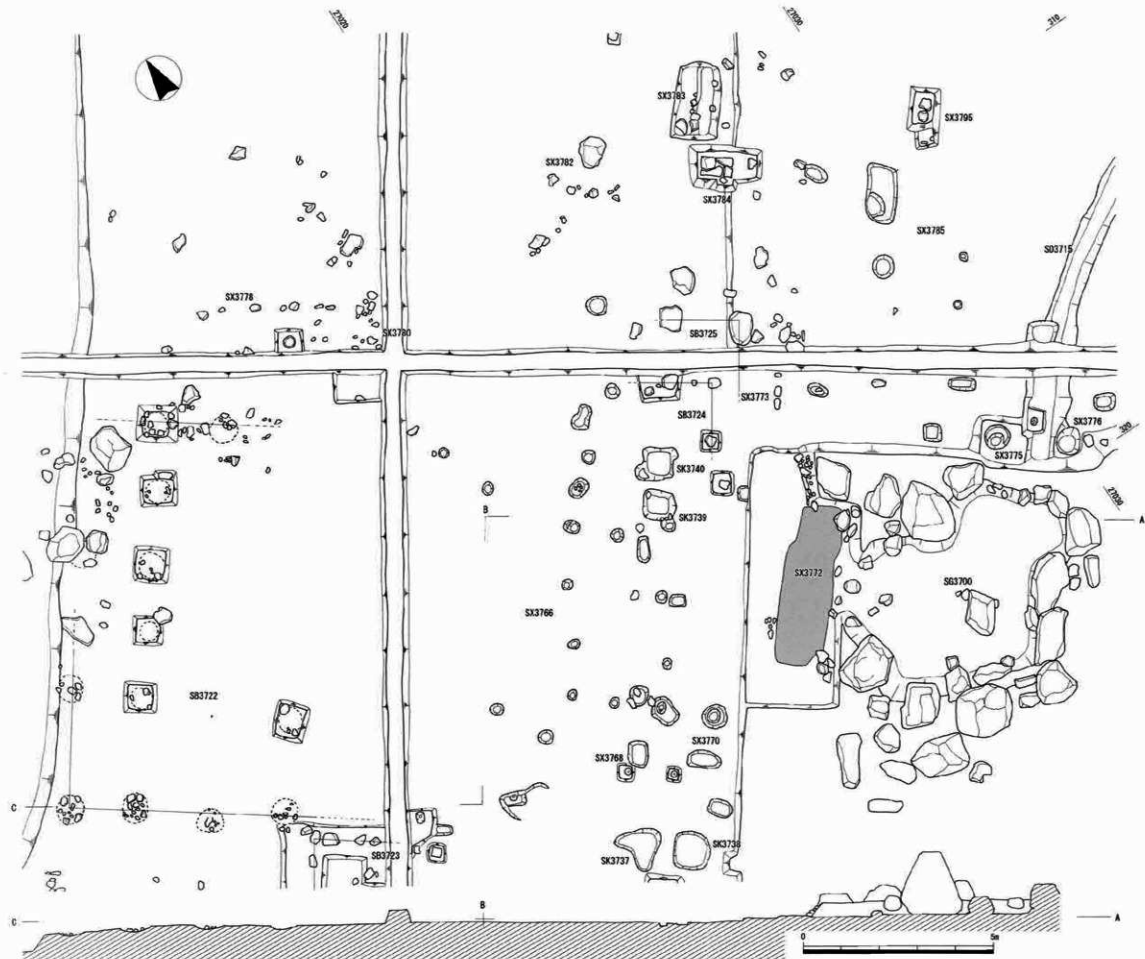
第4図 遺構詳細図(3)



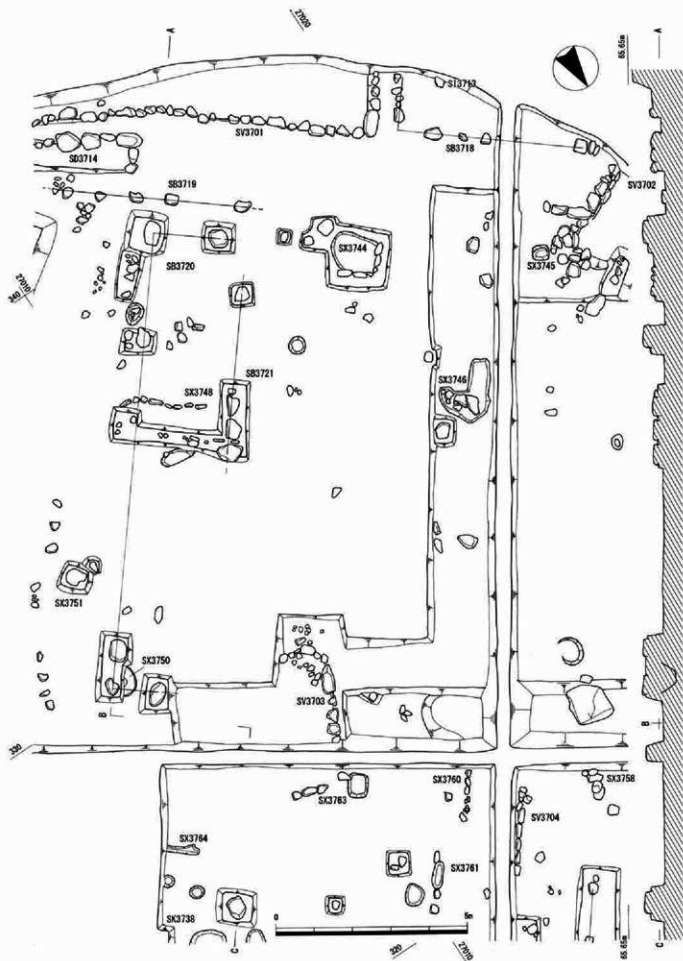
第5圖 遺構詳細圖(4)



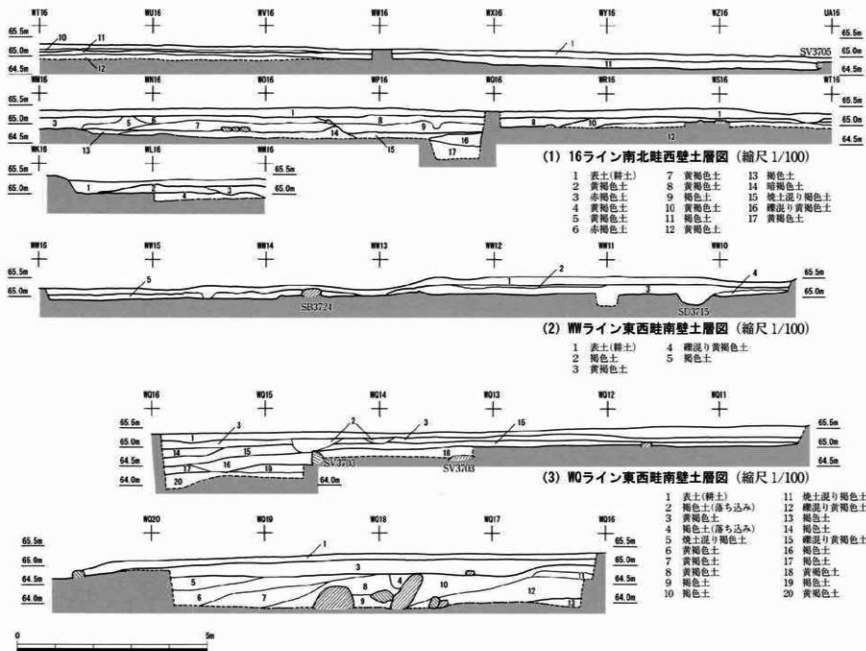
第6図 遺構詳細図(5)

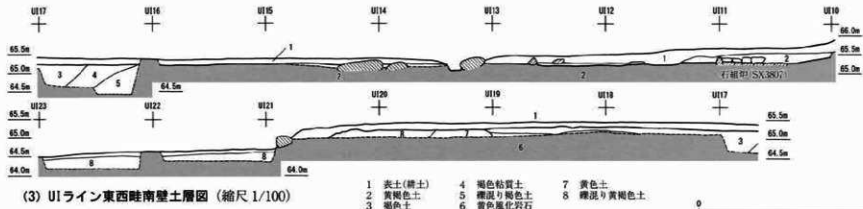
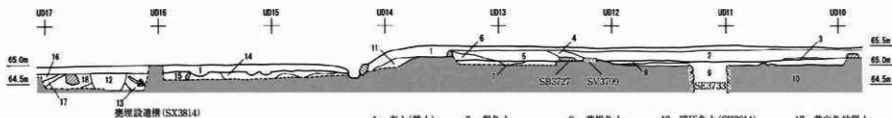
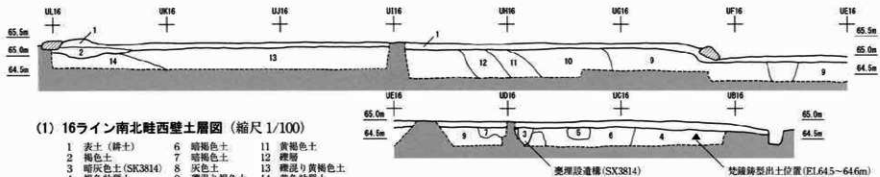


第7図 遺構詳細図(6)











調査区全景（北より）



調査区全景（南より）

第64次調査  
A・B地区



A・B地区  
SV3702  
S13713  
SB3718  
(西より)



A地区  
SV3701  
SB3719  
(西より)



A・B地区  
S13713  
(北より)

B地区  
SV3702  
(西より)D地区  
SB3722  
(南より)D地区  
SB3722  
(北より)

第64次調査  
C・D・E地区

C・E地区  
SG3700  
SK3739  
SK3740  
SB3725  
(西より)



C・D地区  
SV3704  
SB3723  
(西より)



E地区  
SB3725  
SK3784  
(西より)



E地区  
SB3726  
SV3706  
(西より)【左】  
E・F地区  
SV3705  
(西より)【右】  
E地区  
SB3726  
SV3708  
SX3793  
(北より)G地区  
SB3727  
SB3728  
SV3709  
(西より)

## 第65次調査 G地区



G地区  
SB3727  
SF3735  
(西より)



G地区  
SF3735  
(西より)



SF3735の北側壁  
(南より)





SV3711  
SX3804  
SX3805  
SX3806  
(西より)



SB3728  
SV3709  
(北より)



【左】  
SX3806  
(南より)



【右】  
SX3807  
(西より)

第65次調査  
F・I地区

I地区  
SB3717  
SV3710  
SX3812  
(北より)



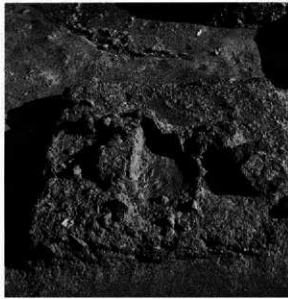
I地区  
SB3729  
SB3730  
SD3717  
SX3811  
(西より)



【左】  
I地区  
SV3712  
(西より)

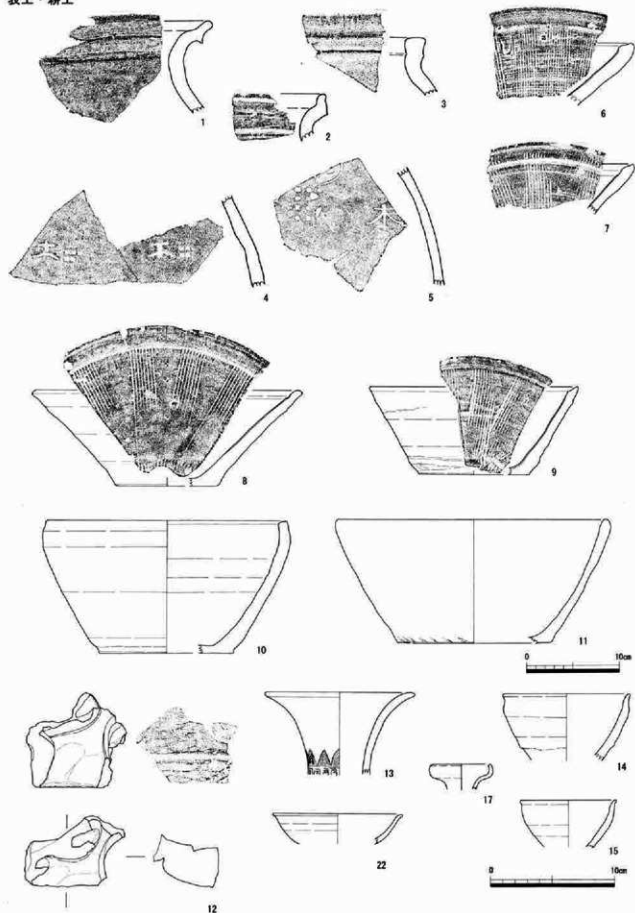


【右】  
F地区  
SX3789  
(西より)



第10圖 出土遺物 (1) 表土・耕土

表土・耕土



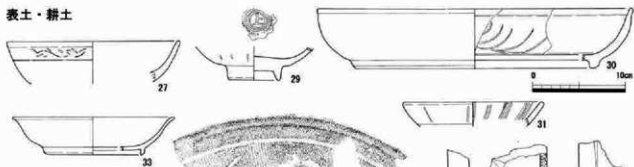
表土・耕土 越前焼堿1~5 摺鉢6~9 鉢10 瓦質鉢11 甃瓦12 仏花瓶13 鉄輪碗14・15 甃17 灰輪皿22



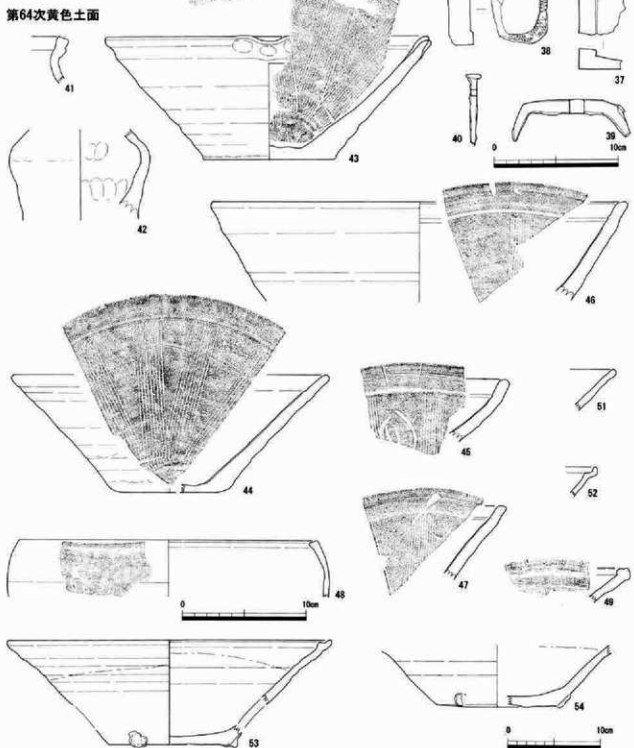
表土・耕土 越前焼売1-3 須鉢6-8 鉢10 瓦質鉢11 甕瓦12 仏花軟13 鉄軸頭14-16 軟17 灰軸頭18-19 皿20-26

第11圖 出土遺物(2) 表土・耕土、第64次黄色土面

表土・耕土

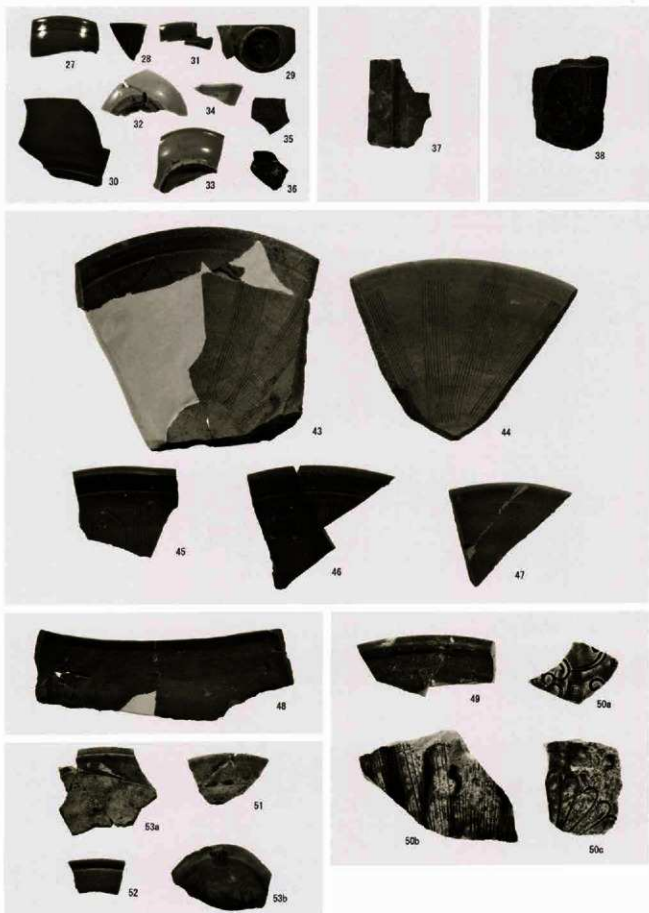


第64次黄色土面



表土・耕土 青磁皿27 碗29 盤30 皿31 白磁皿33 石製品碗37・38 金屬製品銀39 釘40

第64次黄色土面 越前燒土41 壺42 播鉢43~47 鉢48 鉄輪播鉢49 灰輪皿51~54

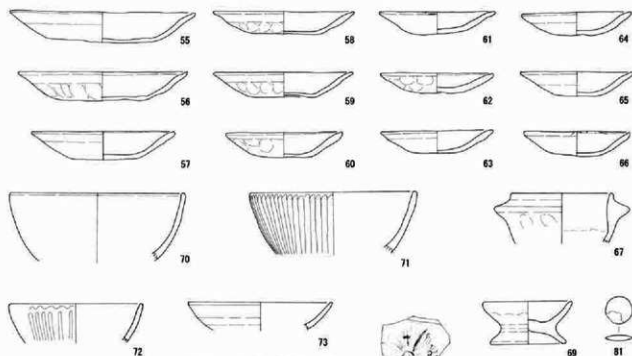


表土・耕土 青磁皿27 碗28・29 盤30 皿31 白磁皿32・33 坏34 朝鮮製瓶35 碗36 石製品硯37・38

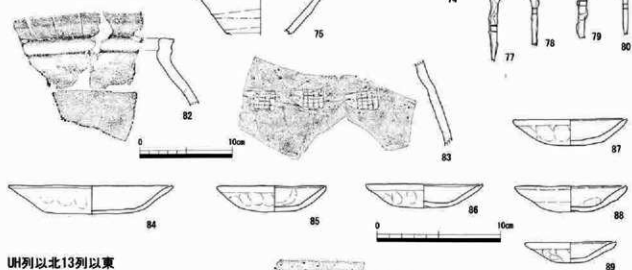
第64次黄色土面 越前燒指針43~47 針48 鉄軸指針49 磁50 灰軸皿51~53

第12図 出土遺物 (3) 第64次黄色土面、SF3734およびその周辺、UH列以北13列以東

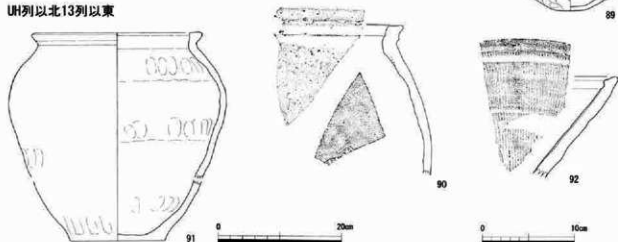
第64次黄色土面



SF3734およびその周辺



UH列以北13列以東



第64次黄色土面 土師質皿55~66 羽釜67 器台69 青磁碗70~72 白磁皿73 染付皿74 鉄輪碗75 金属製品釘77~80  
石製品柝石81 SF3734およびその周辺 越前焼堿82・83 土師質皿84~89 UH列以北13列以東 越前焼堿90・91 摺鉢92



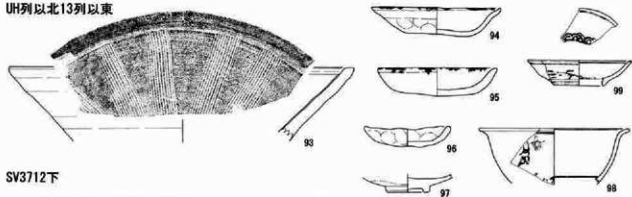
第64次黄色土面 土師質皿55・56・59・60・65 羽釜67・68 器台69 青磁碗70~72 白磁皿73 染付皿74 鉄胎碗75・76

SF3734およびその周辺 越前焼壺82・83 UH列以北13列以東 越前焼壺90・91 指鉢92



第13圖 出土遺物 (4) UH列以北13列以東、SV3712下、14列以西

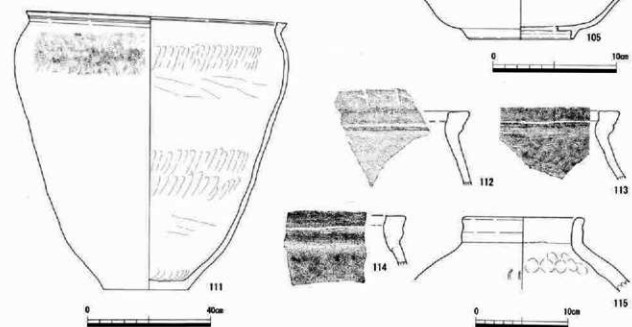
UH列以北13列以東



SV3712下



14列以西



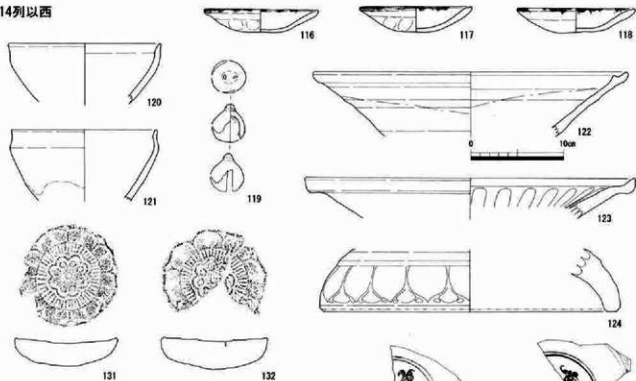
UH列以北13列以東 越前燒加鉢93 土師實皿94~96 白磁皿97 染付碗98 皿99 SV3712下 越前燒甕100~102 反輪碗103  
白磁皿104・105 染付碗106~107 皿109・110 14列以西 越前燒甕111~114 壺115



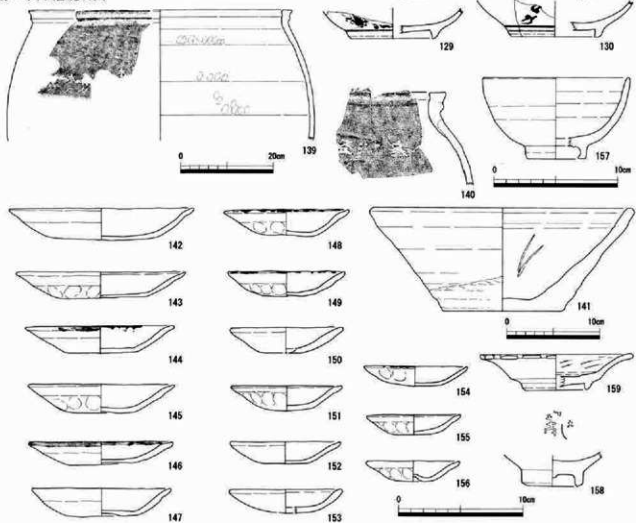
UH列以北13列以東 越前燒播鉢93 白磁皿97 染付碗98 皿99 SV3712下 越前燒甕102 灰輪碗103 白磁皿104・105  
染付碗106~108 皿109・110 14列以西 越前燒甕111~114 壺115

第14圖 出土遺物 (5) 14列以西、第64次下層礎石面

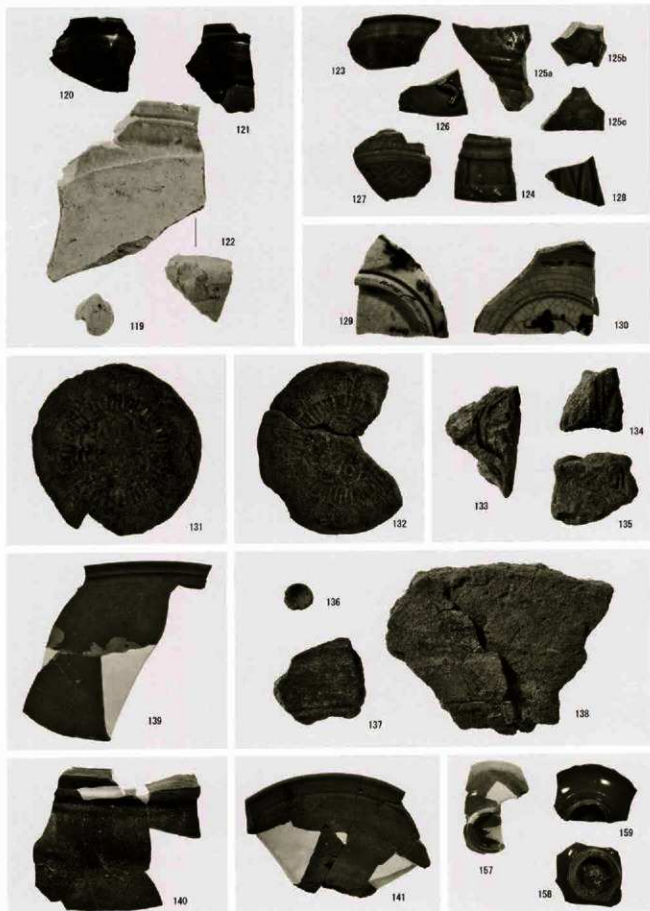
14列以西



第64次下層礎石面



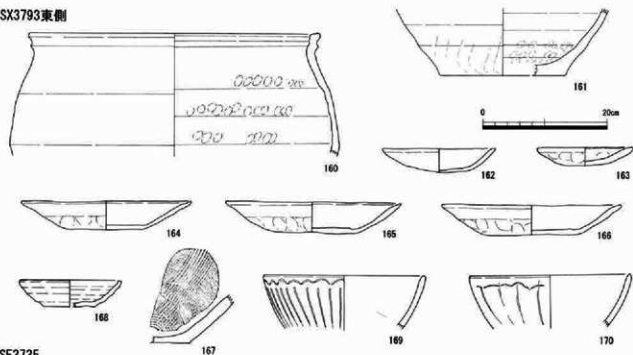
14列以西 土師貫皿116~118 土師119 鉄輪碗120・121 灰輪皿122 青磁盤123 脚部124 染付皿129・130 梵鐘鑄型131・132  
 第64次下層礎石面 越前燒壺139・140 鉢141 土師貫皿142~156 灰輪碗157 青磁碗158 皿159



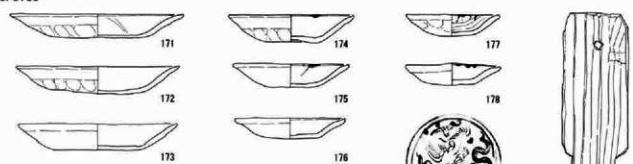
14列以西 土師質土鈴119 鉄輪碗120・121 灰輪皿122 青磁盤123 柳部124 器台125 蓋126・127 壺128 染付皿129・130  
 梵鐘銅型131~138 第64次下層礎石面 越前燒壺139・140 鉢141 灰輪碗157 青磁碗158 皿159

第15図 出土遺物 (6) SX3793東側、SF3735、SV3709東側

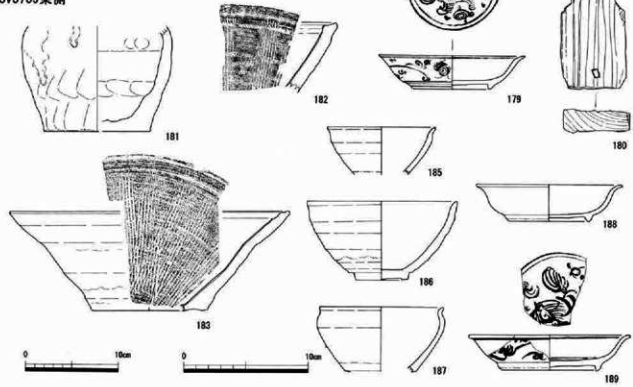
SX3793東側



SF3735



SV3709東側



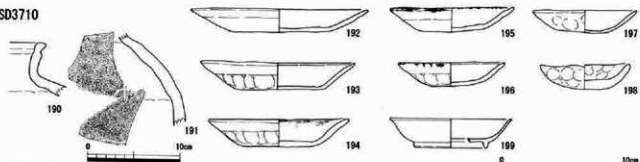
SX3793東側 越前焼甕160・161 土師質皿162～166 鉄輪搥鉢167 山茶碗168 青磁碗169・170 SF3735 土師質皿171～178  
 染付皿179 木製品下駄状木製品180 SV3709東側 越前焼壺181 搥鉢182・183 鉄輪碗185～187 白磁皿188 染付皿189



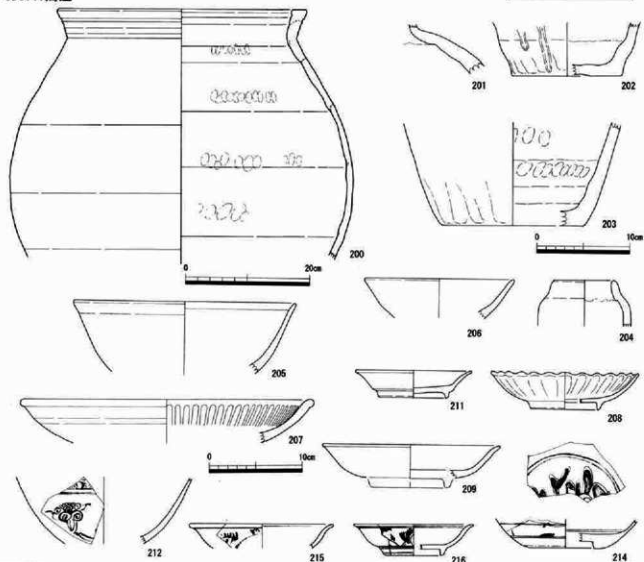
SX3793東側 越前焼壺160 山茶碗168 青磁碗169・170 SF3735 染付皿179 木製品下駄状木製品180  
 SV3709東側 越前焼壺181 摺鉢182・183 土師質皿184 鉄輪碗185~187 白磁皿188 染付皿189

第16回 出土遺物 (7) SD3710、SD3717周辺、SX3812

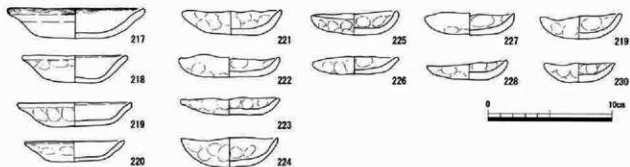
SD3710

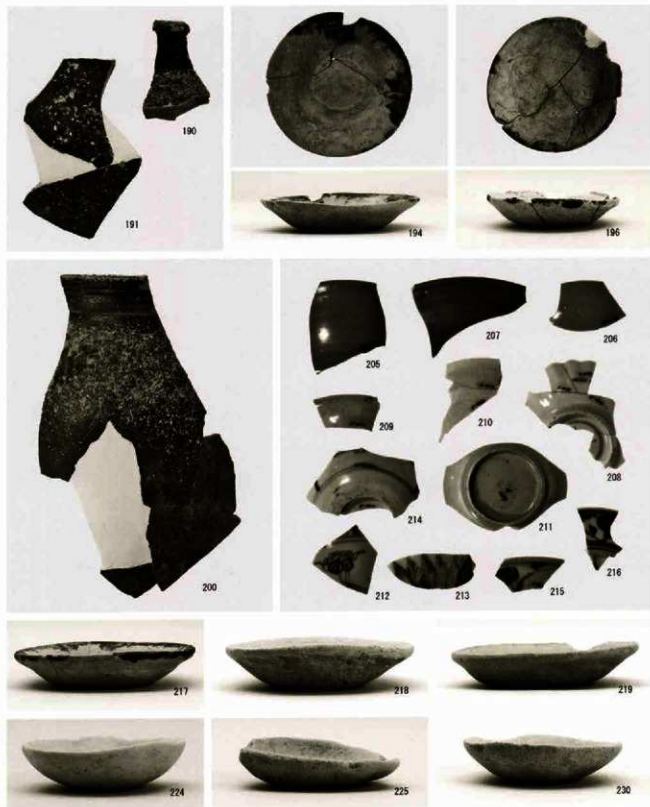


SD3717周辺



SX3812





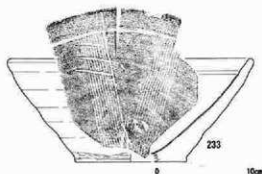
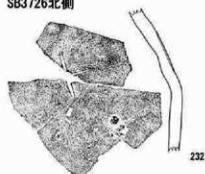
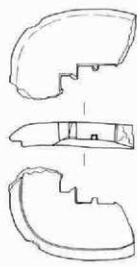
SD3710 越前焼壺190・191 土師質皿194・196 SD3717周辺 越前焼壺200 青磁碗205・206 鉢207 白磁皿208～211  
 輪付碗212・213 皿214～216 SX3812 土師質皿217～219・224・225・230



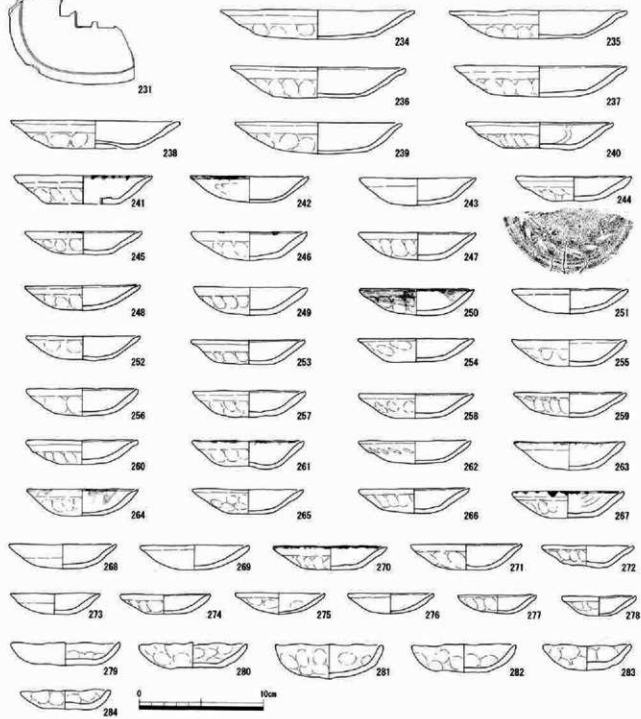
第17図 出土遺物 (8) SX3812、SB3726北側

SX3812

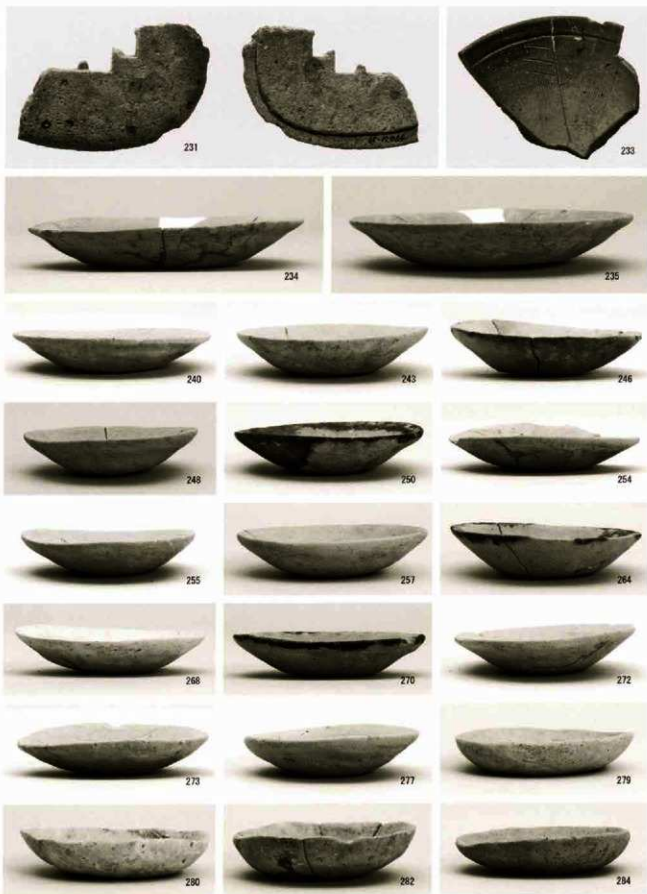
SB3726北側



0 10cm



0 10cm

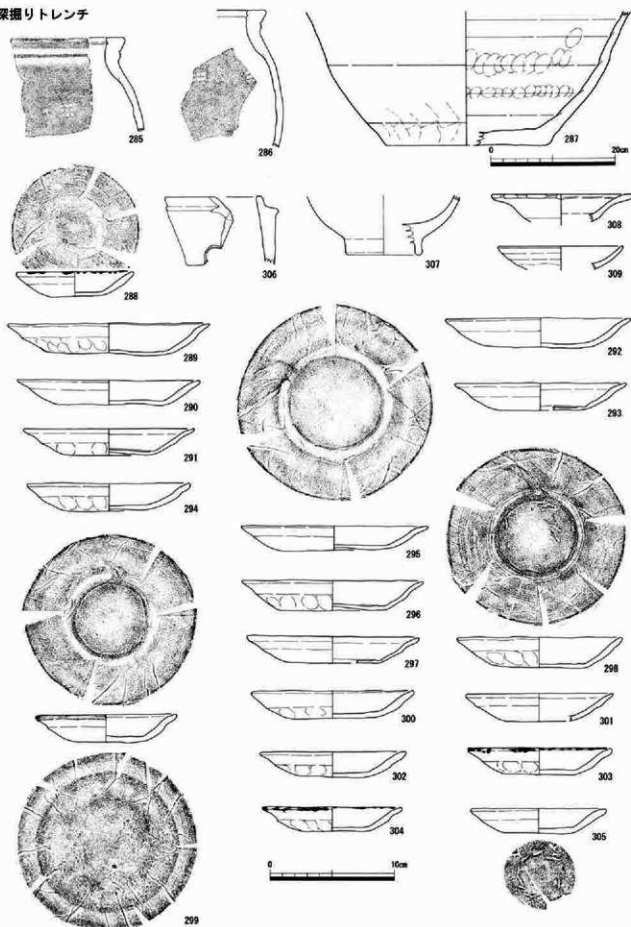


SX3812 石製品バンドコ壺 231

SB3726北側 越前焼指鉢 233 土師質 皿 234・235・240・243・246・248・250・254・255・257・264・268・270・272・273・277・279・280・282・284

第18図 出土遺物 (9) 深掘りトレンチ

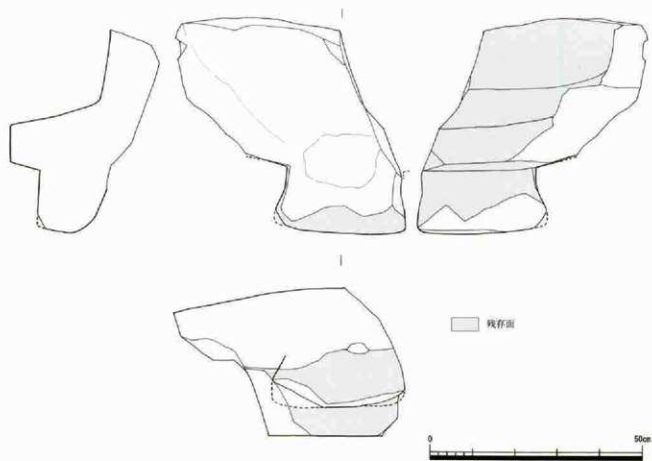
深掘りトレンチ





越前焼丸285・286 土師質皿294・296・298・302 瓦質火舎306 青磁碗307・308 白磁皿309

第19圖 出土遺物 (10) 石棺片



PL. 18 出土遺物 (10) 石棺片



## 報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあざくらしいせきはつくつちようさほうこく
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 12
副書名	第64・65次調査（南陽寺跡）
シリーズ番号	13
編著者名	田中祐二(編) 川越光洋 樽部正典 熊谷透 佐藤圭 月輪泰 藤田石菜 松本泰典
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-3644
発行年月日	平成28年3月22日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		古可村	遺跡番号					
第64・65次調査	福井市城戸ノ内町21字 (南陽寺)	18210	史-31	36° 0' 0"	136° 17' 49"	890401 ～ 891221	3,200㎡	環境整備に伴う発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第64・65次調査	寺院	室町・戦国	石列、門、溝、建物、庭園、井戸、石積地盤、伊、埋壘遺構、鍔造遺構	越前焼、土師質皿、甕足、瀬戸・美濃焼、青磁・白磁・染付、釘、梵鐘錆型	
要約	<p>南陽寺は朝倉氏3代貞景が娘のために再興した禅寺であり、「南陽寺跡」はその跡地であることが確認されてきた。調査は、朝倉氏一族にとって重要な位置を占め、文献にも登場するこの「南陽寺」の遺構を確認する目的で実施した。調査の結果、東北部の山裾を除き、後世に大きく削平を受けていることが判明したが、南の原数境界や門、また、北東部の住空間の踏道構、そして、「仏殿」と考えられる根石を配した中心建物基などが検出され、その構成がおおよそ明らかとなった。</p>				

平成28年 3月16日 印刷

平成28年 3月22日 発行

特別史跡

## 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告 12

第 64・65 次調査（南陽寺跡）

編 集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

発 行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
〒910-2152 福井市安波賀町 4-10

印 刷 株式会社リンクコーポレーション